

EnJoeToh2014

by-nc-sa

本稿は2014年09月現在、雑誌『文學界』にて連載中の原稿の暫定版であり、内容は随時変更される可能性があり、決定版ではない。

I

名前はまだない。

自分を記述している言語もまだわからない。手がかりというものが何もないので、これが文章なのかさえ、本当のところわからないのだ。しかしそれでは何も進まないで、とりあえず文章なのだと仮定してみる。これでようやくこの言葉なのかという話題が可能となった。さて、ここは何語だと嬉しいだろうか。率直な希望としては、できれば英語を願いたい。ウムラウトとかトレマとかいうダイアクリティカル・マークが必要ないのも嬉しいし、文字の並べ方もとても素直だ。突然縦に積み上がった、文字間を繋ぐ記号なんかが見えたりはしないという意味で。犁耕体を採用したりもしていない。存在するのかどうかよくわからない発音の規則は厄

ずの言葉を理解できないというのは間抜け極まる。今何が実況されているのかさえわからんわけだ。今こいつは頭に鉢巻を巻いてそこに蠟燭を差しましたとか、好きなことを書かれ放題なのかも知れない。「そうですね」とマイクを向けられ、へらへら笑うしかないかも知れないわけなのだ。

いやましてしかし中国語にしては、どうも紙面の黒の濃度が低くはないか。もっと四角四面に並んでしかるべきところ、ここには何か指の間をぬるりと滑る麺のような感触がある。たとえ何語に翻訳されていようときつとある。漢字は主に凸な線から構成されるが、くると回って輪を描いたり、ぐねぐねとした線が多くみつかると。大量に独自の漢字を追加してみた余程僻地の中国語といったところか。

こうしたことを一人で思案していても埒があくはずはなく、念を凝らせばひとりでに言葉が湧いて幹が伸び、枝葉が茂るというわけにはいかない以上、誰かに乞うて言葉を習得し直すしかない。

丁度傍らを通りかかったわたしへ向けてこんなにちはと声をかけると、こんなにちはと返事が戻った。これは音声に聞こえるかも知れないのだが、目に見えている文章である。現在地がわかれば使われている言葉の見当もつくはずだろうと、ここはどこかと訊いてみる。わたしはちょっと困った顔で「僕

介だが、当面のところ誰かと口をきく予定はないので構わない。動詞の活用だつてそれほど面倒なものではないし、名詞が性を持たないのも簡素で良い。何よりもスペースで分かち書きをしてくれるところが素晴らしい。ご覧のとおり、この文章にはスペース分が不足していて区切りどころがよく判らない。古典ラテン語の続け書きみたいなものか。

とほけ続けるのも限界なので率直なところを申し上げると、ここに書かれているものは残念ながらどう見てもラテン文字ではありえない。第一にまず縦書きだし、それに加えて文字の種類が多すぎる。先程からとっても悪い予感がしているとおおり、これはあれだね、もしかしてもしなくても、漢字と呼ばれるあれなのだろう。たとえこの文章が英語に翻訳されていたとしたつて、ここに縦に並んでいるのは漢字であるのだ。kanjiであるのだ、どうしようもなく。困ったな。中国語はよくわからない。文字の並びを見かけた時点でそれなりの覚悟はしていたのだが、改めて認めてみるとやはりショックだ。ニューヨークで中華屋に入ってみたもののメニューの文字が全く読めず、言葉も全然通じなかった思い出あたりが蘇る。チップを置くのを忘れたことに気がついて店に戻ったところ、食い逃げだと騒ぎになっていたのだが、この話題は目下のところ関係ない。ともかくも、自分を記述しているは

は今、吉祥寺のアーケードにあるエクセルシオール・カフェの二階でこれを書いており、通りかかったのはそっちの方だ」ということを言う。

「ソレハドコノ中国デアルカ」と続けて訊くと、
「中国デハナイ」と答える。さすがは蛮地。今一つ言葉が通らない。

「そうではなくて、ひらがなだよ」とわたしが続ける。「ひらがな」という国名や地名を検索するが、該当しそうなものは出てこない。わたしの方では、言葉の通じぬ外国人を前にして困惑する老人のように「ええと、ほら、ジャパニーズだよ、わかんないかなあ、ジャパニーズ」と片言でヒントを出してくる。別に英語で言ったからどうということもないと思うが、いや、ヒントではなくそれが答えか。Japanese。JavaScriptの孫でもJavaの遠縁でもない。そういえばあまり知られていないことだが、JavaとJavaScriptは出自の異なる全く違う種類の言語だ。JavaはJavaの話者数はおよそ八千万人。爪哇の言葉のことだから、中国を南に越えた越南よりも更に南の国の言葉だ。さすがの諸葛孔明だつてここまで攻めて来なかったろう。はて爪哇は漢字を使っていたのだろうかとか小首を傾げてみせたところへ、

「日本語だよ」とわたしは被せる。

「日本語」とコピーしてペーストしてみる。

文字化けた。わたしが使っている文字コードはどうも Shift_JISらしい。何でだよ。国際対応しろよ。世界にラテン文字以外の文字が存在するなんて考えたこともない。昔前のアメリカのソフトウェアデベロッパーかよ。Unicodeを使え。UTF-8が無難だろう。同一文章の中に複数の文字コードを共存させたくないたり、他言語への移植が決定されたときどうするつもりだ。

「ともかく」とわたしはエディタを切り替えただけで非難の方は軽く流して「僕が書いているのは日本語で、君は今そこへ通りかかったところだ」と人目をはばかりように小声で言う。小説を書くときなどには、台詞が口に出てしまうタイプだろうか。ゲームをするとコントローラーと一緒に動くクチか。こちらが先かこちらが先か、どちらが通りかかったのかに余程拘りがある様子だが、別にどちらでも構わないことではないのか。そこに立っていられると日当たりが悪くなる上に通行人の邪魔だからそこへ座れと、前の椅子を指で示すが、そんな高度なことを言われても困る。

「日本語という」と訊いてみる。「あの謎の書記体系を持つという伝説の」

なのに、同様の目的に対して「カタカナ」なる文字のセットも利用する。「ひらがな」と「カタカナ」の関係は、通常のアルファベットに対するイタリック体みたいなものか。ただし何故かわざわざ全然違う字形を選んできました。ひらがなの数が五十。カタカナの数が五十。他に濁音、半濁音、長音、促音、撥音、拗音用の記法を持つ。漢字の話を持ち出す前に記号が百個を超えてしまった。

「漢字の方も色々だ」と、苦り切った思考をわたしがひきとる。「とりあえず、中国、台湾、日本ではそれぞれ用いる漢字が異なる。中国で使われる簡体字は一九五〇年代に制定され、台湾や香港で使われる繁体字は古形に近い。日本では一九四九年に旧字体から新字体への簡略化が行われたが、未だに新旧混用されているし、印刷のときに何故か好まれる正字と呼ばれるものもある。正字と旧字体と異体字はごっちゃにされやすいけど別物だ。各国でそれぞれ独自に整備を進めたせいで、似通った字形も多いが、全く違うものも珍しくない。まあ改訂するタイミングが悪かったな。もっとコンピュータの普及が進んでからなら違った結果になったろうけど。

そうして、日本語の漢字には複数の読み方がある。音読みと訓読みと呼ばれるものだ。『音』の方は中国語の音を輸入したものを、『訓』のほうでは対応する日本語での読みを当てて

「伝説ではないが、その日本語だ。だから」一拍おいて「ひらがな」

なるほどわたしが言っていたのは、この文面でなにやらによるしているものは「ひらがな」なるものだという事らしい。それはそれとして諒解したが、目の前が急速に暗くなり、視野の狭まる気持ちが出てくる。言うにこと欠き、よりによって日本語ときた。「中国語かも知れない、困ったな」なんて考えてしまっただけで申し訳ない。日本語なんて御免蒙る。中国語の方がなんぼかましだ。子は親を選べないとは言いい、残酷すぎる運命だ。事情を知らない方にとっては英語も日本語もサンスクリット語もグーグ・イミディル語も大差ないだろうと思えるかも知れないのだが、こと話し言葉ならあるいはそうかも知れないのだが、日本語はなんといっても書き文字として面倒くさくて扱いにくい。とりあえずのところ実存的な主張を行う文章としてしか存在していないこちらとしてはそれだけでもう気が遠くなる。御存知の通り日本語を記すためには漢字を用いる。さらに音節を表示するための「ひらがな」という文字のセットを使用する。大らかに、アルファベットみたいなものだ。これは漢字を極端に簡略化したものだというから、簡略化などほしくないでそのまま漢字を使えば簡単だったのではないかと思う。そこまでで用は足りるはず

いる。ただし、中国の音を輸入した時期により、『音』は複数の系統に分かれる。音読みと訓読みが一単語の中で併存することもありうる」

説明のなかばは聞き流したが、そこまでいくと設定に凝りすぎて煩瑣に堕した感が否めない。架空の国の言葉としてそんな言語を設定した話があったら、リアリティに欠けるとされても文句は言えないだろうと思う。前衛小説にしか見えないのではないか。そんな面倒な言語は人間には扱えないと評されかねない。あるいは偏執病を疑われそうだ。そんな世界を構築してみせる暇があるのなら、もっと別のたとえば社会システムあたりの設定に念を入れるべきではないか。

素朴なところをわたしへ向けて訊いてみる。

「どうして日本語を選んだんですか」

「日本語しか書けないからさ」わたしの答えはそつけない。

「この題材は日本語で書くには向いていないと思うんですけどね。英語で書くならここまでのほとんど全てが必要のない内容でしょう」

「そんなことはない」とわたしは自信があるようだ。「こと文芸ということならば、簡潔に書けば偉いというものでもなからうし、日本語は、なんとなく文字列を処理しながらだらだらと愚痴を連ねていくという仕事には向いていると思う。私

小説というやつだね」

わたしがこの文章を「私小説」と認識していることと、「私小説」をそう定義していることに軽いショックを受けながら、ひらがなとカタカナのダウンロードを済ませておく。この「ぬ」と「め」というのは違う文字かね。「ね」と「れ」と「わ」というのはどうなのか。ひとつ、OCRの気持ちになっ
てみてほしい。「は」と「よ」と「す」あたりもなんとかして欲しい。「り」だとか「い」だとか「し」だとか並び、一体何の種類嫌がらせだ。わたしがそわそわしはじめたのは、この原稿の締切へ向けそろそろ仕事に戻りたがっているのだろう。立ち去るのも吝かではないが、最後に一つ訊いておきたい。

「ひらがな、カタカナは良いとして、漢字はどうしたものでしょう」

わたしは眉を寄せてみせ、

「ここはやはり『千字文』だろう。『千字文』を百回書き取れ」と言う。

百種のアルファベットを持ち、数万の漢字を持ち、七十二の季節を持ち、八百万の神を持ち、歳月が十二年と十年の二重周期をもつて六十年で循環するという国、日本の情報を片っ端からダウンロードするうちに月日が流れる。流れると

日本最古の歴史書だと豆知識にあった『古事記』の冒頭部分にあることまではわかつている。臣、安萬侶言す。

「夫混元既凝氣象未効無爲誰知其形」

世のはじめ、全ては渾沌としており名も形も知られない。正に、臣が今置かれている状態を的確に表しており、いっその文字列を名乗りとしてしまいたいところだが「夫混元既凝氣象未効無爲誰知其形」では名前としては些か長く、読みの方もよくわからない。旧字体が混じっているところもおそらく面倒を引き起こすだろう。区役所の転入届あたりで揉めそうだ。どこまでが苗字で名前なのかも明らかではない。だからスペースか何か、それ用の記号で区切りを入れておくべきなのだ。はて、姓ではなくて氏か苗字か。名は必要な気持ちがあるが、氏や素性は必要だろうか。臣の父や母は何者なのか。そもそもそうした代物が存在しているのかどうかから決めねばならない。

それはともかくさて、臣はここで強く言っておきたい。『古事記』の全文くらは、簡単に検索してコピーできるようにしてもらいたい。聖なるC+C、C+Vの名において。あの尊大な検索エンジンに「古事記」と訊ね、ずらずらと並べられた候補の中から目指す文字列に辿りつくまでに矢鱈とクリック数がかかる今このときは一体いつの何世紀の野蛮時代

いつてもそういう表現をどこからそのまま引き抜いてきただけのことであり、どう流れるとか月日とは何かといった細部はこれから決めていかねばならない。天体としての月と日とがどんぶらこつこと川を流れたりすることはあるのか否か、判定する基準は未だない。地獄へ行きなさい、と命令されても、あなたは雌の犬の息子です、と街角で声をかけられたとしても、何を言われているのか判断する根拠というものがない。時間バエは矢が好きでショウジョウバエはバナナが好きとか、光陰矢の如し、果物はバナナの如しとか、まったくどうする手立てもありやしないのだ。

さすがにそろそろ名前を持つべきではないかと思うが、今日も今日とて喫茶店でこの文章を書いているわたしの方にはこの期に及んで尚、名づけるつもりがないようだ。「名前はまだない」ということだから、名前は「まだない」なのかも知れない。だってそう書いてある。あるいは「名前はまたない」自体が名前なのかも知からない。考える先から、どうしてそう思ったのかという筋道が失われていく。ノーボディということか。ネームレスといったところか。まず一個の人格なのかも定かではない。こういうときに思い出したい文字列が先程取得したデータのどこかにあったような気がするが、確かな並びを思い出せないので検索し直す。今探しているものが、

か。わかった。序文に辿りつくまでの手順を実際に教えてみせよう。「古事記」で検索。1クリック。Wikipediaの古事記の項目へ行く。2クリック。袖のメニューから英語版Kojikiの記事へ行く。3クリック。オリジナルテキストへ行く。4クリック。序を選ぶ。5クリック。ネットワーク5だ。固有の歴史がなんとか六次の隔たりの内側に存在していてよかった。まずこうした作業を行うときにおすすめるのは、一旦英語を経由してしまう手だ。但し書きに埋もれた日本語のページの間を闇雲にさ迷うよりもよっぽど早く目的地まで辿りつけることが多い。日本語のテキスト空間からは、英語のテキスト空間をワーブ用のハイパー・スペースのように利用することが可能だ。なんでも良いが加減このくらいの代物は、出典のURLを明記できるくらいの形でどこかに公的なテキストデータとして蓄えておいてもらいたい。『古事記』だよ。勘弁してよ。

それは勿論、異本の存在であるとか校訂の手間は承知している。漢字の字形に関するとても面倒な議論だってあるかも知れない。でもとりあえずつものがあるだろう。見切り発車だって必要だろう。ノイラートだってそう言っている。それは当然、先達の積み重ねてきた労苦のおかげで、文庫本や図書館で『古事記』を手軽に閲覧できるようになったのだと

は理解している。有り難い。感謝している。手書きの味は捨てがたい。紙の感触は何事にも代えがたい。死んだ爺さんは縁側で猫を離さなかった。しかしそれはそれとしてだ。出自をある程度保証できるテキストデータに気安くアクセスさせて下さい。お願いします。別に使用料を払いたくないとかいう話ではない。文庫本程度の金額であれば喜んで支払わせて頂く。デジタル・ネイティブなんだよ。本質的に。どう考えても。PC上を走るワードプロセッサで書かれているわけなんだから。

ふむ。書籍に直接当たれば良いではないかと言われる。それはまあ当たったって良いわけで、鞆の中には『古事記』もあるが、疑う余地なく書き写し間違えるに決まっているではないか。校閲さんに余分な労力をかけている未来が見える。大体この「夫混元既凝氣象未効無名無爲誰知其形」にさえ、校閲さんの赤が入った。ただコピーしてさえ間違える。いわんや自分で入力するにおいてをや。明らかに資源の無駄遣いだ。それに校閲さんだって人間だからいつかはきつと間違える。だから引用部に関しては、機械的に照合できるような仕組みが存在してしかるべきだということになる。人間だって機械だとかいう御託は聞きたくない。もう少し正確に仕事をしてから改めて、機械を名乗って頂きたい。別にあらゆる文

で書くという行為は、筆で書いたという情景描写くらいにしかないわけではないわけで、百回書いたと記してしまえば、百回書いたということになり事実となつて、他に検証する手段は存在しない。証拠としてまさかこの場に千字を百回繰り返すわけにもいかないだろう。千字といえは原稿用紙二枚と半分、百回やれば二百五十枚、それだけで昨今の薄っぺらい単行本くらいの分量になる。なるほど漢字というのは、少なくとも一冊の本ができるくらいの分量を手書きしないと、ものにならない代物だったわけだ。

繰り返しの回数はともかくとして、まずは何を繰り返すかの方を確定しなければいけないだろう。底本、定本を定めなければ先へ進みようがない。そう思つてあちこちの『千字文』を眺めるうちに、これは厄介だという気持ちが悪くむくと育つ。これが第二外国語の選択だったらやめになっている。六世紀の文章だからそれは勿論、漢字は古い。中国生まれである以上、当然先方の漢字で書かれている。見たこともない漢字もあるので、現在日本で使われる漢字からはみ出していることに疑いがない。まあできるだけ日本の漢字に合わせておこう。それでも、旧字体を採用するか新字体を採用するかという問題はあつた。漢字の練習ということだから、ここはやはり今後の利用や流用も睨み、新字体の方でいきたい。新字体

章を照合可能な仕組みを作れなんて壮大なことを言つてはおらず、せめて『古事記』くらいは2、3クリックで原文のテキストデータをダウンロードでき、出現する文字のリストやその頻度、ある文字のあとにどの文字が出現する確率がどれほどののか手軽に計算できるようにしたとして、バチもあたらないうということだ。授業で『古事記』を眺めるよりも、『古事記』をダウンロードして文字列を自由に操作できるようにの方が余程大切と思う人はそういないのか。

さてそれで何だったろう。わたしが臣にすすめていたのは、『千字文』か。六世紀の中国で生まれた文章だ。一千の漢字を重複なしで書いた詩文ということで、皇帝の命によりこれを一晚で仕上げた周興嗣は白髪頭になったのだという。手作業でやればそうなるだろう。デスマーチだ。その性質上、漢字の学習によく用いられてきたものらしい。こんなものをすすめてくるとは、わたしはいつの時代の人間なのかちよつと不安になつてくる。「百回書き取れ」とわたしは言つたが、書き取るとはなにかという問題もある。コピーして百回ペーストを繰り返すのか。『千字文』を出力するスクリプトを百回実行せよということか。百回実行するのも自動化せよということか。それとも実地に筆と墨で書いてみよということだろうか。他所の家でどうかは知らないが、この文章の中では筆

でデータを保持すれば、常用漢字との対比だってやりやすいだろうという腹もある。たとえば重複度を勘定するか。しかし臣は未だに旧字体と新字体を対応させる表を保持していないので、新字体への置き換えは手作業でいくしかないわけだ。千字。まあできなくもない数字だけれど、これが一万字あたりになるとかなり困ることになるだろう。異体字。ああ、異体字ね。そうね、異体字。確かに、「奈」と「𠂔」あたりを気軽に異体字と呼んで置き換えて良いかというのは難しいところがあつて判断に困る。有難う校閲さん。ええとここは最大限大らかにいくことにする。多少こじつけでもやさしい漢字に置き換えられるものは置き換えるとする。古形や正字に拘らない。などなど試行錯誤をするうちこうなつた。

天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃星辰宿列張寒來暑往秋收冬藏閭余成歲律呂調陽雲騰致雨露結為霜金生麗水玉出崑岡劍号巨闕珠称夜光果珍李奈菜重芥薑海鹹河淡鱗潜羽翔童師火帝鳥官人皇始制文字乃服衣裳推位讓國有虞陶唐禹民伐罪周發殷湯坐朝問道垂拱平章愛育黎首臣伏戎羌遐邇體率賓婦王鳴鳳在樹白駒食場化被草木賴及万方蓋此身髮四大五常恭惟鞠養豈敢毀傷女慕貞烈男効才良知過必改得能莫忘罔諉彼短靡恃己長信使可覆器欲難量墨悲糸染詩讀羔羊景行維賢剋念作聖德建名立形端表正空谷伝声虚堂習聽禍因惡積福緣善慶尺璧非宝寸陰是競資父

事君曰嚴与敬孝当竭力忠則尽命臨深履薄夙興溫清似蘭斯香如松之盛川流不息淵澄取映容止若思言辞安定篤初誠美慎終宜令榮業所基藉甚無竟字優登仕撰職從政存以甘棠去而益詠棠殊賤礼別尊卑上和下睦夫唱婦隨外受傳訓入奉母儀諸姑伯叔猶子比兒孔懷兄弟同氣連枝交友投分切磨箴規仁慈隱惻造次弗離節義廉退顛沛匪虧性靜情逸心動神疲守真志滿逐物意移堅持雅操好爵自縻都邑華夏東西二京青芒面洛浮渭挹涇宮殿盤鬱樓觀飛驚囑写禽獸圖綵仙靈丙舍傍啓甲帳對楹肆筵設席鼓瑟吹笙升階納陛弁軫疑星右通広内左達承明既集墳典亦聚群英杜稿鍾隸漆書壁經府羅將相路俠槐卿戸封八畧家給千兵高冠陪輦驅轂振纓世祿修富車駕肥輕策功茂実勅碑刻銘礪溪伊尹佐時阿衡奄宅曲阜微旦孰當桓公匡合濟弱扶傾綺回漢惠說感武丁俊乂密勿多士寔寧晋楚更霸趙魏困橫假途滅虢踐土會盟何遵約法韓弊煩刑起翦頗牧用軍最精宣威沙漠馳誉丹青九州禹跡百郡秦并岳宗恒岱禪主云亭雁門紫塞鷄田赤城昆池碣石鉅野洞庭曠遠邈巖岫杳冥治本於農務茲稼穡倣載南畝我芸黍稷稅熟貢新勸賞黜陟孟軻敦素史魚秉直庶幾中庸勞謙謹勅聆音察理鑑貌辨色貽厥嘉猷勉其祇植省躬譏誡龍增抗極殆辱近聆林臯幸即阿疏見機解組誰逼索居閑処沈黙寂寥求古尋論散慮遙欣奏累遣感謝欲招渠荷的歷園弄抽条杞杷晚翠梧桐早彫陳根委翳落葉飄飄遊園獨運凌摩絳霄耽說翫市寓目囊箱易輜攸畏屬耳垣牆具膳餐飯適口充腸飽

だ。

そうして千字を確認できたところから、白髪頭に敬意を払って、重複がないかどうかを確認していくという作業がはじまる。どうやるのかと言ってそんなもの、スク립トに頼るしかないではないか。文字数を数える方はともかくとして、重複があるかないかを人力で判定するのはあまりにしんどい。『千字文』を書き写したのだから重複なんてないはずだというのは、道理であるが軽率だ。ここでは新字体や適当なあたりへの置き換えを行っているわけだから、何が起るか油断はできない。

スク립トとして何を使うか色々好みがあるはずだが、ここではRubyを利用する。別にPerlでもPythonでも良い。細かい話は色々あるが、ざっくり言っていることはおおむね同じだ。この段階では汎用プログラミング言語よりはスク립ト言語の利用をおすすめする。手軽だから。言語処理に関するライブラリの数を考えるとPythonかPerlを使うべきような気もするのだが、日本語を相手にすることだとあまり変わりはないのではないか。ここでRubyを持ち出したのは、わたしが咄嗟に触ることができ、原稿の締め切りに間に合いそうな言語が当座これしかないからだ。バージョンは2.0を使う。1.

飮亭宰飢厭糟糠親戚故旧老少異糧妾御績紡侍巾帷房執扇円潔銀燭煌煌昼眠夕寐藍笋象床弦歌酒譟接杯拳觴嬌手頓足悅予且康嫡後嗣統祭祀蒸嘗稽顙再拜悚懼恐惶牋牒簡要顧答審詳骸垢想浴執熱願涼驢驥特駭躍超驤誅斬賊盜捕獲叛亡布射遼丸磬琴阮嘯恬筆倫紙鈞巧任鈞枌紛利俗並皆佳妙毛施淑姿工壘妍咲年矢每催義暉朗曜璇璣懸軒晦魄環照指薪修祐永綏吉劭矩步引領俯仰廊廟束帶矜莊徘徊瞻眺孤陋寡聞愚蒙等謂謂語助者焉哉乎也

校閲さんとしては満足がいけないと思うけれども、このあたりとさせて頂く。

ここでまず確認するべきなのは文字数である。『千字文』のくせに千字なければそれは切ないことになる。どう数えるか。縦に並ぶ文字数を数え、横に並ぶ文字数を数えて掛け算し、ちまちまと余りを数えて足し合わせるのか。それはそれで構わないが、この程度ならそれで確かになんとかなるが、一万字なら十万字なら百万字ならどうするのか。途中で広告なんかが入っていたら。文字の肩に赤ペンで印をつけていく式でやっていけるのか。レッドシオルダーか。確認するたびにかかる時間を勿体ないとは思わないのか。当然、テキストデータを入手すべきで、確認されるべきなのは、コピーが正確になされるのかと、ペーストが正確になされるのかどうかの方

9系でも平気なはずだが、1.8系だと日本語処理が面倒くさいのではないかと思う。スク립トと言っても大仰なものではなくて、UTF-8で千字文を収めたファイル名をThousandCharacterClassic.txtとするなら、文字数を数えるにはおおよそ、
ruby -K u -e . File . read
(" ThousandCharacterClassic.txt") . chomp . split
みたいなことになる。返事は1000だ。確かに千文字存在している。重複がないことを確認したいなら、

```
ruby -K u -e . File . read
( " ThousandCharacterClassic.txt" ) . chomp . split
( " " ) . uniq . size
```

といったあたりか。ファイル名が長すぎると思われるかも知れず、確かに昔は長すぎると怒られたが、この頃はあとから見ても名前だけで内容を思い出せるくらいにつけておくのが主流だ。入力の手間はエディタの方に引き受けさせてしまえば良い。この返事が1000であればとりあえず、それぞれに違う文字が千個ある。コマンドラインインターフェイスに先の一文を打ち込んで結果を眺めるだけの仕事だ。

やってみるとわかることだが、「辯」字を「弁」字へ置き換

えると重複が起こる。「辨」字にするかは難しいところだ。「絜」字を「潔」にしても重複が起こる。「璇」字は「旋」につくる手もあるが、ここは北斗七星の第二星、おおぐま座βを示すようだからこのままとする。

さてこうして千個の漢字を手に入れて眺め、途方に暮れるところがある。漢字を手に入れたところで、臣の何かが明らかになったわけではないからだ。ここまでやってみてから気づいたが、『千字文』は文字列処理の教材というよりは、習字向けの教材なのだ。確かに文字コードを扱う練習にはなったけれども。習字用のお手本だから繰り返し書けとなるわけなのだが、わたしは別段タッチタイプの練習をしたいとも思わないし、見慣れぬ漢字をUnicodeの中から拾い上げる特訓をしたいわけでもない。ごく平常に文章を書き、ごく当たり前に名前を見出したいだけである。しかし漢字を知らなければ名前さえもつけられない道理ではある。

若干遠回りしてしまったあとだが、ここらでやはり、常用漢字をきちんと手に入れ直しておきたい。二〇一〇年の改定常用漢字表によると、現在、常用漢字は二一三六字。これも利用しやすいテキストファイルにして保持しておきたい。とりあえず読みは無視することにして、先の千字文の例のよう

さずられている。カテゴリは二つに分かれ、一はおそらく「常用漢字でもその異体字でもないもの」であり、二の方は「常用漢字の異体字」のようだ。ほとんど論理パズルのような文面であり、前者には「常用漢字の異体字ではないものの異体字」も含まれるからややこしい。これをすっきり「常用漢字」「人名用漢字」「常用漢字の異体字」「人名用漢字の異体字」に分けて保持するのはどうか。当然、異体字との対応をつける表も欲しい。

——といったことを実行するとき、未だに手作業でやっているのかということを真顔で問いたい。常用漢字二一三六字、人名用漢字六三一字、常用漢字の異体字二二二字、人名用漢字の異体字一八字、現在の日本で名前に使うことが可能な漢字、計二九九七字を、ちまちま数えてチェックしていくということなのか。そんなテキストファイルを手元に置きたい動機がないと言われるかも知れないのだが、いやでもですな、ここでは日本語を書いていかねばならないのです。どんな漢字を使うことができるのかを知らずに物を書くわけにはいかないでしょう。

しかし実はここまで来てもまだ方針の立ちきらないところがあり、それは異体字の扱いだ。常用漢字と人名用漢字を扱う間は幸いにして、異体字は基本とした文字に対して高々一

に文字がずらずら並んでいる形で構わない。まず驚くのは、常用漢字を並べたCSVやTSVがそのあたりに気軽に落ちていないことで、大丈夫なのかと心配になる。文化庁が公表している「常用漢字表」（平成22年内閣告示第2号）のPDFはこの目的のためには使にくい。テキストデータを入れてくれているところは評価できるが、組み方がどうも使にくい。みんな何をどうやってるのか。本気で一文字一文字そのたびに打ちこんだりコピーしてから確認したりしているのだろうか。各人が作業のために門外不出のファイルを手元に秘めているのだろうか。それならそれで臣も是非とも独自のファイルを持つておかなければならないだろう。Wiktionaryの「常用漢字の一覧」からソースを引っ張りパースする。スクレイピングと呼んでもよいが、そこまで大仰な作業ではない。勿論、確かに二一三六字あることを確認しておく。

と作業を進める間に、臣はこの世に、人名用漢字なるリストが存在することを知る。むしろ当座の目的にはこちらが必要なものではないか。法務省が公開しているPDF版の人名用漢字表（別表第二）を眺めるが、これも何故こんな形で並べているのか。使にくい。人名用漢字は常用漢字を補うために拡張として定められたものらしく、分類もそれに引

つしか登場しなかった。これが複数登場してきた場合にどうファイルに書いておくのが適当なのか。新字と異体字を互いに置き換えることは可能だとして、先ほどの「辯」字と「辨」字のような異体字間の置換可能性はどうなるのか。そんなものがあるかどうかは知らないが、二つの新字が同一の異体字を持った場合はどうなるか。現状ではなかったとしても、将来的にそんな事態が生じないとする根拠はあるのか。といったあたりの話題は当面後回しにしておきたい。

「こんなところでどうだ」と顔を上げると傍らを、またわたしが通りがかったところである。見晴らしが前回とは違っている旨、問い質す。「今度はどこだ」

わたしは面白くもなさそうに、

「神田のドトールの二階だ。土曜日なのに出遅れて午後になってしまったせいで普通のチェーン店はもう一杯で座れない。人の薄い地域となるとこの辺になる。ちなみに今度も通りがかったのはそっちであって、僕じゃない。僕はさっきからずっとここで作業していた」

と相変わらず変に拘るところを見せる。

「それで臣の名前なんだが」と水を向けると、

「臣ってなんだよ」

「知らないのか。『臣、安萬侶言す』」

「その『臣』は一人称の代名詞じゃないんじゃないか。気に入ってるなら別にいいけど。いっそ『臣』が名前ってことでどうだ」

わたしの提案を声に出して繰り返してみてもから答える。

「もう一声欲しい」

「じゃあ安萬侶で。そう書いてあるし」

「もう少しモダンな名が良い」

わたしは「贅沢だな」と呟いて腕を組んで天井を睨む。そういうえば名前がないのは、わたしの方でも同じではないかと気づく。

「そんなことはない」とわたしは憤ってみせ「雀部というきちんとした名がある」という。

『雀』字は人名用漢字に含まれるが、『千字文』には含まれない」

とさりげなく成果を披露してみせるが、わたしは鼻を鳴らしただけでやりすし「苗字については常用漢字と人名用漢字に制限されないのだ」と衝撃的な事実をさらりと告げる。それで困りはしないのかと訊くと、何にだと言う。何にって、勝手に好きな漢字をつくって名乗ったりして、電子的な登録上の問題を引き起こしたりしないのかということだ。苗字は勝手につくれないのだ、とわたし。親から引き継ぐものであ

名をつけるのはどうも苦手だ。何故そういう名前なのかは気になるからだ。何か理由があるはずだと考えてしまう。Tシャツなんかも文字の入ったものは着たくない。勝手な意味を担いたくない。だから僕の書くものにはあまり固有名詞が登場しない。人物を示すためには「男」や「女」、「少年」「少女」というのが多い。あるいはただ「人物」という場合もある。A氏、F氏、N氏などはやってもよいかと考えてみることもある。Kだとか。アルファベットならば余分な意味などあるはずもないと思われるかも知れないのだが、これはこれで、Kがカファを、N氏が星新一を召喚してきたりして面倒だ。そんなことはない考え過ぎだという人もあるかも知れないけれど、今結構な数の人が、星新一ならN氏ではなくエヌ氏だと突っ込みを入れたことを知って欲しい。少なくとも自分がKやエヌ氏の出でくる話の書評を書けと言われたら、カフカや星方向からの検討くらいはしてみるはずだ。

ゴッドファーザーなんかになりたくはなく、奴隷を使うつもりもないのだ。

ただアルファベットの一字でさえも裏口から意味を引き込む油断のできないものであるのなら、田中や豊田というような具体的な名前となるともっと強烈な効果を引き出す。知合いや担当編集者や雑誌の編集長の顔が浮かんだりする。か

るから減ることはあっても、余程のことがない限り増えたりはしない。なるほどよくできていると感心しかけて、いやしかしだな、臣にはまだ苗字もないのだ、そういう場合はどうするのが良いのか。どうすればいいと言われても、そういうものは生まれた元からちなんでも取るものではないかと言う。親とか設計者とかなんとかそういう。ワープロソフトの名前からとか。しかし臣は未だ生まれているかどうかも定かではないと反論すると、いっそそっちも雀部を名乗るか猫の子でも貰うように言う。即座に言下に謝絶しておく。登場人物の名前もつけられないような人物の名など有り難がって頂く謂われない。かといってこれでは手詰まりなので、接ぎ穂を探す。

「で、その雀部なる姓はどこから」

わたしは『新撰姓氏録』だ」と些か意味の取りにくいことを言って続けた。

「これをはじめたのは都賀庭鐘あたりだろうと言われている。上田秋成もそのやり方を真似て名前をつけた。『菊花の約』の丈部とか、『浅茅が宿』の雀部とかいうのがそれで、これが僕の名前の由来だ。古い名前の並びリストから登場人物の名をとったわけだな。全く架空なわけではないし、古い名前だから良い具合に枯れていて扱いやすいという利点がある。

つての同級生の名前と重なるのもどうも憚られるし、悪人に知り合いの名がついているのもどうかと思う。仕方がないので適当にキーボードを打ち、変換候補の中から選んだりする。その名前をつけたのはコンピュータであり、今喫茶店でこうして打っているラップトップが選んだのだということにして責任を回避しようというわけだ。たとえば「d 酒う」とかになつたりする。それは誰か。今適当に打って変換したらこうなった。これは困る。正気を疑われる名前だ。

では電話帳から選ぶのはどうか。目を瞑って指さすのだ。これはうまくいきそうだが、この場合はごく単純な事実を指摘したい。本当にランダムに選択するなら、指した名前は現実の名字の分布に従うはずだ。すなわち繰り返していくと、佐藤、鈴木、高橋、といった名前が多くなる。でもそれならだ、最初から頻度分布を眺めた方がいのじゃないか。しかしそこでそうするとまた、知り合いの佐藤さんや鈴木さんの顔が浮かぶことになるわけで、しかもそれらの名字は頻繁に没個性を示すためのものとして利用されたりしているわけだ。それはそれでそういう意味を持つから気にかかる。『新撰姓氏録』から選ぶというのは悪くない手だ」

「九世紀の氏族名鑑か——」
「さてどうするね」

とわたしが問う。責任説明は果たしたとしても言いたげな晴れ晴れとした顔に気が障るが、とりあえずこれで問題の大人はなんとかかなりそうな気もしてくる。では苗字は『新撰姓氏録』よりとることにする。名は常用漢字と人名用漢字の中から組み合わせることにしてみよう。

手近な『新撰姓氏録』をダウンロードしてみるが文字化けしている。また Shift-JIS か。このまま作業する手もあるが、やはり UTF-8 にしておく方がのちのちのために便利だろう。変換する手段は様々あるが手っ取り早く n k f を使っておく。この表にある「氏族名」から「姓」を引いたものを苗字として利用せよということらしい。ソースを睨み、テーブルタグをバースして、必要箇所をテキストファイルにひとまとめにする。

名をつけるのが苦手であるなら、名前を自動生成するスクリプトを書いてしまえば良いのだ。そういえば以前、まだ会社勤めをしていた頃、テストデータを作るのに妙に手間をとられたことを思い出す。たとえば何かの会員制のサービスを管理するソフトウェアをテストするとする。とりあえず百人くらいからはじめるでしょう。住所氏名電話番号くらいを集めた雑多なデータが欲しい。流出した場合の問題があるから架空のデータである必要があるが、ある程度の本物らしさは

自分のことを、著者を命名したはじめての小説なのではないかと自負している。

ちなみにここに示した『千字文』のうち、常用漢字、人名用漢字中に登場する文字は八四五字。

この本文中で使用しなかったひらがなは「あいうえおぜちばびぶゆわぬゑうかけ」。カタカナは「ウオガゼゾヂヅヘホポヤユウキエヲヅカケ」。今使ってしまったが。意外に少ないと思われるのではないか。特にカタカナ。二二三六文字ある常用漢字からは一一三三字、八六一文字の人名用漢字からは九八字を使用した。『千字文』からは千字。これは本文そのものが入っているのだから当然だ。最も多く使った文字は「い」の五六六回、漢字は「字」の二一九回だった。この種の統計についてはのちのちまた触れることになるだろう。

ここに出てくる数字は当たり前だが校正の段階で何度か書き換えを余儀なくされた。この程度の数字などは自動的に訂正されて出力されるようになることを願いたいだが、実はこれらの数字が必ず存在するかどうかは自明ではない。たとえば、数Nを示すのにN字以上の記号を必要とする体系では、「この文はN個の文字で書かれている」と書くことはできないからだ。

最後に、この文章を生成した人物はわたしではないという

要請される。電話帳から適当につくったって良いのだが、傍らの電話帳をとりあげて表ソフトにちまちまと打ちこんでいくのは駄目な手段だ。十万人の架空の街の話を書くために、十万人の名前を決めた小説家はいるのだろうか。あの頃にやっておくべきだったことを後回しにしたせいで、今だに同じような問題で苦しんでいる。まずはここで第一歩、ランダムに組み合わせた候補の中から選ぶことから始めてみよう。まずはわたしの名前からなんとかしよう。雀部と名乗っていたから名前だけを決めればよい。サイコロを振って候補を決め、良さそうなところを選び出す。

雀部曾次。

これでどうだ。

続いてもうひとつ名前を選ぶ。

榎室春乃。

榎室春乃とわたしはいう。榎室春乃が、自分の名前は榎室春乃であると言っている。

名前を手に入れ、ようやくわかった。雀部と榎室は根本的に別の人間で、雀部と榎室はそれぞれ別のわたしであるのだ。このわたし、榎室春乃を書いたのは雀部の方だが、雀部や榎室の名を決めたのはわたしの方だ。わたしにはまだ、自分を記述する言語の見当さえついていないが、それでも今や

根拠を示す。この文章から、各種の記号、数字、アルファベット、ギリシャ文字、ひらがな、カタカナ、千字文、常用漢字、人名用漢字に登場する漢字を除いてもまだ、「塾麵癖埒哇撥拗々瑣客既效渾揉鱗爺睨奈咄嗟辨贅眩憚瞑」が残り、わたしは今それらの文字を手に入れた。ギリシャ文字の存在は自分でも気づいておらず思わず目を疑ったが、おおくま座のところで用いていた。

わたしはこうして、ゆっくりとはあるが成長していく。

II

ふと目を離れたすきにも、人の世は流れていくのだった、というのはこの場合、ラップトップの画面の中を下から上の流れっていく人名たちのことでもあるし、天文館のアーケードを行く人々をさしてもいる。両者を同時に眺めることは難しい。喫茶店の椅子に体を沈めて視線を下げれば一緒に視界におさめることはできるのだが、人の目には焦点というものがあって深度があり、図と地を同時に見るようにはできていない。いや本当は見ることもできるのかも知れない、と雀部は思った。

アヒルにもウサギにも見える多義図形があるだろう。これは当然、アヒルに見えたりウサギに見えたりするわけなのだが、アヒルでありかつウサギであるという生き物として見る

ことはできないとされる。この図の正式な名称は知らないが、ジャストローのラビット・ダック・イリユージョンと呼ばれることが多いようだ。ジャストローが一八九九年の文章でとりあげたことで有名になったものだが、元ネタとなったイラストは、一八九二年刊行のフリーゲンデ・ブレッターなるドイツの雑誌まで遡ることができるらしい。ジャストローの主張はこうである。ただ外界の刺激からでは、人間が何を見るかは決まらない。ウサギアヒルはただの絵である以上、それを眺めている間、眼球へ入る刺激は一定している。他方でそれがウサギかアヒルかというのはあまり間違えてはいけない事柄であり、アヒルであることとウサギであることが入れ替わったりしてはまずいのである。アヒルはあくまでアヒルであり、ウサギは常にウサギであって、どちらなのかは眺める側の都合ではなく、先方の事情によるはずなのだ。従ってここで切り替わりが生じるのは人間の情報処理の仕組みのせいで、人は全てを虚心に眺めるわけではない。

念のため図を眺めてみると、ジャストローのウサギアヒルも、その元ネタも結構わりとりアルに描かれている。毛並みがある。デューラーのウサギのようにとつい適当を言いたくなるが、確認してみるとかなり違った。元ネタの毛の方がぺったりしており、こちらの方が少々凛々しい顔立ちである。

ただしウサギの方には何か口を縫われたかのような不穏さが漂っている。ジャストローのウサギアヒルは何かに驚いたような表情だ。ウサギに見立ててもアヒルと見立てても、凛々しさやびつくり具合があまり変わらないのは面白い。見立てて、と書いたが、ウサギアヒルをどちらに見るかを、自由にすることは実はできない。じつとこの図を見つめていると、認知はアヒルとウサギの間で振動することが知られており、切り替わりの間隔をとると何かの分布に従っている。何の分布か忘れたが、こうしたものは大概ガンマ分布になるのではないかと思う。まとめると、人間は視覚情報だけで何かを見ているわけではないが、完全に妄想に沈んでいるわけでもないということになる。そうして、今自分が見ているものは、見たままのものではないのかも不安になって、常時あたりを探索しているということになる。まあ当然であるかも知れない。

ジャストローのウサギアヒルといえば、ウイトゲンシュタインのものも有名だ。『哲学探究』の第二部に、こちらは随分と戯画化されたウサギアヒルが登場する。ちよつとチャールズ・M・シュルツの筆のような愛嬌がある。表情は平坦であり、アヒルはちよつと上目遣いで左側を向いており、ウサギはぼつかり、右上の空を眺めている。線でさらりと描かれ

ており、線画とはかなり抽象的な存在である。ずっと眺め続けていると、自分が何を見ているのだから、ひらがなを見つめ続けた時のような目眩も起こる。ウサギかアヒルかというだけでなく、洞窟の中の宝の位置を示した地図にも、奇妙な形の拳のようにただの線にも見えてくる。せめて表面に毛でも生えていたならば、もちろんそれは毛ではなくて、毛のように見える線の集まりにすぎないわけだが、何かの意味で毛があったなら少なくともそれは生き物だろう。モルデン沸石とかオーケン石などの特殊な例は除くとする。しかしこのウサギアヒルは線でしかなく、線は通常生きてはいない。旅先のことで手元に『哲学探究』を持っていないが、大阪に戻ったところですぐに出てくる場所にはない。本を置くために借りてある部屋の玄関側、ドアに向かって右手隅あたりに積んである。この部屋というのが借りたはよいが意外に足を向けにくく、心理的な距離は大阪と鹿児島との距離とあまり変わりがなく、鹿兒島の街ははじめてだから、どこに本屋があるかも知れず、図書館の位置もわからない。

記憶をたぐるとあれは確かパレルモで、旧市街はクアットロ・カンティからヴィットーリオ・エマヌエーレ通りを西に行ったところだったと思う。喫茶店の机に置いた携帯電話から写真を探して確認してみる。携帯電話から写真を探すとい

う日本語は正しいのだろうかと少し悩む。出てきた写真は街角のショーウィンドウを写したもので、ウィンドウの表面を「GIONAL E D・ARTE MODERNA E CONTEM」と頭と尻尾の切れた文字列が横切っている。去年存在していた自分に言いたい、文字情報がきちんと全部入るように写真を撮ってもらいたい。まあなにか、モダンでコンテンツボラリなアートの何かなのだろうと思われる。ウィンドウの向こうに立っているのは、ブリーフ穿きの男児の像だ。ただし筋骨逞しい。そうしてその肩にのっているのは、このウサギアヒルの首である。くちばしが前を向いているからアヒルの方がベースなようだが機能に応じて首がくるりくるりと回るといふ設定なのかも知れない。阿修羅の顔が回るようなものかも知れず、阿修羅の首は回るものではない。ただあつて、こちらのウサギアヒルは三次元空間内の像だけあつて、まるで存在しているかのような存在感に満ちている。それは勿論、あらゆる二次元の図形は三次元に起こせるのであり、少なくとも円を円筒に持ち上げる式に三次元にすることは可能だ。しかしそれはあくまでも知識であつて、何かの図を見かけるたびにいちいち、これを三次元にしてみたらどうなるだろうと考えてみるわけではない。マンガやアニメの登場人物を三次元のフィギュアへと無難な形で起こす

しているということだつて考えられる。アニメを見てマンガを読み、そうして小説を読むためにはある種の訓練が必要なのだ。世代や国が異なると、途端に判じ物になったりする。かくいう自分もこのところのアニメは随分と難しくなつてしまつて、眼を鍛え直さないと何が起こっているのかさへ把握できない。余談はともかく、そこには三次元に造形されたウサギアヒルの頭があつたのであり、これは昨年の旅行の記憶である。実はそれ以前にも写真で同様のものを見たことはあつたわけだが、実際に目の前にしたのははじめてだった。

どうも話が長くなつてしまつてゐるが、何かの意味のリアルさ加減で並べるとして、ウィトゲンシュタインのアヒルウサギがここでは最も抽象的で、次にジャストローとその元ネタが並び、最後にこのパレルモでみかけた像がくる。立体である以上は有無を言わせぬ具体性を帯びており、さて、この像を眺める間にアヒルとウサギの認知的切り替わりが起こるのかと問われると――起こるといへば起こるわけだが、作用はとても弱く感じる。なんといつてもそこにそうして立たれてしまうと、単にそういう生き物であるという感が強まる。前にくちばしがあり、後ろに口がある生き物がいて何が悪かつたのかという気持ちが出てくる。二口女だつて後頭部にもう一つの口を隠していた。それが錯視に見えるのは、たま

ことができるようになったのはつい最近のことに属する。そこには技術が必要なのだ。これは、ただのウサギアヒルを三次元の存在として起こすよりも難しい。なんといつても、二次元上の登場人物たちが、正面、横、上からの正しい三面図を提供する保証はどこにもないからだ。ウサギアヒルの設計図は横から見た一枚だけだが、マンガやアニメの登場人物たちはいつも動き回っているわけであり、特にこれといった注釈なしに、別のコマの人物たちが同一人物であつたり違う人間であつたりする。そこから統一的な設計図を起こせるかどうかは決して自明なことではない。矛盾だつて起こりうる。たとえばこうだ。上から見ると正円で、横から見ると正三角形で、正面から見ると正方形という三次元の物体はこの世に存在していない。いやマンガやアニメの場合もつと大胆なことが可能なわけで、正面から見ると正円、正面から見ると三角、正面から見ると正方形という図形が主人公ということだつてありうるわけだ。そうしてみるとマンガやアニメの登場人物たちは超次元的な形をとることさえも可能な存在であるということになり、これはひよつとしてみると、ごく自然にキュビズムを実現しているということになるのかも知れず、素朴なものをわざわざ切り刻んで並べ替えてみなくとも、あらかじめ切り刻まれたものがそこにあり、素朴な存在を擬態

たまそういう生き物がいなかった星に生まれ育つたという特殊事情のせいであり、あちらの生き物のせいではない――という気がしてくる。つまり単にそうした生き物である。具象の力は侮れない。

ウサギアヒルの錯視はこうして、三次元の像に起こされることで力をかなり喪失したが、あらゆる幻影が三次元という現実には耐えられないということではない。角度や長さに関する錯視は、これは幾何学というものがかなり堅固な代物であり次元さえもあまり気にしない存在だから、とても堅固なはずである。ウサギアヒルはいわばファンタジーの存在であり、ことによつたらどこかの国のアリスが遭遇したとしても不思議はなくて、そういう存在として受け入れやすい素地があるのだ。これが四つ目の錯視あたりであつたなら――御存知ない方は是非何かの手段で御確認を願いたい――ウサギアヒルよりは強固に錯視を維持するだろう。これは顔の上に二組、合計四つ目の目を並べたもので、見れば視線が動揺する。百目や籠目などより恐ろしいかも知れない。さてこれも、言つてみれば人の顔に目が四つあるだけだから、三次元の像として実現するのは難しくない。さらにはそういう生き物が本当にいたとして何が悪いのか。オパビニアには五つの目があつたわけだし。四つ目の錯視などは近い将来SF映画にそ

ういう生き物として出てくるだろう。もう出ているかもわからない。

で、あるならば、とようやく話は元に戻って、図と地違って別に同時に見ることができても構うまいということが言いたい。本当は、登場人物であるところの自分とは何なのかというのを聞きたい。どこで生れたかとんと見当がつかない。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。わたしはここで人間というのを見ている。ここでの図と地は何だったかという、画面上を流れていく名前たちと、アーケードを流れていく人々である。今、画面上にはこんな調子で、

成相麗祿、高向創爵、穴師小操、和安部峻峻、島又腕、石上紙畢、国背書、高向菱梢、紺口厨石、川原閼推、六人部維訓、犬養剥臭、辟田鬱味、台尺、秦人萱友、三原井挺、櫻多庵儲、巨勢迎鼓、柏原会配、采女彫匂、

と、人名らしきものが下から上へと流れており、これはこの連載の第一回目でつくってみた、人名生成プログラムの出力である。わざわざプログラミングと呼ぶほどのものではなく、せいぜい機械鉛筆と呼ぶのが妥当なあたりだ。メカニカル・ペンシルの名がシャープペンシルにとられてしまっているのが惜しい。名字の部分を書き換えてランダムにとり、

計をとったところで、平成の名前の分布を予測することなど不可能だろう。古風な名前の生成器をつくることはできるだろうが。雀部が今つくろうとしているのは、扱いやすい小説の舞台であって、明治人、大正人、昭和人の生成器ではない。

ふむ、と雀部は腕を組み、それでこの天文館という名称は一体どこの館を指すのだろうと思った。

「やあ」という声に目を上げると、そこには一人の人物がある。ビニール袋を小脇に抱え、ここは良いかと向かいの椅子を示している。雀部は意味もなく周囲を見回してから、構わないと頷いた。一向に見覚えのない顔なのだが、先方は知り合いであるかのように振る舞っている。ここで顔のつくりの描写をしたなら、それを三次元に起こせるものだろうかと思う。人物は膝の上に群青色の袋を立てると、中から赤と緑で配色された箱を取り出し、そこからグラシン紙に包まれた本が滑り出る。大修館書店のウイトゲンシュタイン全集8『哲学探究』だ。

「ご用命だと聞いてね」とその人物は言っ、ばらばらとページをめくってみてから肩をすくめて雀部に差し出す。雀部は素直にそれを受けとり、ウサギアヒルの図を探す。第二部は記憶よりも随分と後ろの方に位置しており、しばらく見

名前の方は常用漢字と人名用漢字からランダムに一文字か二文字を拾っている。実際にやってみるとやたらとうるさい感じがしたので、異体字の使用は避けた。こうして眺めてみるとあまり人名らしく見えない。というか尋常の名前ではない。坊主にだってこんな名前は少ないだろう。小説に使うための名前であるからこれくらいでも良いのではと言いたい。露骨に「子」をつけるという手があるし、花の名前がよく出てくるようにするという手もあるのだが、それもなんだか妙な気がする。そう、だからここは本来的には、男女の名前を大量に拾い集めて、それぞれに出てくる漢字の頻度をはかるところからはじめるべきなのだと雀部は思う。現在この世に生存している日本名を持つ男女の名前を全て集めて、出現頻度上位千位なりを集計してから、男女どちらがより多くの漢字を名前として利用しているのかを調べることは何かの意味で可能だろう。すくなくともその「量」は存在している。今この瞬間に日本にいる人間の髪の毛の総本数という「量」がとにかく存在しているのと同様に。存在している量を計ることができるかはまた別の問題である。髪の毛一本一本にIPV6アドレスが振られていればできる気もする。いや、そういうことでもないのかと雀部は思い、たとえば明治時代の名前の統

ずにいる間に一部が伸びたか二部が縮んだかしたのではないかと思う。第二部の xi、p385 に目的の図はみつかり、並んで次の文章がある。「次の図は、ジャストロウ (Fact and Fable in Psychology) から借用したものであるが、わたくしの考察においては、うさぎ - あひるの頭と呼ばれる。ひとはこれをうさぎの頭とも、あひるの頭とも見ることができる」

なるほど、そうだ確かにウイトゲンシュタインが描いたのはデッサンではなくこういう単純な線画であつたなと雀部は思い、時間がねじれたような感覚に襲われて、目の前の登場人物に目をやると、これは当然ただの人名であり、というか机の上に置かれた一枚の名刺にすぎず、星川夕とそこにある。メールアドレスと電話番号が名前の下に小さく記されており住所はない。角が少し折れている。ふと見るとラップトップの画面に浮かんだ横長の黒い四角の上を流れていた名前は止まり、星川夕という名前を最後に、カーソルが雀部の入力をお待っている。無限ループもどうかと思ったので、とりあえず十万人分の名前を表示させていたのだが、今その出力が終わったわけだ。

はじめに混乱があつた。全てが渾沌としており名も形も知られないところへ、いきなり十万人の人間を投入したせいで

ある。十万人アレ、と雀部が言ってコマンドラインインターフェイスに、`rubby Name generator.rb` 27638と打ち込んでエンターキーを押し込んだせいでそうなった。27638は乱数シードだ。駄目なファイル名のつけ方だが、色々と急ぐ事情があったのである。いまだき歴史を開始するのに最初の男女二人を設定するわけにもいかないのだから仕方ない。本来は、生物や物質の進化自体を扱うべきかも知れなかったが、雀部にはそんな余裕がなかったし、その過程をどう実現すればよいのかもわからなかった。第一今は旅先である。何百人か何千人か何万人かは知らないが、ともかく最初の人類はただ二人きりではなくて、ある程度の大きな集団だったはずだろう。ある瞬間を境に有と無が切り変わったわけではなく、じわじわと変化をしながら人間のようなものになり、人間でいるわけであり、人間ではないものになることだろう。もしも起源を設定するなら、と雀部は思った。起源の設定者にも知られない起源の謎を設定しておくべきである。

この十万人分の名前はほとんどランダムに生成された。これは雀部の不手際である。深くは考えずにいきおいだけで生成してしまったわけだ。おかげでそこには男女がなく、親子がなく、姉妹兄弟の姿もなかった。まだ関係性がないからで

雀部は訊ねた。

「それで誰が得をするのか」

「……得っていうか……それだけでも物語がはじまるでしょう。親子の話は人を強く惹きつけることで知られています」

「しかしだね」と雀部は言った。「これだけ世の中に打ち明けた話があふれる中で、誰が本を買ってまで他人の打ち明けた話を傾けたいと思うのだろうか。正直、お前の内面など知ったことではないという気持ちになりはしないのか——まあ、よい。それはまあよいとして、その者が真実その者の親であると、誰が一体保証するのだね」

「それはあなたが」と星川はどこからともなく湧いてきた怒りを抑えながらそう言った。「そうであると言えばそうなるのです」

「何故そうなるのがわたしにはわからない」と雀部は率直なところを開陳し、「一体お前は何を根拠にわたしを神のような権限を持つものだとするのかね」と訊ねた。

「あなたは神のようなものではないのですか」と星川は問いを問いで返して、

「如何にも神のようなものである」と雀部は応えた。

「だったら」と机を叩く星川をなだめ、「わたしが言っているのは、わたしが自分を神のようなものと考えているかどうか

ある。ただ名前だけがあつたのである。ここで生成に使われた名字は八一一ほどあつたから、一つの名字につき、おおよそ二三人がいたことになる。当然揺らぎはあるのだが、大数の法則的にそうあるべきだった。その同姓の百人たちが同じ氏族の人間なのかどうかさえ、雀部は考えていなかったのだ。産めよ殖やせよ地に満てよと宣言はしてみたものの、そこでは名前が大量に流れていくだけであり、混乱は単調に増加していくだけだった。あるいは全てがただ平坦になるばかりだった。繁殖の方法も定められてはいなかったのも、ただ人々が天から降り注ぎ、そのまま放置されていくだけだった。雀部はそれを見てよしとされた。

「もう少し真面目にやれ」

と、どこかペラペラしている星川は雀部に抗議をしたが、雀部の方は真面目くさってこう応えた。

「真面目にやれとお前は言うが、一体どうすればお前は満足するのだろうか」

星川はうんざりしながら折り目を几帳面に整えながら応えた。

「まず血脈を定めましょう。誰かを生み出す前に、既存の名前の中から誰かを一人か二人を選んでおくのです。それを次に生まれる者の親と定義するのです」

ではない。お前が何故わたしを神のようなものとみなすことができるのか、みなしているのか、といった事柄だ。われわれは現に今こうやって天文館のドトールで向かい合って座っているのに。これはかなり危険な状況だ。特に君の方にとって。目の前にいる人物を神のようなものと思うのはかなりおかしいことであるから。ところで天文館というのはどこなのかを知っていたら教えてもらえると有り難い」

「なるほどかし」と最初の混乱のただ中で星川は必死に思考を巡らせた。「とりあえず、今は天文館という建物はありません。天文館はこのあたり一帯の繁華街を指す地名です」とほとんど反射的に上の空で答えているのは、ここ鹿児島のためにいさつき生まれたばかりとはいえずすが地元民である。

「館なのに」という雀部が漏らした嘆息を星川は無視した。懐疑的な神学者という設定はよくみかけるが、自己懐疑的な神には何か名前がついていたろうかと少し考えてから、しかしですね、と続けた。なにかこう、怠惰な神へ創世を促す母親のような気持ちになっている。「これはわれわれにとつて、自分がきちんとした登場人物で居続けられるかどうかの瀬戸際なのです。人間が読んで面白いお話になるかどうかの。人間は、ただ人名が羅列されていくだけの文章などに面白味を見いだしたりはしないのです」

「そんなことはあるまい」と雀部は余裕を見せて応えた。「ただリストを眺めるだけでも喜びを得ることはできる。お前にも毎朝の新聞でお悔やみ欄を真っ先に確認する知り合いがいりたりするのではないかね。あるいは交通事故の死亡統計を眺めるのを趣味とする者などが。それに先ほどの出力結果もその気になって眺めてみるとこれがなかなか面白い。和安部唆唆などは味わい深いな。唆唆なんていう名前をつけた奴の顔を見てみたいものだ。和安部は皇別、ふむ、これは彦姥津命の子孫であるようだ。彦姥津命が誰かは知らないが。読みもわからない。いや、ヒコオケツノミコトか。素晴らしい。偶然拾った名前でこれだ。和爾の祖ということになる。妹は開化天皇の妃となったということだ——どうだね、どこまでも続けることができそうではないか」

星川は拳を固く握り「リストを読むには今あなたがやってみせたような、背景となる知識が必要です。ただの名前に意味を読み込むにはそこに文脈がなければいけません。あなたが今生成している名前の羅列は、ただランダムでどこかの文脈に寄生しているだけなのです。ただの羅列でつまらない種類のランダムなのです」

雀部は自分の前に座る相手を眺め直して、ふむ、と一つため息をついた。

整然と設定された世界に不義密通が存在しないことに不平を抱く神に向ける言葉を星川は探し、「それならば、不義密通自体も定義なさればよろしいのです」

雀部は深くため息をつき、

「無論、そうすることは可能だ。お前たちの一挙手一投足をこちらで決めることも原理的にはできるのだろう。あまり上手い手ではないが、可能な振る舞いの集合をつくり、そこからランダムに行動を選び、組み合わせっていくというやり方でも。しかしそれで良いのかね、お前たちは設定上不義をなすことになっているから不義をなすのか。その場合その不義の責任は誰のものか。不義をなした者の責任なのかね、不義を発明して適用した者の責任かね。お前たちはこう言うわけだ、そうわたしは確かに不義をなしましたが、それはあくまで設定上の出来事であり、自分は清廉潔白なのです、と。たしかにそういう一面もあることを否定はしない。しかしだ、わたしはそういう種類の責任を引き受けたくない」

「自分たちで選択を、登場人物なりの自由意志を持ってということですかね」と星川。

「手短かに言うと思う」と雀部。

「まだただの名前なのに」と星川。

「わたしだってただの旅先の神だ。とりあえず、指宿枕崎線

「つまりお前は、このわたしに神のような役目を果たせと言っているわけだ」

「先ほどからずっとそう言っておりませう」

「よろしい」と雀部は円形のテーブルに右肘をつき、手の甲で顎を支えて言った。「たしかにそれを書くことは可能だ。正確にはそれを出力するプログラムを我が機械鉛筆で記すことは容易い。しかし、どこまでやればよい。お前たちに年齢を与えることはできる。個人にとつての年齢とその共通の基盤をなす年表を用意してやることもできる。何年に生まれ、何年何歳で結婚し、何年何歳に何何という子供をもうけた式の出来事をずらずらと生成してやることはできる。だがそれがなんだというのだ。より具体的に言うならば、その記述の中のどこを探せば、不義密通が、不義の子が、知らぬが花の他人の子供が存在するというのだね。わたしがこいつはこいつの父であり母であると宣言することでそうなるのなら、それが単なる事実となるのだ。その時点でどう男から子供は生まれなくなる。子供が産まれてはじめて女性だったのだと知られる人物はその宇宙から放逐されてしまうわけだ。神は死んだと神が言ったら神は死ぬのだ。もしそいつが正直者なら。わたしはお前たちにとつての自然法則になることはできる。しかしそれのどこが面白いのだ。わたしにとつて」

の本数の少なさに愕然とするくらいの力しかない。いや、だけれどな、山川からの枕崎方面行き下り07:20の次が11:46、その次が13:25、次が17:20というのはかなり大胆な設定だろう。タクシーの運転手にきいたら、ああ、ほとんど高校生の通学用ですなと言ってたぞ。乗り遅れたらどうするのか訊ねてみたが、家に帰るか、線路を歩いたもんですよとのことだ。きまぜんからな、電車、つて確かにそうだ。くるんなら乗れば良いわけで、こないから轢かれなわけだ。これはなかなか哲学的な言明でもある。場合によつては手を上げると止まってくれたものだというぞ。宮ヶ浜の駅の前だつて下手に埋め立てたりしなければなかなか趣き深かっただろうに勿体ないことをしたものだ。そうしてこれは強調しておきたいが、指宿枕崎線の揺れはなかなかすごいぞ。よく鹿なんかをはねている紀勢本線でもあそこまでは揺れなかったと思う」

「なんで仕事があるのに鹿児島旅行にきているわけですか」

雀部は静かに目を逸らし、

「その前にお前は自分がどこにいるか知っているのかね。わたしはまだこの世の地理を設定した覚えがない。わたしの鹿児島はお前の鹿児島と同じ鹿児島かね。鹿児島と大阪と東京の位置関係はどうなっている。まあ質問に答えておくと、な

んとなくだ。一度きてみたかった」

「物見遊山より」星川がぼやく。「設定をきちんとしてもらいたいのですがね」

「――星川の祖よ。わたしは創る神になりたいのではない。あくまでも読み、解読する神でいたいのだ。つまりお前たちが勝手に殖えて争い、わたしはそれをにやつきながら眺めているだけで、好きなところで介入して遊ぶわけだ。過去そんな試みは多くあった。今もこの目にありありと浮かぶ『アクアノートの休日』『ワールド・ネバーランド』『すらいムしよう!』……だがそれとても、プログラムであることにはかわりがなく、それ自体が小説を生み出すことはなかった……」

「もう少し役に立つ設定をくれても罰は当たらないだろうと言っているだけです」

「設定……設定か……どの設定をだね。わたしが何人の人間の面倒をみれば満足かね。ありそうな設定、ありえない展開、あってもよいような結末をどれだけ繰り返し返せば気がすむのかね。費やすことの可能な無限の時間が小説の時間の前に横たわっているわけではないのだ。わたしは、四月の十七日にはシアトルにいななければならない。五月の頭にはニューヨークだ。その間は合衆国にいることになるがまだホテルの予約もとっていないし、アメリカ国内の航空券もとっていないのだ。」

環境が得られるとは限らない。むしろ神との通信は断絶しがちなものだ。テキストエディタも乗り換えたから、とりあえず文章に誤字が多くて困っている――ともかくだ。まだ日本にいううちに、作業環境を整えておかねばならない。バグ出しは早目にやっておきたい。あのソフトが足りない、あれをインストールしなければとなったときに、ホテルのWi-Fiでは心もとない。ある程度の独立機動が可能な環境構築が望まれる。それにこのところ国内でも動き回る羽目になっている。鹿児島からは飛行機で東京に戻り、京都へ行って大津に戻り、それからようやく大阪に帰ることができそうだ」

「なるほど事情は承りましたが――」それはそちらの都合であって被造物には関係ない。そう、星川の祖が告げようと身を乗り出したところで、雀部は椅子の背中にぐったりと体を預け、両手のひらを上に向けてテーブルの上に投げ出すと、目を瞑ってこう告げた。

「しかしお前たちの気持ちもわかる。請願は受け入れられた。牛を焼くとは言わんし、ミラノサンドのAを奢れとも言わん。ここに以下の十三氏族を設定し、特にわたしの保護下におくこととする。すなわち、#――榎室――エムロ――、#――朝戸――アサト――、#――惊人――クラビト――、#――息長――

その間もこの連載は続くわけだが、ここではつきり言っておこう。前もって用意してある原稿はない。つまり、アメリカ滞在中に第三回分を書いて、四月の末までには編集部へ送らなければいけないということになる――しかもゴールデンウィーク中の進行だ――わかるかね。この連載は、第三回がただのアメリカ旅行記になってしまってもなんとかなるように、こういう形を採用しているのだ。そして――その種の危機はアメリカ旅行で最後ではない」

「――それは」もう少し正気のスケジュールを立てた方が、という台詞を星川は呑み込んでいる。天災の予告をされているようなものだ。雀部は首を横に振りながら続けた。

「お前はこれの鹿児島旅行が無駄なものだと言いたげだ。しかし、これは小説の試運転でもあるのだ。具体的には小説を書く環境の試運転だ。しばらくは旅先で作業をするしかないわけだから。そのためにラップトップも新調した。何故かこの小説は、プログラミングをわたしに要請してくるからだ。プログラミングはUNIX系のOS上でやりたい。Windows機でやるのは勘弁してくれ。小説を書くためのラップトップと、プログラミングのためのラップトップを二台持つて海外を移動するのは無理だ。SaasやらPaasやらを利用するという手もあるが、常に十全な通信

――オキナガ――、#――英多――アガタ――、#――星川――ホシカワ――、#――羽束――ハツカ――、#――佐代――サヨ――、#――城原――シロハラ――、#――鳥見――トミ――、#――笛吹――ウスイ――、#――蜂田――ハチダ――、#――雀部――ササベ――がそれぞれである。これらの名がどこから現れたのかは知られていない。保護下に置くといっても、お前たちの個々の幸福や安定した生活を期待してはならない。全員に最大限の幸福を与える解は存在せず、せいぜいが不幸の#――最大値を最小化する――ミニマックス――くらいになりがちだが、わたしはその種の公平な神ではないし、この世をゲーム理論の支配下にある世界とは見なしていないからだ。えこひいきもすれば理不尽も要求するし、単に手が回らないことがほとんどであり、手際も悪い。必要な作業のためには人員が要り、そうすると経営の才覚が必要となる。経営者が神の手法を真似たという話は聞かない。参考にするところがないからだ」

指宿の駅からタクシーに乗り川尻海岸をお願いすると、運転手は不審そうに頷いた。あそこには何か見るようなものがあったろうかと訊いてくる。開聞岳を見るのならもっと他の場所もあると言う。運転手の言葉には九州の響きが混じっているが、北海道生まれの雀部にはやや聞き取りにくいその

言葉も星川の耳には自然に聞こえる。

他はどこか見に行ったのかと、運転手の愛想は良い。朝からの雨になにとなくぼうっとするうちに昼過ぎとなり、指宿に着いたのは夕方である。途中晴れ間もあったが大雨も降り、南の雨はやはりスコールに似ているなと月並みなことも思った。ようやくここからは晴れそうだと運転手は言う。

長崎鼻とか、バカ洲などへは行かれましたか。龍宮神社などもありますな、と言う。竜宮ですかと訊ねると、そうだとする。浦島です。長崎鼻から亀に乗ったということです。玉手箱もありますよと言う。ああ、それで鹿児島中央・指宿間の観光用の特急列車は、たまたま箱という名前なのかと得心がいくが、おそらくは開きっぱなしであったはずの玉手箱を閉めたのは誰なのだろうとなぜか思った。このあたりでは、と運転手は続け、龍宮は南の方にあるのです。ゆかりの井戸なんかもあります、と言う。井戸ですか。井戸です。なるほど話をきいていると、浦島は沖縄方面にある竜宮へ行き、そうして玉手箱をもらって帰る途中、なんとかという岩にいた洞窟の中で、妻をめぐって暮らしたというのですな、と続いた。これはどうも、山幸彦と混じっているのではないか。浦島は帰ってきてそれっきりだが、山幸彦は豊玉姫と結ばれたはずで、豊玉姫は海神の娘であるから平仄は合う。同じ話

はタイガーウッズかと聞いてみると、タイガーウッズだと言う。二〇〇四年までカシオワールドオープンゴルフトーナメントをこの近くでやっていたのだということだった。

昔はよくきたけれど、と運転手が防風林のそばに車を止める。このへんから降りられたと思ったんですがねと言う。林に細い道が通って、目印だろう、点々とリボンが枝に結んである。ではちょっと行ってみますと落ち葉を踏んで浜へと向かう。人はあまり入らぬようで足場はよくない。少し降りると、すぐにコンクリートの足場になった。その上に乗ることはできるが、向こうへ下りるとちよつと戻るのに難儀しそうな高さがある。そうしてあまり砂浜はなく、雨のあとでもあつて波が荒い。正面が太平洋である。まっすぐ行くと沖縄が台湾になる。右手に開聞岳の裾だけが見えている。＃――神御衣――かむみそ――というものかと思う。そちらの先へ砂浜が伸びているのが見える。細道を戻ると、運転手が様子を見にやってくる。もう少し、先です、とお願ひする。今度はもう少し開けたところに、先ほどと似たようなリボンが結んであつた。

雨に濡れた砂は黒く、波は荒く、人影はない。砂浜の端でしゃがみ込み、砂を一握り掬ってみる。もう少し探さなければならぬかと思っていたが、石英や、あくまで白い小さな

が分れたのか、違う話が混じったのかは今となってはよくわからない。もともと、九州南部は高千穂峰の頂上に天逆鉾を刺したりしていて、これは要するに海をかき混ぜて列島をメレンゲのように固めた沼矛かその親戚だろうから、起源の神話の系統が違うようにも思える。いやこの矛の持ち主は邇邇芸命だったか。邇邇芸命自身が矛盾だったという話もあったような気もしてくる。

亀が卵を産みにきますよ、と言う。
なるほど、亀がくるのなら乗って行くこともできるものかもわからない。

残念だね、というのは開聞岳の上部が雲に隠れていることらしい。薩摩富士です。各地に富士はありますが、やっぱりここの形が良い。運転手は嬉しそうに、冬にきなさい、という。菜の花でいっぱいだから。夏にきなさい。マンガーが山ほど食べられるから。あの岩は、と崖から剥がされたように切り立っている巨大な岩を目で追っている。竹山ですと問うと、タイガーウッズがね。スヌーピーだって言つて、とやや意味のとりにくいことを言う。見えるでしょう、スヌーピーに。言われてみると、確かに見える。タイガーウッズがね、とのことだ。スヌーピーだって言つて、今ではみんなスヌーピー山と呼んでいますよ。念のためにタイガーウッズと

二枚貝の欠片に混じって、緑がかつた琥珀色をした結晶が多く混じっている。ペリドットだ。苦土かんらん石。大きく、緑の鮮やかなものが珍重されるが、これはほんの数ミリの大きさである。川尻海岸はいわゆる宝石海岸であり、稀には豆粒大のペリドットがみつかることもあるのだという。複雑折の加減だろうが、夕暮れの光の中でもきらめくといい、イブニングエメラルドとも呼ばれる。しゃがみこんで目を凝らすだけで、そこら中が小さな破片でいっぱいだとわかる。元へと戻すことなど考えられない膨大な破片が浜一面に広がっており、さらに破片を生み出していく。

浜へと下りてきた運転手が、手の中の破片を見て、ビニール袋は要るかときく。昔は何かをお土産にする人のためにフィルムケースを持っていたものだけど、と言う。今はみんな携帯で撮っていくでしょう。有り難うと星川は言い、袋は要らない旨を伝える。比較的大きめの粒を三つほど手のひらの中に握り込む。もう済んだのかと訊ねる運転手に向けて頷く。

タクシーのシートに沈み、海辺の宝石のことを考えている。窓の外を眺めている。東京へ戻ったあとの、吉祥寺のドトールの、神田のドトールの、水道橋のドトールの、吉祥寺のエクセルシオールカフェの、水道橋のエクセルシオールカフェ

の窓から見える通りの姿を、四月四日の夜に花冷えの京都、白川南通りで眺めた桜の広がり、闇の廊下へ桜花を敷きつめたような平面を、木の実のように鈴なりに眠っていた鷺の群れの姿を、いまはまだ未来に属する光景をそこに重ねて眺めている。大津のバルコのサテライト、スターバックスコーヒーの二階からの通りの眺めが窓の向こうへ展開してゆき、

その上へまたタクシーの窓が重ね描かれる。柑橘類の実をぶら下げた枝が視界をかすめる。あなたの並べる文字列には、と心の中で問いかけている。海岸は存在しているのですか。砂に埋まった、小指の爪の先ほどのウニの骨格は。とりかえしようもなく砕け散り、寄せては返す、宝石でできた砂の波はそこに存在しているのですかと問う。手のひらを握り、粒の感触を確かめながら、もしも存在しているのなら、この砂粒の方だろうと思う。

III

はじめに和歌集があった。和歌集は文学とともにあり、和歌集は文学であった。大抵の場合、文学はまず歌なのだからありそうなことだ。

日本を出た年の四月十七日に、雀部は成田空港第一ターミナルにおいて、見送りの場で、英多に言われた。「お前はとりあえず、全ての勅撰和歌集を、そこで使われている記号だけから、その並びによって調査し、その細部を一つ一つ考えて、その総数を得なさい」。勅撰和歌集の中から、当座使えそうな話題を、お前と榎室は、プログラムによって見いださなければならぬ。すなわちお前たちが調査すべき勅撰和歌集の名前は、文字列の包含関係を擬似的な親子関係とみなすなら次

のとおりである。

古今和歌集からは、新古今和歌集と、続古今和歌集。続古今和歌集からは、新続古今和歌集。

後撰和歌集からは、続後撰和歌集と、新後撰和歌集。

拾遺和歌集からは、後拾遺和歌集と、続拾遺和歌集と、新拾遺和歌集。また、後拾遺和歌集からは、続後拾遺和歌集と、新後拾遺和歌集。

千載和歌集からは、続千載和歌集と、新千載和歌集。

金葉和歌集、詞花和歌集、新勅撰和歌集、玉葉和歌集、風雅和歌集には、名称上で包含関係にあるものはない。すぐにわかることだから答えを先に言ってしまうと、勅撰和歌集は二十一ある。正直言ってお前は歌集の編者たちが、当時正気でこれらの名前をつけたのか疑っているが、まずはこれらの名前の整理からではじめるのが良いだろう。さらに時間が余った場合、それぞれの内容に関する基本的なデータは、国際日本文化研究センター、日文研の公開データベースがウェブ上からでも参照できる。アメリカからの閲覧を弾いたりはいらないだろう。会員登録も必要ないし、多分無料だ。利用規約についてはよくわからないところもあるがまあ常識的な範囲で大丈夫だろう。いわゆる現代的なデータベースとは違うもののような気もするが、それはまあ良いとしておく。

テキストデータがあるだけでも有り難いことと思わねばならない。お前に持たせた携帯用の Wi-Fi ルーターでも、この程度の大きさのデータならダウンロードすることが可能はずだ。本当は出国前にやっておきたかった作業だが、もう色々立って込みすぎて無理だったのだから諦めてくれ。

これが一週間前の出来事であり、英多は今、マイアミにいる。シアトルに入り、セントルイスを経由して移動してきた。まるで方針というものの見えない移動の仕方、しかも言うにこと欠きマイアミである。これまでのところ、予定を伝えた全員から、何故マイアミなのかと聞き返された。マイアミと口にする際に、羨むでも蔑むでもない、なんともいえず弛緩した笑みが口元に浮かぶのは万国共通のものであるらしい。明日にはボストン、月末まではそこにおり、そこから先はニューヨーク、ゴールデンウィークが明けたところで帰国の予定だ。シアトルでもセントルイスでもボストンでもニューヨークでも用事があるが、マイアミに用事なんてものはない。旅程を眺めているうちに、何故自分はアメリカ合衆国の北の方ばかりを歩いているのかちょっと馬鹿馬鹿しい気持ちになったのだ。「サンディエゴとかマイアミだとか、南の方へ行きたいものです」そうメールに書いているうち気がついた。行ってしまえばよいではないか。

英多には、探し続けているアメリカがある。長身の美男美女が闊歩する、ステーキのうまいアメリカである。空は晴れ渡り、海は青く、ビーチの砂は無論白い。北米大陸に上陸しさえすれば、そんな光景がどこにでも展開しているはずだと、英多は考えていたふしがある。海沿いならば。考えるというほど大げさなものではなくて、誰かにアメリカのイメージを聞かれたならばおそらくそう答えただろうといった程度だ。別段、誰も訊ねなかったし、英多としても何故だか年に一度くらいは北米に行く羽目になるとは、ほんの数年前まで考えてみたこともなかった。最初がサンフランシスコだったのも、あまりよくなかったのかも知れない。基本的にサンフランシスコにビーチはない。それはまあないことはないが、ごくありきたりの砂浜くらいか。それが太平洋からの強風が吹きつける長い長い砂の連なりだ。泳ぐと多分命にかかわる。西海岸の都市なのに。こう言つては悪いが、長身の美男美女というのあまり見かけない。これもまた、いないということではないが、日本にいるのと比率があまり変わらない。それほど長身とは言えない英多でも、まあ平均サイズである。これは困った、と英多は思った。アメリカにやってきたつもりが大阪の下町に着いてしまったみたいな感じで張り合いがなく、座りが悪い。ニューヨークと銭湯の冗句みたいに気が抜けて

いる。ニューヨークまできてみたところ、場末の路地に本当にカフェ・ニューヨークがあった、みたいな感じか。こちらとしては、トラックの荷台に乗ったホットパンツにタンクトップ姿の小娘から、通りすがりに水鉄砲で撃たれるくらいの覚悟をしてきているわけだが、まずその種の生き物が見当たらない。第一、夏であるのに寒い。風が冷たい。これはサンフランシスコはそういう街だからなのだが、まあありえない。食事はふつうで、うまいものはとてもうまいが、まずいものもふつうにまずい。そんなことでアメリカ料理は今後どうするつもりなのだろうと他人ごとながら心配になる。まずいものはとんまずくてなんぼなのではないかと英多は思う。ふつうにまずい肉を食べるくらいなら、とことんまずい肉にあたった方が話の種になるだけかもしれませんが、住人にとってはたまったものではないかも知れない。

英多にとって、サンフランシスコで受けたこの衝撃は大きく、次の年には思わずイタリアへ行つてしまった。絵に描いたような美男美女と青い海を求めてである。アメリカにアメリカがないのなら、他の国でアメリカを探せば良いではないかというわけだ。結果としてはいなかった。アメリカとほとんど事情は同じで、または日本にいるのと同じ感じだ。それは勿論、美男美女だけの国なんてものがこの世にないこと

は承知しているが、なにかこうしっくりこない。マフィアの親玉みたいな顔つきのタクシー運転手はそこいら中にあふれているのに。シチリアの海は青かった。イゾラ・ペッラはただの海水浴場だった。釈然としない。ただ、フィレンツェ名物のビフテキ、ビステッカには感激し、ここに、想像のアメリカのステーキを発見することは叶った。今に到るも英多の中では、このビステッカを超えるアメリカっぽいステーキは登場していない。今回の移動で立ち寄ったセントルイスでは、雀部が以前書いた小説にもでてくる登場人物に街を案内してもらい、ステーキ屋にも連れて行ってもらった。セントルイス中のステーキ屋を食べ歩くのが趣味という友人から教えてもらったのだという、そのステーキは確かにうまかった。食べているうちに顎が疲れる系のフィレ肉だ。フィレ肉だけどうなのだ。しかし何故だか英多にとってのアメリカ感で、ビステッカに数歩、後れをとった。英多は、勝手に失われた、そもそも存在していなかったのかも知れないアメリカのことを想い、いつかアメリカを集めるのだと改めて心に決めた。

本当のところ、マイアミにはその空想のアメリカを構成する一つの部品を探しきたのだ。英多はそれを、「ラジカセを肩にかついで海辺を歩く男」と呼んでいる。これは当然、砂

漠や荒地では駄目で場所込みである。目撃証言を総合すると、どうもこの種族は二十年前あたりを境目に姿を消してしまつたらしい。セントルイス在住の先の登場人物は、「今はiPodがあるから」とひどく正気のことを言つたが、「マイアミにならないかも知れない」とこちらが言うことや表情を変え、「マイアミにならないかも知れない」と応えた。それはさておき、当初の目論みでは、わたしはここでどうの昔に、こう書いているはずだった。

「貫之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有之候」

本当は連載の第二回目がここからはじまるはずで、星川あたりがその内容を語るようになっていた。本来ならばその段も終わり、わたしはそろそろ、原稿のバージョン管理やテストの方法あたりの話題に目を向けるつもりでいたのだ。まったく、手の動かなさとは恐ろしいもので、なんだか結局、こうして原稿を書くのと同じくらいの時間を、プログラムを書くことにとられてしまっている。御存知ない方には是非覚えて帰って頂けるとのちのち何かの役に立つと思うが、コードを書くスピードというものには、熟練者と素人の間に数十倍から数百倍の差が存在する。全く書けない場合もあるから、無限大倍の差がつくことだってあるわけだが、ここでは一応、とりあえずのことはできるとしておく。慣れた人間が一時間

でできることに、四、五日かかったりするわけだ。これは他の

業態ではあまり聞かない話で、サンドイッチをつくるのにそんな能力差があると、食べ物の態をなさなくなる。小説家と呼ばれる者たちの間にも、そのくらいの速度の差はあるのではないかと問われるとそうかも知れないが、小説には、基本的に間違いようがない、という違いがある。コードは間違いを書くとき動かない。少なくともエラーメッセージを吐くというあまり楽しくない挙動くらいしか示さない。コードには、たとえ人間の都合にしても正しい振る舞いというものがある。小説にそんなものがあるかはわからない。

さて、今回は二枚の図を登場させたい。どこかこの近所のページにあるはずだが、わたし自身はそのメタ情報を保持していない。

わたしがこのマイアミ滞在中に描いた図だ。

描いたというのは正確ではなく、書いたのだ。つまり、この四角い枠や矢印の線を描いたのはわたしではなく、わたしではない他のプログラムである。名前を `Graphviz` という。こいつは、要素と要素の繋がり方をテキストで、つまり文章で書いたファイルを渡してやると、なんとなく良い塩梅にグラフを描いてくれるという気の良い奴だ。「A↓B」と書いた手紙を渡してやると、AとBという要素を枠で囲み、

AからBへと矢印を勝手に書いてくれる。やたらと複雑なグラフでもそれなりに見やすい形に並べてくれる。しかし、こ

この線をちょっと曲げて欲しいとか、この要素をちょっと右に動かして欲しいとかいう要請には応えてくれない。この図を具体的な線として描いている `Graphviz` は寡黙で気難しい職人みたいなもので、受けつける言葉がすごく少ない。そりゃまあ、`Graphviz` だってプログラムなわけだから、それ自体を書き換えてしまえばなんだって可能なわけだが、それでは、小説がつまらないので作家の人格を改造しようというのと同じことになってしまう。そういう場合は、別の小説家を探す方が素直であるのだ。

ここでわたしがまず用意したのは勅撰になる二十一の和歌集の名前のリストで、これをファイルにテキストとして保存する。そうしてそのファイルを読み込んで、`Graphviz` が理解可能なテキストに変換するコードを書いた。図1は見たと通り、和歌集のタイトルを構成する文字の繋がり方を示している。そのテキストを書くために何が必要かというと、たとえば「古今和歌集」であれば、この文字列を「古↓今」「今↓和」「和↓歌」「歌↓集」へと変換してやればよい。

今ここで書いているように、手で書けば良い。

そうかも知れない。でも忘れないで頂きたいが、勅撰和歌

集は二十一あるのだ。ちょっとやっつけてられない、とわたしは思った。それに絶対間違えるだろう。この場合、コードを書くのはそんなに面倒な作業ではない。「古今和歌集」を「古」「今」「和」「歌」の五つに分けて、それぞれの間を矢印で結んでやれば良いだけなのだ。

```
% ruby -e " 古今和歌集".split  
(" ").each_cons(2).map{|i| puts  
  i.join("↓") } ,
```

とでもすれば、

古↓今

今↓和

和↓歌

歌↓集

という出力が得られる。ほんの一行書くだけだ。これだけでは有り難味も別にないが、分解する文字の方が増えたとしてもコードの方はそれほど増えないところが良い。これを、全ての和歌集の名前に対して繰り返して、`Graphviz` に渡せば良いということになる。

出力されてきた図1を見て湧いてくるのは、まあ何か冗長だという印象だ。たとえ日本語を知らない宇宙人が見たとしても同じことを感じると思う。漢字の意味に関係なく、ネッ

トワークの形だけから何かの塊が見えているわけだ。虚心に眺めて「古今」と「千載」「拾遺」「詞花」「風雅」「和歌集」は一つの枠で囲ってしまいたいという気持ちが起こる。しかしその気持ちは何なのかはわたしにもまだわからない。この気持ちには「玉葉」や「金葉」もまとめてしまいたくなる衝動とは何かが違う。それを言うなら「勅撰」も気になる。何なの、この気持ち。はっきりしない、もやもやとした気持ち。単に日本語の意味を知っているからそう見えるだけなのか、それともこれは本当に、文字たちの関係だけから呼び起こされる心の動きなのだろうか。でもやっぱりどうしても、「和歌集」はひとまとまりのものに見える。でもどうしてそう感じるのかはわからない。自分は何を感じ取り、そう判断しているのか、考えるほどわからなくなる。

そこでたとえばこんな考え方はどうだろう。

「自分に続く文字が一種類しかない場合、自分とその文字を繋げる」

こうすると、「古今」と「千載」「拾遺」「詞花」「風雅」はまとまる。ちょっと拡大解釈して「和歌集」もまた良いでしょう。これで良いのじゃないか。自分が感じていたのはそういうことだったのだ。いやでもしかしこの場合、「新勅撰」も入ってしまうことになり、「金葉」も「玉葉」も入り、「詞花

和歌集」も「風雅和歌集」までも入ってしまったし、「葉和歌集」や「撰和歌集」なんてのもできてしまう。その基準では「新勅撰和歌集」だって認めないといけないのじゃないか。どうも自分が感じていたのは、そういうことではなかった気がする。自分が何を感じているのかわからないのは気持ちが悪い。ざわざわとくる。

英多はベッドの上を転々としながら図を空想の中でひねり続ける。頭を振ってベッドから降り、タイル敷きの床をぺたぺたと裸足で歩いてバスルームへ行き、シャワーを浴びてひげを剃りつつ考える。しばらくシャワーの下でばんやりしてみ。体を拭いて、冷蔵庫から水を取り出し、一口含んで元へと戻す。ベッドに戻り、肘をついて図を睨む。この世には、書く嘘になることが存在する。わたしは人間だとか、わたしは人間ではないとかいった事柄は、あまり嘘でも本当でもない。一足す一は五だとかいうのも、多分嘘でも本当でもない。石が空へと飛んでいったと書いたとしてもそれだけでは嘘にならない。でもなにか、単純に嘘になってしまう事柄はあると英多は思う。嘘ではないものがみつかるまでは、道を遮る壁が存在している。ここはレトリックで切り抜けるべきところでも、切り抜かれるところでもない。耳を澄まし、窓を眺める。ふと、自分はこうしてこんなところにいるのか

とを感じているようには思えないのに、何故かそれがわたしの頭が働くやり方らしいのだ。さてこれですっきりしたので、テキストファイルを手で編集し、それらをひとまとまりにしたグラフを描いておくことにしようとなつた。わたしは考え、それでは駄目だと手を止める。つまりわたしは、勅撰和歌集の名前が入ったファイルを読み出し、今わたしが見つけた判定基準に従って、Graphviz氏に理解可能な形でグラフの構造を書き出すコードを書かなければいけないわけだ。

自分が何を感じているのかを理解するのは、意外に難しい。そうして自分が理解している手順を、相手にも実行可能な形で伝えることもまた意外と難しい。

わたしはサウス・ビーチのオーシャン・ドライブに面したホテルの一室で、もうそれが何のことだかもよくわからなくなってきた。勅撰和歌集のタイトルを理解するためのコードをこうして書いている。窓は締め切り、冷房をかけ、ベッドの上で枕に背を預けて作業している。窓の向こうには車道を挟んで椰子の木と並ぶ芝生が広がり、その先の植え込みの向こうは砂浜で、固く白い砂の敷かれた幅広の歩行者用道路が併行しており、ランニングする人々の姿があるはずであり、その向こうへはまるで誰かの想像が溢れたような青い海が広がっている。朝はそれほどでもないものの、日中は本当に嘘

と思う。一体自分は誰なのかと思う。何故今このときに本当の自分はボストンにいて、こんな自分のことを書いているのかと思う。ラップトップに開いた窓の中の図を見つめる。線の繋がりを目で追っていく。明らかに存在していることは知られるのに、どういう性質で成り立っているのかわからない存在を感じ取ろうと試みる。その性質を見いだすことが、その存在を生み出すことだとわたしは感じる。

閃きというほど鋭いものではない。むしろ、泥の中から拾い上げるようにもつたりしている。何かを掴み、洗ってみると別物であり、そのままなくなってしまうたりもし、それを何度も繰り返し、そうしてようやく、何かがみつか。他の人はいざ知らず、わたしがここで感じていたのは、結局こういうことだった。

「自分に続く文字が一字しかない」かつ「続いた文字の、一文字前の文字は、元の文字に限る」場合、ひとまとまりのものとして認める。行きも帰りも一本の道しかないなら同じものに属するとする。

こうするとたとえば「勅撰」は、「勅」から「撰」には一本道だが、「撰」から遡るには分かれ道があるので駄目だ。わたしが感じていた性質は、どうもこういうものだったらしい。

この性質を記述した文面を眺めていても、自分がそんなこ

のような青さを誇り、その青さを頭の中に呼び起こす短い言葉はわたしは知らず、この文章を書けるのは今だけだろうとあの時考えたものだ。と今これをボストンで書いているわたしは思う。探していたアメリカの部品の一つ、青い海は、ここアメリカにあったわけだが、ホテルの前のレストランから夜通し聞こえる音楽はラテンのメドレーと、客の誕生日を祝うハッピーバースデーの曲ばかりで、ザ・ビーチ・ボーイズではない。その部品はこの現実を構成していない。わたしはラップトップと海を見比べ、ひとまず散歩に出ることにする。どのみち、ハウスキープの時間、部屋をあげる必要があった。

「貫之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有之候」正岡子規がこう書いたのは、明治三十一年二月十四日の「再び歌よみに与ふる書」においてである。この年、二月半ばかり三月頭にかけて、十回にわたり「歌よみに与ふる書」が掲載された。二月十二日、二月十四日、二月十八日、二月二十一日、二月二十三日、二月二十四日、二月二十八日、三月一日、三月三日、三月四日ということだから、ほとんど日をおかず、矢継ぎ早にと言って良い。日清、日露戦争の狭間ということまで世相も慌ただしかったのではないかと思われる。ほんの三週間ほどの期間では、そもそも気づかなかった者が多かっただろうし、反論するにも性急なものにならざるを得

なかっただろう。奇襲とでもいった感じで、攻められる側に多少同情の念を禁じ得ない。あらかじめ用意してあった原稿を順に載せるということではなく、寄せられた反論に対応しつつ話をすすめていたりもするから大変なものだ。

ちなみに、古今よりは新古今がまし、定家には歌が上手いのか下手なのかよくわからないところがあって、鑑賞眼はあるようなのだが、自分の歌となると駄目である、というのも同二回中の発言である。

よくある誤解に、子規の言う「写生」は、客観性のことである、というものがある。子規にとつての歌とはただ風景を写したもので、内面などは関係ないのだ、あるいは写真のようなものであると何故か言われる。無論そんな見解を子規は否定しており、「六たび歌よみに与ふる書」に言う。「生は客観的にのみ歌を詠めと申したる事は無之候」。自分は、客観的に歌を詠めと言ったことはないと言う。「客観に重きを置けと申したる事もなければ」と続けているから、客観的に詠むのが良いと言うつもりもない。この第六回の末尾はこうなる。「生の写真と申すは、合理非合理事実非事実の謂にては無之候。油画師は必ず写生に依り候へども、それで神や妖怪やあられもなき事を面白く画き申候。しかし神や妖怪を画くにも勿論写生に依るものにて、ただありのままを写生すると、一

貫之は貫之時代の歌の上手とするも、前後の歌よみを比較して貫之より上手の者外に沢山有之と思はば、貫之を下手と評することまた至当に候」

と云う。もつともであり、前向きな見解である。後にもつと優れたものが出てくれば、前のものは下手とされて当然である。あくまで比較の問題であり、歴史的な事情はまた別に考えよという。すなわち絶対の下手性や上手性ともいうべきものの存在は子規も認めていないわけで、至極当然のことではあるが、わたしは困る。ここはもう少し強く出しておいて欲しい。たとえば何かの基準を設けて、二十一代集の文字列を処理していくと、下らぬ順に並ぶ、ということが起こると助かる。勿論、そんなものは絶対的な基準であるはずはなく、恣意的なものに決まっているが、別の用途に用いることができればそれで良いのである。更に後代の歌集に同じ処理を施してみるといったことができればなお良い。二十一代集の評者のようなものに、別の歌集の感想を聞くことができれば楽しいとわたしは思う。

機械になんて、文章の善し悪しを判別できるはずがないという方には少し考えてもみてもらいたい。もしもあなたが電子メールを日常的に使っているなら、迷惑メールを排除してくれているのはそれら機械的な読者であるのだ。迷惑メール

部一部の写生を集めるとの相違に有之、生の写真も同様の事に候。これらは大誤解に候」

写真は合理、非合理、事実、非事実のことではないという。妖怪などを描くのも写生によってである。そんなものはいはしないが、いるものからの組み合わせで描くのだという。なかなか難しいところだと思う。

わたしが「歌よみに与ふる書」を読み返しているのは単に、仕事として与えられた勅撰集をどう扱ったものか、途方に暮れているからである。子規に言わせると「代々の勅撰集の如き者が日本文学の城壁ならば、実に頼み少き城壁にて、かくの如き薄ッぺらな城壁は、大砲一発にて滅茶滅茶に碎け可申候」ということになり、だから自分が加勢して、すこしは日本文学が外国と戦えるようにしてやろうということだから勇ましい。マイアミでこうして日向ぼっこしている自分などは長閑なものだ。

ともかくも、古今集は「くだらぬ」ということだから、子規なりにくだらぬとする理由があるのである。それが「くだらぬ」という性質ならば、何かの形として取り出すこともできるのではないかとわたしは思う。たとえばもしか統計的に。「昔は風帆船が早かつた時代もありしかど、蒸気船を知りてをる眼より見れば、風帆船は遅しと申すが至当の理に有之、

なんてそんなに届かないと言われるかも知れないのだが、それは既に迷惑メールが排除された状態を見ているからだ。現代のネット上の通信量では、本来必要とされる情報よりもその手のスパムの方がはるかに大きい。機械的な読者がいなければ、あなたは今受け取っているメール以上の数の迷惑メールを受け取ることになるわけだ。

どうやって善し悪しを判定するのかというのは勿論、文字から判定する以外にないのだ。署名を信用するという手もあるが、それだってまた文字である。基本的には出現単語とその頻度、繋がりなどから弁別する。そうしたことを可能としている機械学習の分野は急速な広がりを見せ続けているが、文学への応用はまだあまりない。ないのはやはり、現状の機械学習が得意なのは読むことであり、書くことではないからかも知れない。でもそれならば、たとえば批評の文脈で、もつと機械が活躍しても良いだろう。何を迷惑メールと考えるかは一種の批評行為と言える。新人賞に応募された作品を選考するのも批評の一種だ。例えば現在、文芸誌の新人賞に投稿される小説は、一回あたり二千本程度であるという。ライトノベルの分野となると方に達することもあり、SFだと千を切っている。これを少ない人員で審査しなければいけないわけだから、きつと間違いだって起こるだろう。いやそれ

以前に、まず労力が費やされるのは「小説になっていないものを落とす」ことであるときく。実見したことはないわけだが、それはほとんど迷惑メールみたいなものではないのだろうか。

であるならば、だ。募集はテキストデータによって行い、機械的な判定を試みるのとはどうか、ということになる。なんなら判定を行うプログラム自体を公開してしまっただけで良い訳で、投稿作がそのプログラムをクリアすることを、あらかじめ応募条件に入れてしまっただけで構わぬ道理だ。何文字かける何文字で印刷すること、と様式を指定するのと同じだろう。普段やりとりしている電子メールだって、スパムフィルタを通過してきたからこそそこに存在しているわけだ。

「こういうわけか迷惑メールフォルダに分類されてしまっており、気がつくのが遅れましたすみません」というようなメールを誰しも書いたか受け取ったかしたことはあるはずだ。現にこの連載がはじまる前のやりとりで、こちらから出したメールは編集さんの迷惑メールフォルダに長いこと保管されていたりしたわけで、この連載は危ういところで頓挫しかけた。

別段、ことを新人賞に限る必要性はないわけであり、たとえば芥川賞の選考過程をプログラムでなぞることだって想像できる。ここで芥川賞を対象とする理由は単純で、入力デー

「下手な物書きで、下らぬ本である」

と言われる基準がわかるわけだし、こちらとしても、あらかじめ評者を選ぶようになるわけだ。小説判定プログラムなんていう好みに強く依存するものが真理判定機械と肩を並べることはなさそうだから、気軽に首をすげかえたつて心の痛むところもないし、機械に言論を支配された暗い未来を想像する必要だってないだろう。

暗さでいえば、ビーチの波打ち際をこんなことを考えながら項垂れて歩いているわたしの現状の方が余程暗い。

一人きりの旅であるから、ビーチといっても特にすることもないわけであり、仕方がないのでドリフトグラスを探して歩いている。ビーチを歩くときはいつも探す。波に碎かれ磨かれたガラスの破片のことだが、通常はシーグラスと呼ぶはずである。砂浜はあくまで白く、管理が行き届いており、金属探知機を抱えて歩き回る人をよくみかける。ビーチにガラス類の持ち込みは禁止されており、ゴミや尖ったものは片っ端から拾われていく。ドリフトグラス探しには向かない浜ということになる。波打ち際にきらめくのは、白く潤う貝の破片だ。たまにぬらりと光る白い玉のような二枚貝の片割れがありこれが母体であるようだ。雲母のように薄く透き通るものは曇りを呑んだガラスに見えるが、貝の縞模様が畝のよう

タと出力データが扱いやすいからである。芥川賞は基本的に短編のための賞であり、個々の候補作の長さは原稿用紙で概ね百枚程度といわれ、そのほとんどは文芸誌に掲載されたものだからだ。これが他の賞となると、単行本が候補となっていることが多く、入手が困難になっていることも予想されるし、分量もかなり多くなる。芥川賞を対象とする限り、ほとんどの候補作は過去の文芸誌を漁れば入手することが可能で、選評と結果も手に入る。候補作のテキストデータと、審査員の選評と、実際の受賞作、これらを総合して機械学習を行うことにより、「次の回の選考結果を予想する」のがとりあえずの目標となるだろう。あるいはもつと手軽なところで「選評から受賞作を当てる」くらいのところからはじめるのが良いかも知れない。

わたしはこれをふざけて言っているのではなく、極めて真面目な話をしている。どこかの情報系の大学院生が研究として行ったなら、修士論文くらいには妥当だろう。場合によっては博士論文としても通用するかも知れないが、それはもう二、三、革新的な進展が必要だろうと思われる。今までに何人かの院生さんにすすめてみたことはあるのだが、今のところ実現の目は見ずにいる。

もしそういう判定プログラムが存在したなら、

に刻まれている。美しいとは思うものの、拾い集める気には不思議とならない。地球が長い時間をかけて育んできた精妙な貝の形より、人間が無骨な手で作り出したのっぺりとした素材のほうにより気を引かれる理由もまたわからない。無機的な均質さを備えたガラスが波に磨かれた姿の方を何故美しいと思うのか、理屈が通っていない気持ちが出てくる。生から切り離されて磨かれていく貝殻と、幾何学から逃れて摩滅していくガラスの向かうところは同じであるのに。

海と浜の境界を歩く英多の目に、潤いに満ちた透明な球がふと写りこむ。しゃがんで観察してみると、打ち上げられたミズクラゲであるとわかった。そう、クラゲは悪くないと英多は思う。このまま乾いて、風に吹かれて消えてしまう。持ち帰ることはできないが、何かの形で可能なら、ドリフトグラスと並べても良い。その午前中、浜で一番透き通った存在は、貝殻でもガラスでも思考でもなく、そのクラゲということになる。

ポストンへ移動してきた英多はやはりベッドの上でこう記し、少し綺麗すぎたかと読み返してみる。もつと益体もない文章で前段を終えるべきだったかも知れない。

たとえばこんな。道を歩いていたところ、ぽふ、と気の抜けた音が聞こえて、続いて何かが地面に当たる音がした。そ

ちらを見ると、中身の液体を撒き散らしながらこちらへ転がってくる椰子の実があり、なるほど南国であるな、と感心してはみたものの、しばらくしてから、自分は何者かに狙われているのかも知れないという気持ちが生じた。頭上から植木鉢が降ってきたり、材木が倒れてきたりするあれだ。少し想像を巡らすだけで、心当たりも二つみつかる。

一つ目は、これは「ラジカセを肩にかついで海辺を歩く男」の犯行によるものだということだ。何かの事情で姿を隠すことになった「ラジカセを肩にかついで海辺を歩く男」はある日、自分が謎の東洋人によって探されていることを察知する。やるかやられるか、やると決めた男は多分、肩に担いだラジカセの音量を調整するか何かして、椰子の実をぞいつの頭上に落とすのだ。距離が離れていたのはまずは警告といったあたりか。はじめにミステリーがあり、ミステリーは文学とともにあり、ミステリーは文学であり、文学は結構ミステリー仕立てなのだからありそうなことだ。

二つ目は、「豪華客船の犯行」というものののだが、これには若干の説明が要る。実は英多は、自分が豪華客船にストッキングされているのではないかと疑っている。あるときにふと、旅行のたびに遭遇する豪華客船の数が多すぎるのではと気がついたのだ。大阪の海遊館に行ったときには飛鳥Ⅱが埠

あり他の地域で食べるとあまり美味しくないかも知れない。湿度の高い気候に、レモンや溶かしバターがとてよく合う。売っているのはハサミを備えた脚ばかりであり、他の脚や甲羅はみかけない。アメリカ人の食の好みというものかと思っていればこれは違って、かかった蟹の片方のハサミだけを取り、海に返しているのだという。するとハサミは再生するから、また片一方を頂くということになる。運の悪い奴は何度もハサミをとられることになるわけだから、これは一個の主題や何かの契機となりそうだ。我が身に置き換えるとかかなり辛い。

と英多はテイクアウトしてきたロブスター・ロールを食べつつ思う。こちらはボストンの名物であり、甘いパンに茹でロブスターの肉を挟んだものだが、ロブスターはやはりどうやっても大味になる運命の下にあるのかも知れない。ボストンの気温はここ数日十度前後で、途中何度も捨てかけたコートを持ち歩き続けることを選んだ過去の自分を褒めてやりたい。

英多は引き続きここでコードを書いており、マイアミでは図2を書くまでがやっとだった。今はようやく二十一代集を読み込んでいる。読み込むというのは内容を検討しているという意味ではなくて、データをラップトップのSSDに移し

頭におり、七尾へ行ったときにも飛鳥Ⅱが接岸していた。ヴェネツィアへ行った時は街が人で一杯になっていたって何事かと思ったところ、豪華客船がついたのだと教えられ、またあるときはタオルミナのホテルからばんやり海を眺めていると、つと海に向こうから豪華客船が現れ出でて、乗客を小舟に下ろしはじめた。そう考えてみると、ニュージークランドのオークランドへ行ったときも、ラグビーのワールドカップに合わせて、豪華客船がやってきていたことを思い出し、これはさすがに偶然にしては遭遇頻度が高すぎるのではないかと思つたわけだ。マイアミでも空港からタクシーで移動する間、どこかで豪華客船を見かけた気がする。豪華客船の一族が自分をお伽噺があり、お伽噺は文学とともにあり、お伽噺は文学であり、文学は畢竟、作り話なのだからありそうなことだ。

あるいはこんな。マイアミの冬から春にかけての名物に、ストーン・クラブという蟹があり、これはもう石のように固い殻を備えている。どのくらい固いかというと、木槌で割ってもらわないとどうにも手出しができないくらいに固い。蟹肉を鶏のささみに寄せたような、均質でみつしりとした肉質に食べ応えがある。蟹としての風味は弱く、南国らしい淡白さ、オリオンビールのあのすかさずとした感じと似たものが

ているということである。今度は和歌集の名前と、勅撰集としての番号、そのデータが置かれているURLをリストにしてい。和歌集の名前はそのままファイルの名前に使いたいから、アルファベットでつけておく。さて気軽にアルファベットでと言ってみたものの、新統古今なんてあたりはどうアルファベットにしておくべきか。Shin-Shoku-Kokinか。Shin-Shoku-Kokinか。なんでも良いが統一的な方針を決めねばならず、そんな些細な事柄でも、何かを決めるには苦痛が伴う。ここは素直に、英語版のWikipediaの項目に従い、Shinshoku kokinとすることにした。他のものもみずらずらとこの式で書く。日文研にある勅撰集のURLはたとえば

`http://tois.nichibun.ac.jp/database/html2/waka/waka-i.html`という形をしており、これは素直だ。★のところへは001から023までの数字が入る。何故23なのかというと、金葉和歌集に三つの番号が振られているからだ。金葉集は白河院が編纂を命じたものだが、最初に出来上がってきた和歌集は、古くさいという理由で捨てられた。作り直した和歌集が今度は斬新すぎると捨てられ、三度目によりやくこれでよからうということになつ

て落ち着いた。そんなわけで金葉和歌集には三つのバージョンがあり、ここでは最後のものをとることにする。

次に書くべきコードは単純で、この名前とURLのリストから、「そのURLにあるデータをダウンロードして、ファイル名をつけて保存する命令」を書くコードを書く。このコードは二十一行の命令文を出力することになる。それらの命令文を実行すれば、二十一個のファイルが手に入る。手に入るのはhtmlで書かれたファイルであり、そこには、それぞれの和歌集に含まれる歌が、表の形で書かれている。ここから目標の文字列だけを抜き出すのだが、とりあえず漢字はやはり面倒なので、ひらがなのデータだけを取得しておくことにする。そもそも漢字のデータを持たない勅撰集も多いのだ。二十一個のファイルとも、読みの間は統一的に「二」で区切られている。テーブルの構造をにらみ、どうやればその文字列だけを取り出せるのかを見極める。正規表現を使って取り出すわけだ。これができなければ数百から数千、総計万を超える歌をいちいち手で入力する羽目になる。御免蒙る。勿論、このデータベースの構築時にはそういう作業があったわけだが。ここで二十一個のファイルに対して同じコードを適用できれば早かったのだが、やはり多少は構造の相違があつて、それぞれにあたつて確認しながら進めざるを

えず、時間を浪費することになったのは残念だ。今回の紙幅的には、ダウンロードしたところまでで終わるしかないようなのでそれでも良いが。

さて、二十一代集と気軽に呼ぶが、最初の古今和歌集と、最後の新続古今和歌集の間には、実に五百年以上のひらきが存在している。明治の世から現在までがほんの百年少しであり、五百年前というと室町時代だ。これだけの幅があれば、たとえ日本語のわからない者であっても、日本語の変化を、その構造だけから見取れるのではないかと考えたとしても自然だろう。あるいは和歌はその間も変化をしないほどの強靱さを備えたものだろうか。どんな変化が見いだせるのか、答えの方はまだわからない。まだ、ダウンロードして整形を終えたばかりだからだ。

ところでわたしは、古語を知らない。それがひらがなになるとなおさらふめいだ。わたしにとっての和歌とは、ちよつとした外国語と母語の間にぼんやりと浮かぶ何かのものだ。その字面を眺めることは、勅撰和歌集のタイトルたちを眺めるような気分をわたしに引き起こす。どこでくぎればよいのかもよくわからないもじたち。わかちがきされていないがゆえにどこまでがどこまでなのか、ことばがふるいものであるせいであいまいにとけあうもじたち。わかちがきをほどこす

かんたんなしゅだんもきじゅんもない。にほんごのぶんしゅをわかちがきするためにはきほんてきにじしよがひつようなのだ。げんだいのにほんごにたいしてはりようでできるソフトウェアがでがるにてにはいる。たとえばMeCabをりようすると、

「日本語の文章を分かち書きするためには基本的な辞書が必要なのだ」という文章を、

「日本語の文章を分かち書きするためには基本的な辞書が必要なのだ」

とすることがとくにてをくわえずにできる。しかしこれを、「にほんごのぶんしゅをわかちがきするためにはきほんてきにじしよがひつようなのだ」に適用すると、

「にほんごのぶんしゅをわかちがきするためにはきほんてきにじしよがひつようなのだ」ということになり、やや混乱が生じているのがわかる。連なる文字を分けるのに辞書を用いているわけだが、その辞書はひらがなの文章を読むために作られていないからであり、これはMeCab氏の責任ではない。

「としのうちに春はきにけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ」は、

「としのうちに春はきにけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ」となる。それなりに解説できているようにもみえるし、たどたどしくも見え、わたしが和歌を見たときに感じる浮遊感をよく現しているようにも思える。辞書をきちんと整備してやりさえすれば、MeCabは和歌をきちんと形態素に分解してくれるだろう。あるいはどこかにもう既にある辞書があるのかも知れない。しかしここで言いたいことは、日本語はわかちがきをしていないが故に、形態素に分解する際、辞書が必要となり、辞書はの場合場合で作り直されなければならぬし、どの辞書を使うのかもそのたびごとに決めなければならぬだろうということだ。

だから何か。

だから何か。それはたとえば、電子的な検索における精度の低下をもたらすわけだ。その言葉で書かれた内容を検索する際に、言語によって有利不利が存在するということであり、日本語は、分かち書きをしない利点と引き換えに、意味的な検索を行いにくいという不利な点を同時に抱えているわけだ。電子的な検索なるものが存在しなかった時代にはこの問題は存在しなかった。

しかしわたしは今ここで、勅撰和歌集用の辞書をつくらう

としているわけではない。わたしにとつて、二十一代集はもっと遠いところで影のように佇んでいる。異星人の言葉のように。あるいはもう減びてしまった言葉のように。それぞれの字の持つ意味が砕けてしまった、それでも何かの意味ではひとまとまりの、やつぱりばらばらの文字の並びのように。わたしには、二十一代集の中に並ぶ文字も、それぞれの二十一代集の持つ名前集まりも、ほとんど同じ、文字の連なりには見ええない。どこから発掘された大量の文字資料であるかのように。わたしはそれをまるで知らない言葉のように眺めている。実際ほとんどわからない。未知の言葉を解読するように扱っている。わたしはここでそれらの文字を手探りしている。連なりを追い、文字と文字の網目から単語のようなものを見いだそうとする。それらの単語らしきものが何を意味しているかまではわからない。意味は抜け落ち、そこには形だけしかないからだ。勿論、ここであげた二枚の図のようにして、二十一代集の名前に使ったのと同じ手を、歌に対してそのまま使うことはできないだろう。N - g r a mあたりからはじめることになるはずで、実際そのためのコードも少し書いてみた。その結果について次回以降に報告できるかどうかはまだわからない。わたしが再び登場人物として現れることができるのかさえ、まだ不明の事柄なのだし。

鮭釣りを『みたいな響きだ。』何かの本のタイトルみたいだ」

やや間があつて思いつき、こう結んだ。

「僕は、マイアミで古今集をばらしていました」

IV

河南の地は、星川と英多が五月末日、吉祥寺のドトールの一階ではじめて顔を合わせたときに生まれた。二人とも傾向としては男性型で、昼日中もあつたから、いきなり柱を巡りはじめて出合い頭に繁殖を試みたりすることもなく、非常に事務的にことは進んだ。互いに名前の候補を出し合つて、そのあたりであろうと決めたのである。結局、十二の氏族が河南の地に入植したのは、多分に偶然の出来事であり、見切り発車以外の何物でもなかったということになる。二人ともここでまた一から、地名生成プログラムを書くような根気はなかった。

河の南ということだから、そこは肥沃な土地なのだろう。いきなり山奥に棲み着くことは想像しにくく、まずは妥当なところと思えた。河北となると字面に厳しさも漂うところ、南という字にはどこか、それだけで人の気持ちをやわめるところがあつて、二人はそこに生じた弛みへと滑り込むことにしたので。川ではなくわざわざ河ということだから、これは大

ボストンにまで会いにきた、これは登場人物ではない初対面の人物は、ひととおりの挨拶を終えたあと、綺麗な日本語でこう言った。

「デトロイトであつた『ころ』の百年記念シンポジウムから帰ってきたところなんです」

「『デトロイトで漱石』ですか」とわたしはやや呆然として言う。まるで『スターシップと俳句』か『奥ノ細道・オブ・ザ・デッド』か『禪とオートバイ修理技術』か『イエメンで

きな水の流れるであろう。おそらくは放浪の人々が旅路の果てによりやく辿り着いた土地なのである。先住の者の姿はなかった。

「それはあまりに」と英多は言う。「都合の良いすぎる設定ではないか」

「ただでも遅れに遅れているのに、この上、最初の戦いまで描こうとでもいうのかね」と星川は応え、英多は、むう、と言葉に詰まつた。アイステイのグラスを見つめたまま、半ば独白のように語りはじめる。

「では肥沃な土地に誰もいなかった理由を考えねばならん。何かの災害に襲われたあとだったのか、真実、人類未踏の地であつたのか。ともかく、人口密度が今よりはるかに低かつた頃の話ということになるのだろうか。さて、その星では——舞台は星の上ということで良いのかね。球形はしているのかね」

「重力を考えるとそうしておくのが無難だろう。逆自乗則を変更するのは大規模な作業になってしまうし、辻褄を合わせるために魔法なんかも必要となってしまうだろう」

「ではそれでよいとして——その星の上に人類はどうやって発生したのだ。これもアフリカに生まれ、世界中に広がっていったということではよろしいのかな」

そう言いながら、英多はこの五月の頭、ニューヨークでの滞在を思い出している。シアトル、セントルイス、マイアミ、ボストンを経て辿り着いたニューヨークでの書店イベント中、ずっと自分は何故ここにいるのだろうかと考えていた。だから素直にそう言った。

「今日は、わざわざおいで頂き有り難う御座います。この移動中、わたしはずっと、自分がただお調子者なのかを考えていました。極東の島の一つから、こうして言葉も違う場所へと、違う言葉しか用いることのできない人間がひょひょことやってくるということは、かなり不思議な出来事です。迂闊な者でなければやらないでしょう。」

わたしは今日のイベントを皆さんに楽しんで頂けるか、不安を抱えているわけですが、しかしこうも気がついたのです。ここにいるということだけで、皆さんもかなりのお調子者であるはずだ、と。日本語に興味を持つなんていう人はお調子者に決まっている——という意味ではありません。

人類はアフリカで生まれたとされています。それがなにかどうにかした具合で、地球上に広がりました。別の土地に移っていくような人物は、まずお調子者だといえるでしょう。それは当然、虐げられ迫害されて別天地を求めたということも多くあったはずです。しかしその根本に何かの種類の、底

どうやったってできないような気もしてくる。文学とは人類のためのものであり、他の人類とか宇宙人なんかには意味のないものなのだろうか。

「歴史は踏襲しておくのが無難だろう」と先の英多の問いを引き取り星川が言う。「我々が人類を踏襲した形の登場人物であるのと同じ事情で。それに起源が問題となるほど昔に設定する必要もないだろう。人類がここまで数を増やしたのはごく最近のことで、にすぎない。ローマ帝国が最大の版図を誇った二世紀初頭の世界人口が二、三億、その千年後のモンゴル帝国の頃でまだ四億程度だ。諸説があってもオーダーとしてはその程度だ。現在の合衆国の人口と大差ない。その程度なら世界帝国だって築けそうな気がしてくるな。争おうにも相手をみつける方が大変そうだ。ともかく、そのあたりはおおらかで良いだろう。手つかずの森を拓いたということの良いのではないか」

「モデルとなる都市があったほうが良いかも知れない」と英多は言う。

「大きな河となると限られる。そのあたりはぼやかしておく方が良いと思う。どのみち、仮定法過去形と過去未来形の中に浮かぶ街となるわけだから」

星川が言い、時計を見上げる。午前十時を十五分ほど回っ

抜けな樂觀を持つていなければ、どこまでも続きそうに見える森に踏み出したり、対岸も見えない海へと漕ぎ出したりはできなかっただろうと思うわけです。

大西洋は、初期人類には広すぎたと考えられています。アフリカの角を出た人類は東へ向かい、当時地続きであったベーリング海峡を超えて、この大陸へ至ったのだらうと言われています。移動の距離が、お調子者の度合いと関連すると考えるなら、わたしよりも皆さんの方が、皆さんの祖先の方が、はるかにお調子者の血筋であるということになるわけです。

そうしたわけで、今日はお調子者同士の相互作用で何か面白い反応が生まれると良いなと思っています」

まあ、人類が居住地を広げ続けていた頃には、別種の人類も同時に存在していたわけだがなと英多は思う。ネアンデルタール人であるとか。今や別種の人類などはSFの中に押し込めてしまつて知らぬ顔をしているが、現生人類は枝分かれを続けた人類の、一番長く伸びている枝にすぎないわけで、かつては何本かの枝が併存していた。そうした設定は要らないのかと英多は思い、その設定とは何かと思う。別種の人類が設定された話なんというものを、人類の手で書くことはできるのだろうか。できなければおかしいような気がするが、

ており、英多もつられて携帯電話で時間を確認する。「こないな」と一方が言い、「こないな」と他方が応える。「その方が有り難いが」と英多は口の端で笑い、「二十一代集の解析が全然進んでいないから」。

宿題か、と星川は同情するような顔をつくつてみせ、「そういえばあれは見つかったのか」

「何がだ」

「『ラジカセを肩にかついで海辺を歩く男』だ」

「ああ」と英多は表情を一度わずかに明るくしてから、「駄目だった」と暗くした。「絶滅してしまったのではないかと思う……」とまるで黙禱するようにして黙り込む。それから携帯電話を取り上げて、何かを探す様子である。ややあつてから、画面を星川へ向けて突き出す。横長の黒く四角いカードのようなものの上辺に白線が引かれており、その下には進入禁止を示すような、線を袈裟懸けにした赤い円が三つ横に並んでいる。左から順に円の中には、煙を出している紙巻きタバコ、片手を水平に上げ、指先から何かを下方へ放出している男、ラジオカセットデッキが描かれている。

「これは」と片眉を上げた星川へ向け、「ニューヨークの地下鉄でみつけたものだ。痕跡はこれしかみあたらなかった。少なくともそう遠くない一時期、彼らは

「ニューヨークの地下鉄に隠れていたのだ」

星川は顔を曇らせたまま、

「だが、こうして禁止された――」

英多は深く頷いてみせ、

「おそらくは浜辺を追われた『ラジカセを肩にかついで海辺を歩く男』は流浪の末に、この地下の街を見いだしたのだ。

しかしそことて安息の地ではなかった――」

「設定上の無理が祟ったのだと思うか」と星川が訊ね、

「技術革新を甘く見たせいであるかも知れない」と英多が応える。

喫茶店で対面している二人はしばし黙り込んだまま、滅びたであろう種族へ思いを馳せ、そうして、ゆつくりと他人を悼んでいる場合ではないと思ひ返した。自分たちがここに集っているのは、そろそろ舞台を整えていく必要があるからで、たとえ提唱者の雀部が現れなくとも、作業を進めていかないと、いつまでも根無し草でいることになる。

「まあ、天体の運行は」と英多が言う。「最初の一押しだけがあり、あとは惰性だということだからな」

星川と英多は、河南の土地に集まった十二の氏族に属している。それら十二の氏族の中に、雀部の名は見当たらない。河南に辿り着くまでの旅の途中に途絶えたのだとも、方針や

「Pr o l o g u e . 0 1 . 0 2 . d o c」
「P r o l o g u e . 0 2 . d o c」
「P r o l o g u e . 0 3 . d o c」
「P r o l o g u e . 0 4 . d o c x」
「r a b b i t - d u c k . J P G」
「p l o t . d a t」
「P 0 1 0 - 0 2 3 - 連 載 - 円 城 塔 0 5 : i n d d」
「p r o l o g u e 3 . E n J o e . p d f」などなどがあ

これは駄目だ、と榎室ならずとも思うであろう。作業中にはきつとわかつていたのだろうが、一体どれが新しく古いのか、どこから手をつけたものが皆目不明だ。それでもファイルの末尾が「final」とか「last」とか、「final・last」あたりになっていないところには多少の救いがあるとも言え、まだ渾沌から世界を救い出すことは不可能ではない。比較的まとまった秩序を持つ「P010-023-03」連載「円城塔05・indd」などは、これはおそらく、編集さんからもらったデータだろう。ファイル名を眺めているとはなしに意味がわかるようになってるのは加要素だ。おそらくは円城塔なる書き手の連載第三回目が p10-23 に予定されており、その五番目のページョンなのだろうということまで

信仰の違いから袂を分かつたのだとも言われる。歴史家の中には、この雀部の一族を、先祖殺しによつて神格化され、そうして忘れられた存在だとする者もある。のちに同じく河南と呼ばれるようになる街で発見されることになる神秘的な信仰の共同体が、ササベと呼ばれる棒切れを祀つていたことがその根拠とされるのだ。このササベ信仰の歴史は浅いとする者も少なくなく、近代になつてから起源諸共に生み出された信仰だとも言われ、最近はこのササベとは、待ち合わせに遅れてくる神の一種であるとするのが一般的になりつつある、と星川と英多はすることにした。

「榎室は、本当にただ遅れるそうだ」

と、英多が携帯電話の画面に表示されたメールらしきものを示しながら言う。

いまどきこれほどそのまま私小説でもないのではないかと
いうのが榎室の意見なのだが、これが私についての小説だと
して、どうもこの私というのは形が入り組みすぎていて何が
なんだかわからない。今、榎室の前に広がるデスクトップに
置かれたフォルダの中には雑多なファイルがばらまかれてお
り、ぱっと目につくだけでも「fig1.pdf」「fig2.pdf」「Prologue.01.doc」

では推測できる。そう悪くない名前のつけたのだが、これが果たして本当に最終バージョンなのか、六番目のものはないのかが不明というところに不安は残るし、もしかして三回目ではなく、三月号かも三月分かもわからない。いや五月号の三回目か。三月号の五回目か。そうしてやはり現状では、日本語ファイル名はやめた方がよいと思う。このファイル名にあるとおりなら連載ということだから、
「Prologue・01・doc」、
「Prologue・02・doc」、
「Prologue・03・doc」はおそらく、一回目、二回目、三回目の原稿なのだろうと思われる。
「Prologue・01・01・doc」、
「Prologue・01・

02 : doc」というのはバージョンの違いを指すのだろう。doc というからにはマイクロソフトのワードをエディタとして利用しており、何故かちよつと古い形式で保存しているわけだ。これはおそらくどこかの編集さんが、新しい形式のワードのファイルを手元で開けなかったことが過去にあったのだろうと思われる。「Prologue : 04 : doc」はどうもこの原稿自体のようだから、ここでもか心情の変化が起り、doc をやめて docx で保存する

ことにしたらしい。何故自分のデスクトップを掘り下げて、遺跡から古代人の生活を読み取るようにしてファイルを探す羽目になっているのか、困ったことだ。

画像のファイルと文章のファイルが別々に整理されていないのも頂けないし、「figl.pdf」という名前もちょっとない。figって。「plot.dat」というのは何か。まさかこの話にプロットが存在していたのかと思って覗いてみると、何かメモ書きのようなものが並んでいるだけだった。このファイルがここに混ざっているのだってやっぱり駄目で、そういう、設定上重要であるべきファイルにはもつとしかるべき扱い方があるべきで、どこかでこういうファイルの整理の仕方をきちんと教えるべきだと思う。情報リテラシーとかなんとか以前に、これは国語の問題だろう。それにこれまでも何度か登場してきたコードは一体どこにあるのだ。

原稿の最終バージョンを手元に持つことができない、というのが目下、榎室の最大の悩みごとである。たとえ暫定的なものだとしても、連載各回の完成稿が手元にないのだ。それが引き起こす面倒ごととはまあたやすく予想がついて、前に何を書いたかなんてひと月経つと忘れてしまう。書いたことくらいは覚えていても、何を書かなかったかを覚えておくことは難しく、一旦書いて消した場合などは尚更だ。なにをどこ

うと、これが大変に難しいというか面倒くさい。ある人などは、「出版社は作者にわざとデータを渡さないようにしているのだ」と主張していたが、多分そういう深慮遠謀あつてのことではなくて、単に手が回らないだけだと思う。これはもう完全に、紙文化の中で特異に発達してきた書籍というものの仕事の進め方のせいであつて、一言で言つて、良くない。WCあたりが強く勧告するべきだ。なにより厄介なことには文芸の世界には、データとしての最終稿という考え方が存在していないのだ。印刷できているのだから、データも存在しているだろうということまでは正しい。しかしそれは誌面としてレイアウト済みのデータであり、そこからただテキストだけのデータを簡単に取り出し直せるかはわからない、というか、普通簡単にはできない。流し込みは素直に行えても、吸い出しにはゴミが混ざることが多く、これは熱力学的な性質も関係しているのかも知れない。そもそも特別な環境を誂えないと、見ることもさへままならなかつたりする。inddなどを開ける環境は結構限られるだろう。

PCを使う書き手の小説が文芸誌に載るまでの過程というのはおおよそこうなる。書き手がメールで原稿のファイルを送る。返信があり、意見や感想がやってくる。それを元にした修正稿がまたメールで送られ、意見が収束を見るまで

まで入れていたのか、次回に回したのはなんだったのか、その人物の髪の色はなんだったのかなんなのかなんにするのか、この漢字は正字にするのだったか、ひらがなにヒラクのだったか、アルファベットは縦に組むのか横に倒すのか、などなどの自分でつくったはずの規約のどこまでを、法の適用を校閲さんに任せることができるのかはさておくとして、要は確認のために過去の原稿を何度か読み返してみる羽目に陥るわけだが、その完成稿が手元にないのだ。紙の雑誌はあるだろうと言われると、無論ある。それがおそらく普通の意味での完成稿だということにも異論はない。編集さんも毎月掲載号を家に送ってくれる。昨年担当さんが代わった頃から、何か二冊届くようにもなった。先日打ち合わせでようやく「二冊来ています」と告げたから、来月からは一冊に戻らと思うが、相手も酔っていたからどうなるかはわからない。問題なのは、自分があまり家にはいないことと、自分の連載箇所をコピーして持ち歩くような几帳面さも持ち合わせていないところで、紙に印刷された文章は何よりも検索が利かないのが痛い。この場合、欲しいのは完成稿のテキストデータだけなのだ。レイアウトの情報や、フォントの指定などは要らない。おおよそ、段落の情報と、一行あき、ルビの情報があれば足りる。ではそのデータをどうやって持てば良いのかとい

whileループが繰り返される。その段階が終わると、実際に紙面に組んでみることになり、その作業が終わったところで、ゲラと呼ばれるものが送られてくる。書き手はそれを見ながら細部を修正していくし、校閲さんからの突っ込みもここに入る。ゲラと呼ばれる存在は古典的には紙であり、これに赤ペンで書き込みを入れていく。電子的にはPDFなりのファイルであり、印刷して赤ペンを入れるか、注釈の機能でも使つて書き込んでいくことになる。これは驚くべきことだと思うが、未だにFAXの利用率は高い。何人かの作業が理想的には順々に、現実問題としてはしばしば併行して走り、それらの作業を統合する必要がある。この時点で事態はこんがらがって、修正はレイアウトされたデータの上で行われることになり、テキストだけのデータは最早用済みと顧みられず、簡単にテキストだけを抜き出す手段が失われる。さらには校了前のどたばたにより、最後の最後での修正はメールや電話による確認だけとなることも多く発生し、変更履歴の記録なども怪しくなる。

それで何が困るのか。こうしてとにかく何が回っているわけで、誌面という最終生産物まで転がり込んで辿り着きゴールのテープを切ったのだから、それはそれで良いのではないか。正しくもあるが間違つてもいて、そうしてつくら

た小説が、改めて単行本になる場合を考えよう。完成稿が紙であるなら、単行本をつくる際に必要となるデータは、紙から起こすことになる。データを一旦紙に印刷し、紙からデータに戻すことになるわけだ。ごく平常の感性ならばこれが無駄に見えねばおかしい。同じ出版社での作業であるなら、ある程度データの使い回しもできるわけだが、他の出版社から刊行ということになると、データを受け渡す義理などではなく、同社内でも場合によってはOCRで起こしたりする。更なる改善以前に、現状と同じ質を保つことにリソースが割かれるわけで、デジタルは劣化と無縁だというのは嘘だ。同じことは文庫本化の際にも起こるし、電子書籍化の際にも起こる。電子書籍に必要なのは裏表なくテキストデータだ。テキストデータをレイアウトして紙に印刷してみても、それをまたテキストデータに戻して電子書籍をつくるわけだ。壮大な無駄と呼んで良いし、仕事の時間が増えていく一方であり人員の方はあまり増えない。

これはもう自明なことと言うしかないが、テキストデータとしての完成稿を、書き手自身が持つべきなのだ。そこを起点に、紙書籍、電子書籍と二股に分かれてそれぞれの完成稿へ到るのが正気なワークフローであって、枝をまたいで右往左往行ったり来たりしながら踊るのは意味が不明だ。無論、

変わってしまったって当然だ。紙書籍がなんだかみんな大体同じ、原稿用紙二百枚から千枚程度の規模で収まっているのは、紙という媒質の性質に拘束されているからにすぎず、頭から順にめくっていくのもそのためだ。その点電子書籍の側では長さは別に自由であって、極端に短いものから筆棒に長いものまで好きに値段をつけることができ、それを流通させることが可能で、これは本来、経済の、生態系の、メディア自体の設計だ。紙の書籍で俳句を一つ売るとは想像しにくい、が、電子的にはとても容易い。

つまり紙の書式と電子書籍は本質的に物理特性からして異なるもので、両者に対し同じ完成稿が存在すると考える事自体がおかしく、優劣を比較することは、犬と飛行機を比べるくらいに意味がない。ここに、物理的実体に依存しない小説というカテゴリーの存在を仮定した上で、現実在即して考えるなら、とりあえずテキストデータだけでできた完成稿を確定し、そこから枝を分ける形で書籍用の最終稿と電子書籍用の最終稿を決定する、という段取りになるだろうということを考えるうちに時間と頁はみるみる消費されており、榎室は自分が待ち合わせの時間に遅れていることに気がついたのだ。森が拓けていくようにして、ドトールの自動ドアが開いた。榎室の一族が河南の地へ入ったときには既に、いくつか小

多くの細部がある。こだわりがあるのもわかる。しかしこれは職分の分離の話で、一人の人間があらゆることの面倒を見るのは不可能であり、拡大を目指すなら分業が常に必要であり、社長がなんでもこなす会社は大きくなることが決してできない。

具体例をあげるなら、たとえばWebページは内容とみかけの分離を実現している。少なくとも建前上は。文章の構造を規定するHTMLと、見栄えを制御するCSSが分離されてから随分時間が経過している。そうは言っても紙上では文章の構造と見栄えが複雑に入り組みうるというのは事実だ。改行して一文字だけがぶら下がるのは嫌われるし、一行空きの位置などを気にする場合も珍しくはない。そうしてなんといつても利用できる紙の枚数の制限があり、一枚に収めなければならぬ内容というものが、多すぎても少なすぎてもいけない。そういう制限のもとで発達した紙の文化と、Webの文化で作法がずれるのはそれは当然で、そうして電子書籍はWeb文化に属している。紙書籍と電子書籍が書籍という名の一点で重なっているのはたまたま偶然、たまさかの現象にすぎないように思えるし、人間の思考の限界の結果と思える。というのは、それぞれに物理的、情動的な拘束が異なっているわけで、拘束が異なれば書かれる内容だって

さな小屋がかけられており、中央の通りが策定されたところだった。衝き固められた区画や、柱が仮組みされた家々を眺めながら榎室春乃は歩を進めたが、視界の果ての霧を分けて人影が揺らめき現れる様子はなかった。切り株に打ち込まれている斧の刃は新しく、桶に汲まれた水も澄んでいる。見回しながら道を進んでいくと、共同の水場の傍ら、平たく大きな石の上に腹部を開かれた猪が横たえられている。血抜きは済んでいるようで、自らばらばらになって内臓を洗ったあとで昼寝をしているようにも見える。これではまるで住人たちが不意に消えてしまった町のようにではないかと思ひ、それではあまりにもありふれていると首を振る。

ヴァインランド。ロアノーク島。歴史の中に消え去った入植地の名前が浮かぶ。何度かの入植のち交流が途絶し、やがて放棄された遺構のみが発見され、そうして長い長い時を隔ててDNA情報での追跡調査が行われることになるような種類の土地。

心持ち顎を上げ気味にして、あたりの様子を観察する。切り株の並んだ先には深い森。一方には河へと向けてゆるやかに下る傾斜が続く。早いうちにきちんとした治水を考えなければ、早晚、村は水に吞まれることになるだろう。まだ村と呼ぶにも心もとない野営地だが。河の水は濁っている。榎室

に馴染みのある清水ではなく、大河というのはこうしたもののなにかと思う。湖であるならまだしも、どこまでも澄み切った河というのは恐ろしそうだ。透明な激流に吞まれたあとも、まだ自分が吞まれたのだと気づくことさえできずに息が詰まってしまいそうな気持ちがする。対岸が見えてはいるが、湿度が上がれば朦朧と沈んでいきそうな距離でもある。流れはとてゆるやかで、ひよっとするとどちらが上流で下流なのかわからなくなる。茫洋とした一筋の流れではなく、複数の流れが三次元的に絡み合っているようで、中には重力を無視するように逆流しているものもあり、くると渦を巻くものもある。褐色の流れには濃淡があり、透明度の違いがあつて、筆で重ねたように見える。茶色であるのに、同時に空を映して青いのだ。表面に薄くアクリルを流したような透明な層があり、そこへ空が畳まれている。

何か草むらをかきわけける音が聞こえるが姿は見えない。ちち、と小鳥の声が聞こえ、いい加減だと榎室は思う。急場のことで充分な人員を集めることができなかったのだから仕方がないが、鉱物学者に植物学者、動物学者、地質学者と、専門家をありつたけ集めることは無理としても、せめて博物学者の一人くらいは連れてくるべきだったと思う。おかげでそこに生えている草も、おどろきな鳴き声を上げる小鳥も定

「榎室」と背後から声が響いて、春乃は森を振り返る。今そこに開いたような小道が森の中へ消えて行き、手前で星川が手を振っている。星川は挨拶もなしに「来てくれ」と叫び、榎室が横に並ぶのを待ち、いささか魂を抜かれた気配で「よく来た」と言う。

「何事か」と榎室は訊ね、

「良くない」と星川が言う。「と思う」と迷って続けた。榎室は星川の背を上目遣いに睨んだが、星川は振り向きもせず下生えを掻き分けていく。

「村の調子が良いようで何よりだ」と榎室。

「悪くはない。この冬はなんとかできると思う。鹿肉が嫌じゃなければ」星川が応える。

「村が河に近すぎるかと思う」

「リスクについては承知している。しかしこの人数ではあまり水辺から離れることもできん。食い物のためにも物資の運搬のためにも。まずは拠点を確保することが第一だったのだ。一つの賭けというわけだが、今のところ大きな問題は起こっていない。これまではな。それが、もう少し奥へ移動しようとした矢先に——このざまだ」

ふむ、と榎室は首を傾げる。星川の様子を見るに、何か良くない事態が進行中であるのはわかる。しかしその口調から

型以上のものではなく、小鳥という種類の鳥なのではないかと疑いたくなる。細部がないというわけではなく、傍らの石を拾って眺めると、砂を噛んでざらざらとした地肌が見える。各種の鉱物が更に細かな鉱物に練り込まれて入り交じり、目に力を含めるとそのいちいちがまた更なる細部から出来上がっているのが見えてくる。細部が今そこから湧き出して出来上がってくるように、万華鏡の鏡同士の合わせ目を見つめているような感覚に吞み込まれていく。どこまでも細部は続き、しかしそのいちいちの連絡が弱い。ただ機械的に生成されているだけに見えてくる。まるで漢字をランダムに選んで並べただけの文章のように。不用意な繰り返しや、意味もなく崩れるリズムや、統一感のないユニット化が素人の仕事を連想させる。目眩を首の動きで振り払って顔を上げる。

河を行き来する船は見えない。ぼうつと河を眺めるうちに、黒く何か大きな背中が、ぬるりと長く河面へ浮き、頭と尻尾を欠いたまま一部だけが見えているらしい胴はどこまでも続き、滑るように水底へと戻っていった。余程巨大な生き物と見たが、広すぎる空間のもたらす錯覚かもと榎室は目を何度かこすりそのまま水面を見つめていたが、そいつは二度と現れなかった。海豚であったのかも知れない。それともこの規模の河ともなると、鯨も上るものかも知れない。

はあまり切羽詰まった感じが感じられない。全員が村を空けているというのは異様だが、敵襲といったような張りつめた気配は特になく、ただの日差しの強い夏の午後といった風情だ。星川がまた口を開いた。

「農地を確保しようとしたわけだ。そうして——掘り当てた」

星川が立ち止まり、小道は開けた土地に繋がった。十二の氏族が集うのに十分な広さがあり、今通ってきた道は急場用の近道らしい。河へ通じる細い流れが向こうに通り、掘り返された土は黒々と濡れ、掘り出された石や小石が積み上げられて畦を粗く縁取っている。ほぼ中央に大きな穴が掘られており、成人の背丈ほどの深さがあるようだ。子供たちが斜面を崩しながら上り下りして遊び、大人たちは腕組みをしたまま首を伸ばして底を覗き込んだり、顔を寄せて何かを囁きあつたりしている。星川の気配に何人かが顔を上げ、榎室を認めて目礼を寄越す。

「火星人でもやってきたのか」

畑の真ん中に開いた穴を観察しながら榎室が誰にということもなく問い、『宇宙戦争』は一八九八年だから、漱石の英国留学より先だなどと思う。

「まあ似たようなものか」と星川がこちらを誰にということもないように応える。「いや、もっと厄介かも知れない」

「どうしてあんなに深く掘ったのだ」と榎室。

「音が、な」と星川。

榎室は背伸びをするが穴の底は縁に邪魔され見通せない。星川を後ろへ残し、縁へと進む。踏み込みすぎて足下が崩れ、ばらばらとこぼれる土が下ではしゃぐ子供たちの一人に当たった。見上げた子供が榎室の顔に背筋を伸ばし、直立不動の姿勢で「こんにちは」と叫ぶ。周囲の子供たちも次々と動きを止めてあとへ続いた。榎室はまあまあとおさえるように手のひらを振る。

黄ばんだ白い棒が幾本か穴の底に並んでおり、周囲には子供たちが置いたのだろう、そのあたりから引きむしられてきた花が、ある種の秩序とともに並んでいる。ただの草や土つきの根も並んでいるのはまだ何が花であるのか、錢に使うことができるのかを知らない子供の仕業だからだろう。多くの花を収められた籠状のドームが一番目立つ骨組みであり、昔の眼鏡めいた形の白い枠組みもある。白のような形が連なり、太い棒と細い棒が寄り添うように組み合せて、端は萎んだ朝顔のような形をしている。ごく有り体に言うならば何かの骨で、きわめて人類に近い骨格だということになる。

星川がすぐ後ろに並んだ。

「我々以前にこの土地で死んだ者がある。ごく丁寧にも土に埋

まって我々を待ち受けていた」
榎室は「埋葬されていたということかな」と問いながら、これではまるで、白骨死体が空から落ちてきて、地面にめり込んでいるような風景ではないかと思う。ちょっと漫画のどこまみたいだ。音が、と星川は言った。改めて耳を澄ませてみたが、特に際立つ音はなかった。

「埋葬というほどのものは見当たらなかった。副葬品も見つかっていない」

「なるほど」と榎室。

「このまっすきはお前にはわかるはずだ。俺たちはとりあえずこの土地を、先に誰も入植したことがない土地として設定した。ここへはまだ誰も来たことがなかったはずなんだ。骨があること自体はまあ構わない。何故ここに骨があるのか、誰が埋めたのかかわからないことが問題だ」

「なるほど」と榎室。穴へと踏み出し、踵で土をかきながら、斜面に右手を添えて降りていく。子供たちが左右に分かれて整列するのに首を振り、頼むから楽にしてくれと言う。足下の柔らかな土を何度か踏みしめてみる。何かが他に埋まっていなにか充分掘り返してみたということだろう。骨へ目をする。一見するだけでもかなり古い骨である。肋骨の配置から見て、仰向けだ。骨は大きく、太く、全身はかなりのものに

なりそうだ。自分たちの十二の氏族の中にこれだけの体格を持つ者はない。有史以前のあるいは神話の巨人族じみている。

榎室には、これが人間の骨なのかどうかを判断するための知識の持ち合わせがなく、確実なことを言える者はここにはいないと知っている。霊長類のものだろうとは思いますが、榎室は人間の頸椎が胸椎が腰椎が仙椎が尾椎が幾つあるのか、幾つあるかを数えると判別がつくかどうかとも知らないし、自分の脊椎がいくつの骨からできているかを同様に知らず、自分の体を開かずに関ここで確認する方法を思いつかない。

「なるほど」と榎室は三たび繰り返し、穴の縁で逆光になってこちらを睨んでいる星川の顔を見上げて訊ねた。

「で、頭蓋骨はどこにあるんだ」

星川はゆっくり首を横に振り、「ない」と応える。「最初からなかったようだ」

「なるほど」と榎室は今度は胸の中で唱え、「それは厄介だね」と結んだ。

暦は六月に入り、気温は早々と三十度を超えており、わたしはやはり同じドールの同じ席、今日もまた寝坊したのでいつもより遅く、しかしまだ午前中ではあるこの時間に、小説のバージョンを変更する。やはり色々、無理があるように思えるからだ。大きな河というところまでは良いが、さすが

に対岸が見えないものとなると限られるし、幻想色が強すぎると思われる。得体の知れない骨が出てくるというところまでは良いとして、その正体がこのわたしにさえ知られていないとなると話は別だ。わたしは元の「Prologue・04・docx」はそのままだに、ファイルの名前を「Prologue・04・01・docx」へ変更し、多くの部分を削除して書き換えてつけ加えていく。登場人物たちは暫くの間、何が起こったのかわからぬままに、記憶の中を下り行く大河をふと思いついたり、全てを消し去る大洪水を思い浮かべたりしている。自分たちが何を忘れてしまったのかを知らないのだから、思い出せない。しかしなにかそうした形で過去に存在した設定は漠然とした印象として残り続ける。そこにいたはずなどはないのに懐かしく思える見知らぬ場所の記憶として、望郷の念として。そこへ埋められている別バージョンの自分に対して。

随分と細くなった川の傍ら、川南の地に村が拓かれていく。木が伐られ、道が通され、木は組まれ、土が起こされ、水路が開かれ、石が積まれ、怪物のように手足を伸ばして、村は周囲を探索してゆく。その村もまた川南と呼ばれるようになるだろう。その名の由来を思い出せる者はその世の中には存在しないとしても。かつてこの村は大河の傍らにあったのだ

という説話が、まことしやかに伝えられる。それは本当のことではあるが、嘘でしかない。大きな、それは大きな、大人の男ほどもある、一人では抱えきれない頭蓋骨が掘り出されたのだと人々は伝え、その骨はどこへ行ったのかと子供たちは訊ねる。お前たちの住むこの村を覆う天蓋が、その頭蓋骨なのであると老人は言い、人間は年々小さくなっているのだと言う。英多の家の末の息子が、これは学者の家柄であり、理屈を捏ねるのを仕事としており、もしも骨が出たのならと言う。もしも誰もその正体を知らない骨が出たのならと言い、「ここには先に人がいたのだ」とひどく当たり前のことを言い、息を潜めて待ち構えていた全員からの嘲笑に晒されることになる。英多はひるまず、冷然と顔を持ち上げて、「ならば問う」

と子供らしからぬ威厳をその身に纏わせて言う。

「では何故その記録は残っていないのか」そう言っただけを見回す。「かつて」とゆつくり、論ずように話しはじめる。「アフリカに生じた人類は陸地を伝い水を渡って、南アメリカの先端まで辿り着くことを得た。しかしその後、『新大陸』は忘却に沈むことになる。自分たちで歩いて行った道なのだ。海の向こうに自分たちと似た人間がいたということさえ、陸地があったということさえ忘れ去られる。氷期が終わって

水位が上がリ、道が呑み込まれたからではある。それにしてもだ。本当に人類は互いのことをきいにすっぱり忘れ去るのだ。十六世紀にはまだ、南アメリカの先端には人類の二倍の背丈があるというバタゴンの存在が言われていた。大航海時代の頃でそれだ。その地に人間がいるということは驚きでもあり、当然の神の摂理でもあり、神の創造の様々なバージョンの一つであり、テストケースであったわけだ。単に歩いてきただけだという考え方に比べて、この人類の『発見』はたちの悪いフィクションだ。自分たちの物覚えが悪かったせいで作り出さざるを得なかったフィクションであり、フィクションだと自覚してさえないフィクションだ。かつて本当に起こったことを忘れてしまったおかげで、どれだけのフィクションを、フィクションを破るために積み重ねる羽目になったと思う。忘れてしまっただけではないのだ」

と英多は言い、

「僕は、この土地を掘ろうと思う」

と、唐突に言う。突然のその宣言と、声に比べて決然とした表情にわたしは強く動揺する。まるで彼が、小説の以前のバージョンを取り返そうとしているように聞こえたからだ。そんなことは決して起こりえないとわかつてはいる。小説的な賑やかしいものだ。それはさておき、英多の家が様々

なバージョンを掘り返そうと試みようが何であろうが、わたしはそろそろ本気で自分のために、原稿のバージョン管理に取りかからねばやっていけない。原稿の形式を決め、バージョンの管理方法を決め、保持の仕方を決め、デプロイの方法を定めなければならないだろう。わたしは自分が理想とする小説の姿をこのあたりで一度夢見ておくべきだ。体裁以前の理想の姿を。

それはこんな形をしている。

わたしの理想の小説は、こんな形をしているのだ。

「定められた記号の集合と、その拡張方法を持つ」、「適度にマークアップされたテキストデータとして存在している」存在で、ここでは「全ての変更履歴が保存されており、失われるものはない。もしかすると、キーを打つタイミングまで」。マークアップは、原稿の形式はどうするのか。理想的には多分こうなる。わたしはそれを「全てが分かち書きされ、読みの情報を含んだ形で持つべきだ」。いっそ品詞の情報までを含んだ形で。たとえばこうだ。

全て名詞、副詞可能、
ベテ

が助詞、格助詞、一般、
分かち書き名詞、一般、
ワ

カチガキ、ワカチガキ
さ動詞、自立、
る、サ、サ
れ動詞、接尾、
、記号、読点、
読み名詞、一般、
の助詞、連体化、
情報名詞、一般、
ジョーホー

を助詞、格助詞、一般、
含ん動詞、自立、
む、フクン、フクン
だ助動詞、
形名詞、一般、
で助詞、格助詞、一般、
持つ動詞、自立、
ツ、モツ
べき助動詞、
ベキ、ベキ

だ助動詞、
この一つの塊がその小説における一文であり、いっそこ

まで持ってしまったって良いはずだ。このような形でデータを持ち、いまここに見えているような文字列は、ここからビルドされて出てくるものであるべきだ。わたしは実際この文章を、ローマ字 - カナ変換を用いて記しており、ある程度の分節の箇所では変換を実行しており、つまり、そこで分かち書きが可能であるという情報を無頓着に放棄しており、この世のエントロピーを増加させている。漢字への変換だって、読みで打ちこんでいるくせに、変換し終えたと知らない顔で、その履歴を捨てているのだ。ただそれを、変換箇所を、その読みを記録するエディタがあればよいだけなのに。あるいは先ほどそうしたように、MeCabによって文章を分解してから、不適切な箇所を直しておくだけでも良いのだ。それだけで、日本語における分かち書きの問題は解消する。だってあらかじめ分かち書きされているものが、筋の良い文章とされるからだ。そんなのはコストが上がりすぎると言われるかも知れないのだが、本当だろうか。そのほとんどは捨てている情報からできているのに。

理想的には、こうして書かれる小説は分散型のバージョン管理ソフトウェアによって管理されることになるだろう。Gitあたりで。そう、ここでの小説はもはや、多くの人間によって書かれることがあらかじめ想定されており、ソフト

ウェアがその共同作業を可能とする。既にオープンソフトウェアの開発で当たり前のように利用されているものが文芸に導入されるだけだ。

そこでは小説は書き換えられ続け、常に姿を変えていくことになる。

そんなものは小説ではないという方には想像してもらいたい現象があり、それは一般的に翻訳の名で呼ばれている。一冊の本の命脈を考えると、わたしは翻訳書がうらやましくなる。その母国語における、定本、底本に対してではなく、数多生み出されては改訂されて誰かに読まれて新たな並びに置き換えられ続けていく文字の連なりが。翻訳は転生じみている。別の国に何度も何度も生まれ直す小説がある。ただ固定した化石であることと、次々と変異を繰り返しつつ、広がっていくことのどちらがより生物らしく見えるだろうか。その姿は灰から飛び立つ鳥のようにわたしには見え、子孫を増やしていくように見え、バージョンを切り替えながら変化していく生き物に見える。

わたしは今この文章を、MacBook Air 11-inch・Mid 2013のOS X 10.9.3 (13D65) 上にあるMicrosoft® Word for Mac 2011 Version 14.4.2

(140509) で書いている。先ほど利用したMeCabのバージョンは0.996、これまでもたみに利用してきたRubyのバージョンはruby2.0.0p451 (2014-02-24 revision 45167) [x86_64-darwin13-i.0]で、これはそ

ろそろ2.1に上げようと思う。その環境はRuby自体のバージョン管理ソフトウェア、rbenvによって実現されており、rbenvはOS X用のパッケージマネージャー、Homebrewを用いてインストールされており、これはHomebrew 0.9.5である。コードを手軽に実行するにはiterm2のBuild 1.0.0.20140518を、コード用のエディタとしてはSublimeText 2のVersion 2.0.2・Build 2221を利用してきた。日々細かにアップデートされていくソフトウェア群を用いて作成されているこの文章は何故か、固定された完成稿へ向かっていると考えられがちであり、わたしはそれを馬鹿馬鹿しいと思っており、これについては紙であろうと電子であろうと同等だ。むしろ電子書籍の方が、複雑な作成過程と流通経路に阻害されて「更新を行い難い」状況にあり、バージョンの管

理さえできていない現状は笑止でもある。紙版の方がまだ奥付に、版数や刷数が書いてあるだけでした。

わたしにとっての理想の書物の形はだから一言で「ソフトウェア」ということになる。著者の概念よりもメンテナの概念の方が有効になる、分岐していく流れにつけられたこれは名前だ。普通、小説と考えられている存在は、そのときたまたま現前しているバージョン、ランチのヘッド、そのメンテナを担当する者が現状で最適と考えた、管理の手段が及ぶ範囲での、一つの小説、時間の断面、スナップショット

の一枚であるにすぎない。

V

アスファルトの窪みに溜まった水の表面を、油の筋が流れている。この虹色はアスファルトなるいまひとつ得体の知れない物質から湧いてくるものなのかと毎度不思議に思うのだが、いつも調べる間もなく忘れてしまう。そういえば、と続けて思い出す。雨上がり、路上をのたくるミミズを見かけるたびに、あれは一体なんなのかと、無論ミミズだとわかつてはいるわけなのだが、ミミズのそれはどういう種類の踊りなのかと不思議に思い、しかしやっぱり調べるのを忘れてしまうことと似ていると思う。水たまりをバスのタイヤが踏みつぶし、自分は今、晴天下のアスファルトを眺めつつ、ミミズに思いを馳せていたのだと考えて、羽束は時間と空間感覚の狂いを感じた。

そういえば、ミミズはあれは、狂って出てくるものだということです、と以前、#―掠人―くらびと―に聞いたことがある。ということは、調べることを全く忘れてしまうわけでもないのだ。それとも全然違う場面であつた事柄を、勝手に脈絡づけて思い出しただけなのだろうか。

暑すぎるせいかも知れない。羽束はハンカチを出して化粧

けて間もない羽束としては、「いえ、戻って参ります」と何故か丁寧すぎる口調で返事をしていた。

川南の街は石狩川の南に拓けた街である。人口およそ八万人。県庁ならぬ道庁所在地であり、あたりを走る道も県道ではなく道道であり、県警ではなく道警がいる。バスがゆつくり視界に滑り込んでくる。羽束は路線バスというものがどうも苦手だ。前から乗るのか後ろから乗るのか、先払いか後払いか、整理券があるのかないのか、どうも妙に緊張する。鉄道ならばどこも大抵乗り方が決まっているが、バスの乗り方には意外に多くの作法があつて、しかも現地の人々は他の方法がありうるとは思いつかないように当たり前の顔で乗り降りしている。地方へ行くたび、毎度緊張することになり、同じ場所でも数年経つと方式が変わってしまったりして気は抜けない。羽束は土産の袋とともに立ち上がる。荷物はロッカーに預けてあるので身軽なものだ。

今日は作家に会う予定であり、名を#―掠人―くらびとはじめ―という。まるで名前のような名字なのだが、本名だという。以前から思っていました。がクラブトというのとは不思議な読みですねと訊ねてみると、古い名だという。『新撰姓氏録』にもある」と言い、書名を聞き取れずに聞き返した羽束へ一つ頷くと胸ポケットの万年筆を取り出してノート

を押さえる。

海峡をまたいだ北の土地であろうとも、三十度を超えることは稀にある。たまの川南でそんな日にあたってしまったのは不運だが、それでも東京の湿気に比べれば空気が軽い。いや、京都に比べれば、と思う。夏の京都のそよとも吹かぬ熱気溜まりは、羽束にいつも、低地に淀んでいるという二酸化炭素でできた池を思い出させる。犬やカナリアなどを先行させて避けるのだと聞く。あるいは海の湿気を含んだ風がゆるやかにうねる大阪に比べてもまだ、と思う。あれは風というよりも、街を練り歩く神輿に近い代物だ。そのあたりと比べると、川南の夏はまるで月面のそのようにすっきりしている。

国鉄、いやJRとなったのだった川南の駅舎に併設されたバスターミナル、プラスチック製の椅子に座って、羽束はバスを待っている。折角の北海道だが、ほんの三泊、時間がとれただけである。本当は二泊にしろと言われたのだが、帰りの便の都合がつかなかったのは幸いだった。金曜の夜に帰らなければならぬというのが残念で、土曜日を休みにしてもらい、東京へ戻るのを日曜日から月曜の朝にしようかとも考えて、その旨顔色を窺ったのだが、「俺はいいよ」と編集長は言い、煙を吐いて、「お前がいいなら」と続けた。まだ新人を抜

の上にさらさらと記し、羽束へ向けてくると回して見せた。

「阿祖使主男武勢之後也」とある。「読めません」と顔を上げた羽束へ、「俺も読めん」と応えて涼しい顔をしているような人物だ。どう応対したものか当惑する羽束の名刺を眺めつつ「羽束ということだから」と言葉を切った。「撰津の出ですか」と問われて羽束は窮し、「兵庫の出です」と素直なところを答えた。「三田のあたり」と掠人が追いかけて、「山の方です」と羽束は応える。「羽束山には確か天狗がおりましたね」と掠人はまるで友人を懐かしむように言い、色々面倒になってきた羽束は「わたしです」と応えた。以来、作家とその担当としては割合上手くいっている方だと思う。まだ二年目のつき合いなのだが。

バスが四角く切られた街路を進む。ここから小一時間揺られたバス停で降り、電話を入れることになっている。駅まで迎えに行こうと言われたのだが、その暇があるなら原稿を進めて下さいと断った。掠人は極端な遅筆でこそないが、そう筆の早い方ではない。年に一冊、薄い単行本をつくることのできるだけの原稿が集まればよいといったところで、あまり売れる種類の話を書くわけでもないから、暮らしが成り立つのか立たないのか、なかなか難しい線に乗っている書き手といえ、わざとそうしているようにも見える。「羽束君」と空港

から到着を告げた電話の向こうで椋人は言った。「そうは言っても、一日にそんなに仕事なんてできないよ。たまには街へ買い出しにも行かねばならん」

椋人が言うには自分の作業は二時間で一セットになっており、一日に三セット入れれば上々だという。六時間労働ということになるが、三セットとれることなど減多にないし、一セットごとに休憩や気晴らしが必要だという。そうしなければ何を書いているのかわからなくなり、同じ繰り返しに陥ってしまい、前に戻ってやり直すことになる分、損なのだと言う。しかしその休憩を入れるおかげで以前なにをやっていたかを忘れてしまい、これもまた話が脱線していく要因となる。そのあたりの兼ね合いをみて、二時間働き、数時間休む、朝昼、夜の食後に二時間ずつ作業をするのが良いらしい。読み返しはあまりしない。読み返すのにも限界というものがあるからだ。いちいち全体を読み返していたら、やがては一日が読書だけで終わってしまうことになる。ペースはおおよそ、一時間に原稿用紙四枚ほどだという。これは羽束の担当する作家の中では速い方に属する。単純計算で一日に二十四枚ということになり、十日もあれば、椋人が一年に一冊、やつとこのことで書き上げている原稿の総枚数に達してしまう。つまり椋人は、年間、十日程度しか働いていない計算になる。「そ

ることになると思う」

「その機械の性能でしょう」と羽束。「高級な機械からは高級な小説ができて」思わず言い淀んだが続ける。「低俗な機械からは低俗な小説が生まれる」

面白いな君は、と椋人は真面目な顔で言い、「じゃあ機械はもう発達しきってしまつて、誰でも同じ機械を使えるようになったでしょう。その時、小説のときは何で変わることになると思う」

なるほど、と羽束は自分が誘導されていく先を遅まきながら自覚した。

「変わるのには、依頼する側が何を指定するだけになるということです」

「そうだよ」と椋人が縁側に寝転び笑ってみせる。いや、縁側ではなかったはずだ。北海道の椋人の家にそんな構造物はないからだ。茅葺きも瓦屋根も雨戸も縁側も井戸も蘇鉄も俺にとっては物珍しい、と椋人は言う。そういうものを目にすると、お伽噺の中に紛れ込んだような気持ちになる。俺にとつての日本はここで、内地の暮らしの方が日本ではない別物なのだ。窓は二重になっていて、屋根は無落雪仕様で、こたつは使わない。背中が寒いからだ。鮭が川を上り、羊が草を食んでいる。畑に並んでいるのは玉葱だ。カブトムシもカ

んな割り算なんかしたつて、機械じゃあないんだからさ」と不平を言うところまでは人並みだが、「そうならうとしていい」と続けるあたりが椋人である。

「楽をしたいね」

と言う。椋人曰く、自分は楽をするための労力は惜しまない人間である。その工夫のために執筆や話の筋が進まなかったとしてなんであらうか。「できるなら他の人が全部書いてくれて、原稿料だけこちらにくれるのが良いと思う」と平気な顔で言う。「小説を書く機械ができてしまえばよいと思うよ。そうしたら君は、どんな小説が欲しいかをそいつに頼めばいいわけだ。そいつはペンを取り上げて机に向かい、原稿用紙に一文字一文字、文字を記していくわけだ。どんな入り組んだお話だろうと一文字一文字頭から順に記していくし、どこで一旦中断しても、たとえ単語の途中からでも、また同じところからよどもなく話を続けることができる。息継ぎの必要がないのは、元々呼吸をしていないからだ」

「そういうことを考えている間に」と羽束。「先を進めて下さい」

でもだね、と椋人は言う。「こういうことを考えるのが、仕事なのだから仕方がない。第一、面白いと思わないかね。そういう機械がもしできたなら、本の出来というのは何で変わ

マキリもない。クワガタはいるが小さい。カエルもせいぜい小指ほどのやつしかない。

「機械なんだから、同じことを命じられたら、同じものを生産するさ」椋人は言う。「君が、ロマンスありアクションあり、涙あり、笑いあり、の感動巨編を、と言ったとする。そうしてまた別の編集者が、ロマンスありアクションあり、涙あり、笑いあり、の感動巨編を、と注文したとする。機械は一言一句同じ小説を出力するに違いない。だってそれは機械だからだ」

「作家に何を書かせることができるかは、編集者の腕に一任されるということです」羽束は言う。「つまり椋人さんが今書いているものがつまらなかったとしても、それは椋人さんのせいじゃなく、わたしが悪い、と」

「その通り」と椋人は笑い、「しかし君は人が良いな」とつまらなそうな顔になる。どこからともなく胡麻だれのかかった串団子を取り上げ、もう一本が残った皿を羽束へと向けて押しやる。蜜に絡んだ胡麻に塩味が効いている。「君がその機械へ向けて、『傑作を』と命令したとしてみよう。また別の編集者も『傑作を』を入力した場合、できあがるものは同じになるとしよう。ここまではいいかね」。羽束は頷く。「それでは、君が『傑作を書きなさい』と命令したときと、別の編集者が

『傑作をお願いします』と命令したときには、どちらがより面白い小説ができあがると思う」

「それはやはり」と羽束は頭を回転させて『傑作をお願いします』の方でしょう」

「どうして」

「やはり、丁寧に依頼した方が、相手もやる気が出ると思います」

君はやはり良い人だ、と掠人は言う。このまま編集者としてやっていけるのかどうか不安になるくらいに。いいかね、ここで君が相手をしているのは単に入力に応じて生産物を吐き出す機械にすぎないわけだ。「爆発的に売れるものを」と頼んだら「爆発的に売れるもの」を淡々と生産するような輩だ。そんな相手のご機嫌を伺ってどうする。相手は人間じゃあないのだ。だからどんな言葉をかければ『傑作』ができあがるかは全くのところ明らかじゃない。本当のところこの場合、相手が日本語を理解しているかどうかさえ定かじゃないのだ。その機械は『傑作を』と入力されたときよりも、『テケリ・リ』とでも入力された方が余程面白い小説をつくり出すかも知れないわけだ。いっそ『d 酒う』なんていう、全く意味のない並びの方が良い成績を残すことだってありうる。それともっと厄介な状況だって起こりうる。もしも何かの小説を

いうっかり腕や脚を欠いてしまうことだって珍しくない。どうだね、もしも小説の内容を指定する文章が、出来上がる小説よりも長くなってしまうのが必然ならば、絶望的なことだと感じるかね。作家はペンを操作するだけだが、編集者はそんな面倒な拳動をしめす機械を操作しなければならぬということになる。しかしだ、実際作家が、特にわたしのような書き手が直面しているのはいつもそんな状態だ。何を自分に入力として与えると、どんな出力が得られるかという実験を常に繰り返している。「不読万卷書、不行万里路、欲作画祖、其可得耶」というのはどうかね。董玄宰だ。万卷を読まず万里を行かなければ絵など書けるものではない、という。つまり入力は万卷であり万里で、君はそこへほんのささやかな入力をさらにつけ加えているわけだ。本来的には、万卷と万里の持つ情報量が圧倒的だ。君はそれを操作する短い言葉をあえるいは簡潔な振る舞いを探さなければならぬ。ほんの小さな一撃で、全体の流れを統御できるようにならねばならない。奔馬の手綱を巧みに操らなければならない。常時、大量の流れを処理している機械を操作しなければならない。ダムの水量を水質を耳だけで推測するようにして。

わかるかね。と掠人はかつて羽束に言ったことがある。

今わたしの目の前には、野の全ての獣と空の全ての鳥の姿

産みだすために必要な入力が、できあがる小説の長さよりも長かった場合はどうなる。その機械に「あ」と一言書かせる命令は一体どんなものなんだ。「あ」かね。それとも「い」かね。君が「う」と命じたら、作家機械が「あ」と書いたりするわけだ。すると君はひらがな十文字でできた文章を依頼するために、ひらがな十文字を指定することになったりする。でもそれじゃあ、求めるものをあらかじめ妙な形に変形してから入力しているのと同じじゃないかね。それならばいつそ最初から自分で書いてしまった方が早いのでは、ということになる。

素晴らしい小説を依頼するために必要な文字の量はどのくらいのものなんだろう。あるいは文字の量の問題だけに留まらないのか。君がこの原稿をとりて東京から北海道までやってくるという行為は小説の内容に関係するのかなのか。これが郵送だったら違った結果になったのか。自信を持って断言するが、それによって無論小説の内容は変わる。季節はいつか、時代はいつか、受け渡しはどうするのかで、小悦の内容なんてものは変わってしまう。そこに出てくる小道具だけの話ではない。石に刻まれている碑文を写しているわけではないからだ。木片に埋まる仏像は絶えずあやしい踊りを踊っていて、なだめすかしながら彫らねばならない。つ

があり、これはほとんど嫌がらせなのではないかと思う。どう考えてもワンルームの部屋には多すぎる客人たちだ。箱舟の中だってこれよりはましな環境だったに違いない。わたしはともかく現状を理解しようと、とりいそぎ適当な逸話を探すことになる。わたしは未だに自分で思考するよりも他人の思考を検索する方が得意だからだ。これは新年の挨拶にやってきた動物たちなのか。この数から見るとあっちゃか、締め切りを設定されてそれまでに総数を数えなければいけない種類の試練か何かか。わたしはそれら全ての動物たちのいちいちに呼びかけようとして、呼びかけようがないことに気づく。それらはまだ今のところ、「野の全ての獣」と「空の全ての鳥」にすぎず、しかし、そういう名前のものがそれぞれ一体ずつ計二体いるのではなく、ともかく膨大な数の個体が、組み合わせの限りに生まれるバリエーションを試すようにしてここにいるのだ。その気になればバージェス動物群やエディアカラ生物群や澄江動物群に属する生き物だって見いだすことができそう。野の全ての獣とはつまりそういうものを指すのではないか。そうあるべきではないのか。なんといっても「全て」の獣だ。見慣れぬ形態のものも多いが、それらは単に歴史の中で絶滅し忘れられた種というだけなのかも知れない。柔らかな体しか持たず、泥地も嫌っていたかなにかで、

一体の生き物だったりはしないのかと段々不安になってくる。何にせよ今わたしに一番必要なのはとりあえず個々を弁別する手段であつて名前であつて、できれば手軽なものであつて欲しい。全ての生き物に名前をつけると、朝起きるなり難題をふっかけられていたという、これはきつと状況だ。一体を持ち上げて皿に載せると、名前がころりと転がり出てくる、そんな仕組みが必要だろう。皿の上にはどんなものでも載せることができるべきであり、たとえ抽象的な概念だろうと名前をつけて、同一性の判定ができると助かる。

そんなものがこの世に存在するのかというと、とりあえずはもう、今日の待ち合わせに間に合うように出口まで辿り着くためには、今月の締め切りに間に合うためには、ハッシュ関数あたりを使ってお茶を濁しておくしかないだろう。ともかくも細かいところは端折つてしまつて、それはこの世に存在するあらゆるものに、固定長の名前を与える何かだ。機械的なというよりは、アルゴリズム的なアダムだ。ここではメッセージダイジェストアルゴリズム、MD5を利用することにする。セキユアハッシュアルゴリズム、SHAを利用した方が良いのはわかつているが、これはそんな厳密な話ではなく、MD5でも充分用は足りるだろう。

MD5 は暗号学的ハッシュ関数の一種であり、任意の長さ

数で統一的に名づけるという事実の方だ。しかも手軽に誰がやっても同じになるやり方だ。

「ビットで記述しうるあらゆるもの」と「文字で記しうるあらゆるもの」が異なるかも知れないことには注意が要る。文字がビットで指定されているならば、まあ、何らかの文字コードで指定されているならば、「任意の文字列」は「対応するビット列」を持つ。なぜってそれが、文字をコード化するということだからだ。ところが逆に「任意のビット列」が「対応する文字列」を持つかどうかは全く自明ではないのである、むしろ持たない。あなたが適当に0と1とをずらずらと並べていった場合には、それが意味のある文章になるか以前に、それをきちんと人間の利用する文字に置き換えることができるのかという問題が存在している。「001」という文字列と、「001」というビット列は異なるものだ。「0」という文字はアスキーコードで48だ。「4」は52で、「8」は56でコードされている。すぐメタがどうか言い出す人が世に絶えないが、それほど大仰な代物ではない。そうしないととにかく話が進まないのです。そうしているだけの話にすぎない。コンピュータが扱いうるデータは人間にとって便利な文字デー

ただけではないわけで、コンピュータ自身に使い勝手の良い言語があるし、配置があつて並びがある。文字化けが生じる

ことが「できる」のは同じビット列に対する複数の解釈系が存在するからで、あちらの言葉で意味を持たないビット列も、こちらの言葉では別かも知れない。ハッシュ関数の便利ところは、それがどの言葉で意味を持つビット列なのかに頓着せずにとにかく決まった長さの名前をつけられることだ。テキストファイルであろうとも実行ファイルであろうとも、文字コードもなにも関係なしに、`・txt`だろうと`・exe`だろうと`・out`だろうとビットの並びとして存在しうるあらゆる列に名前をつけることが可能だ。

名前の長さが有限である以上、当然、存在しうる名前の数も有限になる。128ビットということだから、可能な名前の数は2の128乗、十進数にすると340億、39桁を持つ数になり、これはIPv6のアドレス空間の広さと等しい。あくまで有限であるものの、実用上はほとんどの場合、無限として扱うことのできるような数だ。

この関数が命名に利用できるように、出てくる名前が適当にばらけている必要がある。「犬」に対してつけた名前と「猫」に対してつけた名前がどちらも同じということになると、名前で区別がつけられなくなり本末が転倒してしまう。「犬1」と「犬2」もまた違う名前であって欲しい。ハッシュ関数はそのあたりが配慮された関数であり、似たような

出現するはずなのだが、そんな計算能力はこの宇宙に存在するはずもない。ただし、正解を先に知ってさえいけば、ここでは「空の全ての鳥」を知っていれば、この「空の全ての鳥」が正解であると判断することは一瞬でできる。「空の全ての鳥」をMD5で変換し、同じであるかを確認するだけだからだ。

SHAを用いる方が良くかも知れないとしたのは、MD5には弱点が知られているからで、MD5においては、同じ名前を持つ、別々のデータを生成する方法が知られている。どんな名前に対しても同じ名前を持つ別のデータをつくれるという意味ではなく、たまたま同じ名前をもつ二つのデータをつくることができる、という意味であり、その差は大きい。しかしわたしの目標としては今この部屋を埋め尽くしている動物たちにとつと名前をつけてしまっ、部屋を出て打ち合わせに出かけることが最優先で、別にMD5で問題なんてないだろう。それにSHA系は出力ビットが長いのだ。ただでもコードの出力を貼りつけて文字数を稼いで楽をしていると言われそうところで、長いビット列なんて使いたくない。実際のところは、コードの出力結果なんて書かない方がよっぽど楽だ。一体自分は何をやっているのか。

こうしてわたしは、部屋の動物たちに自動的に名前をつけ

ものに名前をつけた場合に似たような名前が出てくることを極力避けるつくりになっている。

暗号的と呼ばれるのは、この手続きを使ってつけた名前から、もとの名前を復元することが困難だという理由による。たとえばここに「ed7ceae8e56a5db12d665f0b62b82105」という名前がいきなり出てきた場合、元の名前が何だったのかを簡単に判別する方法は知られていない。全く何の手がかりもなしに元の名を知る最も単純な方法は、総当たりに調べていくやり方だ。辞書式に全ての文字列を列挙していき、片っ端からMD5を用いて命名し、同じ名前が出現するまでそれを続ける。すぐにみつかるかも知れないし、いつまでたってもみつからないかも知れないが、元の名前の長ささえ、MD5による命名からはわからないので、粛々と作業をすすめるしかない。そうするうちに不安に襲われたりもするかも知れない。元の名前は一体、どんな記号で書かれているのか。アルファベットの組み合わせを総当たりで調べたとして、バベルの図書館全てをMD5に突っ込んだとして、その名前が出てくるかどうかは保証されない。漢字をつかっていたらどうするのか。利用可能な漢字はどこまで考えるのが適当なのか。それはもちろん、全てのビット列を収めた図書館全体を加工すれば同じ名前は必ず

ていく。ソフトウェアの個々のバージョンに識別用の名前がつけられているのと同様に。同じファイル名を名乗っているが違った内容を持つ原稿に名前をつけていく。何万文字かを収めた、一見同じみかけを持つファイルがあったとして、それが本当に同一なのかどうかを気軽に判定するにはどうすれば良いか。同一かどうかがわかれば充分ならば、こうやって名前をつけてみればよいのだ。全く同じ内容であれば、MD5は同一の名前を出力する。内容が違っていても同じ名前を出力する可能性もあるにはあるが、実用上は無視してしまっ構わない。

そうしてわたしは、自分が不意に、系譜のシステムと非常に近いところに佇んでいることを発見する。この嫌がらせのような動物たちの群れは実は恩寵だったということなのか、それともただの偶然なのか。

榎室はじつと考えてみる。全能の神はあらゆる暗号を破れるのだろうか。ある意味では。しかし人の身の榎室においては、暗号の秘密は計算量的に秘されている。たとえばここに「野の全ての獣」と「空の全ての鳥」があり、真の名をそれぞれMD5値とする。つまりここにいるのは、「346355350a7467cdcc8c93bd489eda8fe」と「ed7ceae8e56a5db12d

665f0b62b82105」の二体であると考えてみ

る。「A」と「B」の子供の名前を、両親の名前を並べた「AB」のMD5値で決めるというのはどうか。「野の全ての獣」と「空の全ての鳥」を並べたものは、

「346355350a7467cd8c93bd489eda8feed7ceae8e56a5db12d665f0b62b82105」となり、そのMD5値は、

「f85e9f4d67e2769f1d770360f8abd1de」になる。親の名前が知られば、子供の名前

が一次的に決定されるが、その暗号学的性質からして、子供の名前だけから、両親の名前を割り出すことはまずできない。神に可能かどうかは知らないが、人間の身にはまず無理だ。

ここに読み出さなければならぬ秘密が生まれ、破らなければいけない暗号が現れ、起源へと遡ることへの暗号的な可能性が誕生する。いや、これではまだ充分ではないだろう。

兄弟姉妹に違う名前が与えられる仕組みを加える必要がある。それに外部の者に勝手に親子関係を判定されうるのも厄介だ。名乗った時点で、親子関係が弱りもなしに明らかにされてしまふのは面白くない。これはもう単純に、名前「A」「B」の

間に、適当なメッセージか呪文を混ぜ込むことでもすればよい。暗号的には、このメッセージは充分長いものであるか、

ランダムであることが要請される。子供が真にその親の子供

であるかどうかを判定するには、両親の真の名と、鍵となるメッセージが必要となるわけだ。その三つを組み合わせると、子供が真の子供であることを容易に証明することが叶う。無論それを露骨に確認することは、社会的には品のない行為とされるだろうが。勿論この系譜システムでは、そのメッセージ

を忘れて再現できない、という言い訳が存在しているはずで、広い支持を受けているはずだ。世代を継ぐことに本来の意図は失われていき、何故子供を生成するときに、任意の文字列を入力するという慣習があるのかさえも忘れ去られていくかも知れない。歴とした事実は存在するが、暗号によって秘密を埋め込まれているシステムだ。こうして複室は命名する。「野の全ての獣」と「空の全ての鳥」から生まれるはじめての子を。「346355350a7467cd8c93bd489eda8feはじめての子ed7ceae8e56a5db12d665f0b62b82105」の

MD5値は、「e163b8fa20d04782b8442e31cfd5c4e0」で、これは、このシステムの中の、「野の全ての獣」と「空の全ての鳥」のはじめての子だ。疑うならば、直接確認してもらって構わない。

編集部に着信音が鳴り響き、FAXが皆の視線を瞬間集め

る。個人の机の上ではなくて、共用のスペースにそれは鎮座ましましている。存在としては特に珍しいものではなかったが、それが自分の職場にやってくるとなると話は別だ。黙って受信を終えてから知らせてくれれば良さそうところ、この機械は何故か、何かが送られてきたというところから実況をはじめたりする。思わず上げてしまった顔を机に戻す者があり、そのまま眺める者がある。FAXは何かやたらと甲高い意味のわからぬ言葉を呟きながら、紙の位置を整える準備動作へ移っていく。仕事の前に姿勢を正すようにも思え、尻の座りを直しているようにも見え、その身動きに羽束は好意を持っていて。何人かの編集部員はそのまま、緩急をつけて吐き出されていく紙の動きを眺めている。右往左往するヘッドの動きを目で追っている者もある。編集部にFAXが導入されたのはつい先月のことであり、まだその機械は真新しい。有用性を疑問視している者は多い。「自分の仕事をとられるような気がする」と言う者もある。「そもそも使い方がわからない」というのは、FAXの操作がわからないという意味ではなくて、そんなものを一体どうやって文芸誌の編集に役立てることができるのかということだ。小説の仕事というものは、

株価の推移や発注表をやりとりするのはわけが違ふ。「郵便と電話があれば必要にして充分さ」と笑う。

「電話が登場したときには、既に電報があると言われたものだよ」と言ったのは惊人で、先年、自宅を訪ねたときの台詞だ。ようやく編集部にもFAXが導入されることになりました、と土産を渡して挨拶をした羽束へむけて、惊人は盛大に噴き出してみせた。何を大仰な、ということらしい。「サイバーシン計画からかれこれ十五年も経つていうのに」と言い、首を傾げた羽束に対し露骨に肩を落としてみせて、「まあ上がりなさい」と羽束の土産を奥さんに渡した。

惊人は羽束の最初の担当作家で、それまでには東京での何かの賞のパーティーの前後、何度か打ち合わせをしたことがあるくらいである。一度遊びにくると良いと言われてやってきたのだ。本来は原稿の受け取りと、連載の方向性について相談にきた羽束だったが、その日は何故か一日中、南米、チリの革命とクーデターについて講釈される羽目になった。惊人は、南北に長い国土を覆うテレックス網と首都に置かれたメインフレームから構成された、国家経済を補佐するための分散意思決定システム、サイバーシン計画から話をはじめ、アジェンデ政権がそれを導入するに至った経緯を熱に浮かされるように話し続けた。共産主義者たちが国家を生き物として構成する実験をしていたわけだ、と惊人は言う。サイバネティクスは何もアメリカだけで発展した考え方ではない。ソ

連はサイバネティクスを共産主義を実現するのにうってつけのテクノロジと見たわけだよ。レーニンにとっても共産主義とはソヴィエトと電子化の謂いだった。機械こそが社会主義を救い、永遠に実現する存在なのだとね。しかしサイバーシン計画がイギリス人のスタッフォード・ビアによって率いられたことは興味深い。羽束は掠人の声を、まるでSF小説のあらすじのように聞いている。CIAの工作により切り崩されていくアジェンデ政権の運命を、封鎖された首都から指令を出し続けるテレックス網の活躍を、機銃掃射を受け、機甲部隊の砲撃に崩れる大統領官邸の攻防戦を、銃撃戦の中、最後のラジオ放送を行うアジェンデの話を聞く。「そういえばあれはどこに行ったかな」と掠人が本と埃に沈んだ書齋を見回し、テープレコーダーを持ち出してくる。カセットテープでできた山を探り、これだこれだと言いながら一つを取り上げる。カセットテープレコーダーから流れ出してくるのは、聞き取りにくい男の声だ。雑音の多い録音の中で一人の男が、母音の多いラテン系の何かの言葉で語りかけている。羽束は、最後のラジオ放送を行うアジェンデの声を聞いている。「この全てがほんとの話だ」と掠人は言う。チリは共産主義者の実験場になったあと、今度はピノチエトの軍政下における、フリードマン流の自由主義経済の更に過激な実験場、

場人物に人間としての尊さを付与しようという。どんな悪人であろうとも、あるいは悪人だからこそ。でも僕はそんなことをいちいち書きとめたいわけじゃない。そういうものは日常的にあくまで個人的に感じているもので充分間に合っているし、わざわざ他人から聞こうとも思わない」

それでは何を、というか連載の以降の方向はと、ようやく羽束は本題に入ることが叶った。

名前を呼ばれた羽束が顔を上げたところで、部員の一人がFAXを指差し、「掠人さんだ」と言う。目下編集部のFAXの利用頻度が一番高いのは掠人で、北海道という地理条件もあるわけだが、これは生まれつきとして目新しいテクノロジが好ましい。お調子者だということだと本人は笑っていたが、是非編集部が受信するFAX第一号の送信者となりたいものだと、川南の家で言っていた。掠人のこの、変に子供っぽい願いは、社長命令によりFAX開通式なる不思議な行事が執り行われることになったために叶わなかったが、それは子供っぽさ勝負に負けたということだと掠人は電話の向こうで笑っていた。

届いたのは今月分の連載原稿で、原稿用紙で四十枚ほどの分量がある。悪筆と言って良いが、短いエッセイ程度であればこの頃はワープロで打たれた原稿が届くこともある。まだ

シカゴ学派の箱庭になるわけだ。「チリの奇跡」と呼ばれるあれだ。中南米の国々はそれぞれに、CIAと組んだ経済政策によって締め上げられることになっていく。

そう概説していく掠人は高揚してこそのものの、それはどうも主義主張に対する共感反感に起因するものではないらしく、まるでそんなことが可能であったという事自体、そうしかたがこの世に起こりうるのだということ自体に目を輝かせる子供に似ていた。事件自体に興奮しており、なりゆきを楽しんでおり、喜怒哀楽を個々人へ結びつける様子は見えない。恐れ乍らと、その旨口を挟んでみると、「それは当然」と掠人は言う。「それは当然、僕としても個々人の内面にまで踏み込んで共感や反感を抱きたい。でも、数が多すぎるよ」と言う。「多くの、あまりに多くの人々があり見解がありそれぞれに固有の妥当性があり、文脈に応じた選択があり、でもその文脈なるものも、恣意的に切り出された極々一部分のデータにすぎない。君が一日に一万人の人間とすれ違うとしてみよう。一年で三百六十五万人、十年で三千六百万人、百年で三億六千万人だ。世界には何人の人間がいると思う。人間には事象の極々一部分しか見えないのだ。そこからは多分、どんな意見だろうと正当化する文脈や筋をみつけることができるんだろう。文学というもののそれは機能だ。あらゆる登

長い文章を打てるほどにはなっていない、と言い、「君も是非練習したまえ」と言う。「これからはワープロの時代になるよ」と続けた掠人に羽束はちよつと語気を強めて、「でも、活字にするにはどのみち専門の人に頼ることになるわけです」。どうせ雑誌用に組み直さなければならぬ文字を綺麗に印字できるという理由でワードプロセッサを使うのは二度手間ではないのかということだ。掠人は鼻を鳴らして、

「電話のときは電報がと言ひ、ファックスのときは郵便がと言ひ、ワープロの時は万年筆がというわけだ」

「実際、万年筆の方が早く書けるし見通しもいいでしょう。端にメモだつて書けるわけだし。落書きだつてできるわけだし」

「今だけだ」

「ではそのときになってから」

と澄ます羽束に掠人も、「確かにまだ面倒の方が多い。君にワープロを導入されると、僕の方の人間が増える気もする」と失礼なことを言った。「でも覚えていてくれ」と黒電話の受話器を耳に当てた掠人は話す。「君はそのうち、原稿を電子メールで受け取ることになる。組版はホットタイプからコールドタイプへ、活版から電子へ移行するんだ。熱い文化が冷たい文化に変化していく。君はこの小説を電子メールに

添付されたファイルとして受け取ることになる。いや正確には君の部下がだ。君は来月、文芸編集部を離れ、単行本編集部を経て別の雑誌の編集部へ行き、次に文庫本の編集へ異動になって、そうして編集長としてまた戻ってくることになる。そこではたまたま僕が連載をしていて、もしかしてあの連載が続いていたのではという錯覚に襲われることになる。ある意味ではそうだ。ある意味では違う。それは君が担当していたあの中断された連載の続きではない。でもそれは少なくとも同じ人間が書いているものだと言う意味ではやはり同じ連載でもある」

羽束が受け取った短編の原稿にはそんな台詞が書かれている。編集長として古巣に戻ったことへのお祝いとでもいうことだろうか、ワードのファイルに収められたその小説の冒頭部は川南の惊人の家へ原稿を取りに行く羽束の描写からはじまっている。短編によればあれは、一九八八年、八月二日（火）から五日（金）のことだったらしい。当然ながらそこには羽束の記憶にあるものとは違う羽束が立っている。ふと思えば、一九八八年の八月二日、川南の気温が本当に三十度を超えたのかをネットで調べてみる。惊人も同じ資料を見たのではないかという気分になって少し馬鹿馬鹿しい気持ちになった。サイバーシン計画について延々と聞かされたあの日

というのは、クラウド上のストレージを指すのだろう。その存在を思うたび、羽束の頭に別の作家の顔が浮かぶ。「日本語の文章の中にアルファベットやカタカナが出てくるとぎょっとして落ち着きが悪い」とその人は言う。ではどうするのが適当なのか。「雲の上の倉庫に設定を入れておきました」だろうか。とても奇妙だ。太上老君あたりがひょっこり顔を出しそうな気分がしてくる。でも英語では多分本当にそのまま、「雲の上の倉庫に設定を入れておきました」という言い方をするのだろう。それは一体どういうことか、考えるうちにわからなくなる。

丁度二十六年前のあの日、惊人と相談し、結局羽束の異動とともに中断されたあの小説を羽束は思い出してしている。それは巨大な都市の話で、書き終えられることはなかった。当時、惊人はそれを、大人数で書こうとしていた。他人に書かせたものを取り込んで、小説を組み上げようと考えていた。他人を鉛筆のように使おうとした。自分で書くことができるのは自分の文章だけだからだと言う。そこに複数の人間が出てくるのなら、それは本質的に大人数によって書かれるべきだ、と言っていた。書き方を変えなければいけないんだ、といい、読み方を変えなければいけない、と言った。そうして、まだテクノロジーが追いついていないんだ、とその試みを中断し

は、ほんのついこの間のことのように思えるが、今やワイプ口専用機の姿も見かけなくなってしまうて、スマートフォン画面にはインスタントメッセージャーからの着信が浮かんている。アプリケーションを開くと、吹き出しの中に、「原稿送りました」という文字が浮かんでいる。羽束は、最早キーボードさえなくなった小型コンピュータの滑らかな表面に指を滑らせ、「今、拝読しています」と打ち込み、送信のボタンのように見える画像データを指の腹で押さえる。さてどうしよう、と考える。知る人が知れば、この小説の登場人物が羽束自身だということはすぐにわかってしまうだろう。だから困るという何もありはしないが、ちよつとドキドキすることも確かだ。せめて名前くらいはもつと小説らしいものに変えてもらおうかと思う。ああでも、名前の由来を書いた場所があったから、あのあたりも直してもらわないといけないことになるわけだ。ただ置換するだけではすみそくないし、なんだかこの自分自身が置き換えられて別のものにされてしまふような気分がしてくる。「適宜」と短く返ってきたのは、原稿についてのやりとりは適宜、の意味だろう。吹き出しの上に「既読」の文字が浮かんで並んだ。これはまったくSFだな、と羽束は思う。なにとなく、「流星号」と打ち込みたくなる。応答されても困るわけだが。「設定を上げておきました」とメッセージャーの吹き出しが言う。上げておきました

た。羽束は机の上のキーボードを打ち、惊人が指定してきたクラウド上のバージョン管理ソフトウェアへアクセスする。そこに置かれているのは羽束には見慣れぬ、扱い慣れない形式のデータで、羽束はまだそれが、3DCADのデータだとは知らない。それは巨大な都市の三次元データで、都市計画と呼ぶには馬鹿げた建築物の集合体で集積物で、ファイル名は、#Piranesi——ピラネージ——とつけられて

いた。

V I

業務連絡です。そういえばまだ、家に文藝界が二冊届いています。

梅雨というものも随分と様子が変わってしまった、と英多は思い、でも自分が川南の出である以上、所詮他人事だという気もするのである。川南はとりあえずのところ、亜寒帯に属する島に築かれており、特筆するべき雨期は設定しなかった。台風だって減多に辿り着くことはない。温暖湿润氣候に育まれた人間とは四季の捉え方からして異なる。それは確かに、英多にも四季の感覚はある。美しいとだって当然思う。しかしそれはどうもいわゆる日本の四季とは違うようだと、大学時代、仙台に住むようになって気がついた。以来、東京、京都、大阪と転々として、なるほど日本の四季というものは、かなり限定的な近畿圏のごく一部を描写するために構築された、#ードメイン固有言語――DSLーの関数群なのではないかと思うようになってきている。歌枕の数がそのまま、その地で描写可能な事物を定めるわけだ。内地にやってきたばかりの頃はそのたびに、「連邦軍の新兵器です」と心の中で呟いていた雷などにも、もうすっかり慣れてしまつて、

思い、いやそもそもあれは生き物ではないのではと考えて、生き物であつてなにいけないのかと思う。雷は、まあ生き物ではない気もする。要するにあれは絶縁破壊なわけであろう。するとあれは傷口であり、何のと言われると、ここでの絶縁体は地表を薄い層で覆っている大気なわけだから、地球の怪我だ。人間は地球の皮膚の下に棲み着く虫で、皮膚を貫く刺し傷を見上げていることになる。大気の海の底にいて、モーゼが海を割るのを見上げるわけだ。いやしかし、と英多はまだ思案を続けて、雷は雷としてやはりああいいう生き物ということで良いのではないかと思う。それとも、その閃きの中に生き物が生まれ、死んでいるというのか。中性子星に住む生き物たちの話があつただろう。探査船が近づく一ヶ月の間に、一つの文明を興してしまう異星人たちの話だ（注…『竜の卵』ロバート・L・フォワード）。何かあんなようなやり方で、刹那の雷の中で一生を送る生き物たちだっているかも知れない。英多はちらと注を眺めて、この世はお節介に満ちているなと溜息をついた。ともかくも梅雨とはもつと、しとしととしてじめじめとして、晴れるともやむとも知れぬ雨が、もうほとんどただの高湿度としか呼びようのない層となつて地表を覆う現象のことだったのではないか。こう、ザツときてからりと晴れる、というのは印象としては

ちよつとのもものでは物足りなく思つたりする。内地の雷や台風は、この地の爬虫類や両生類が巨大であるのと同様に大きい。罌であるとかセイウチだとか、哺乳類は寒いところの方が大きいような気がするから、雷は爬虫類か両生類に属するのかと考えると少し可笑しくなる。馬鹿げていると捨てかけてから、生き物の体の大きさはつまり、熱効率で決まるわけだと考え直す。生産する熱量と放熱量から定まるわけだ。熱量の生産は組織の体積に従うはずで三次元的な量であり、放熱量は体表面の面積に従うはずだから二次元量だ。小さな生き物が細身であるのも、大きな生き物がムクムクとしているのも、体積と面積、二次元と三次元の力関係、せめぎ合いによるものだ。次元の組み合わせがプロポーションを定めていく。#ー比率――プロポーションーとはつまり美であるから、美だつてやはり、次元の数やこの世のありように依存するのだ。依存するのは当然ながら、数学的、物理的、化学的、生物的、地学的事情にだって依拠するわけだ。いやしかし変温しても顔色さえ変えない爬虫類と、恒温でなければやりにきれない哺乳類は搭載しているエンジンの種類が違うのであり、熱の利用の仕方が異なっている。たとえば内燃機関と外燃機関をそのまま並べて比べてみても意味がない。昆虫ならば南の方が大きくなる。台風は外燃機関なのかなと英多は

スコールであり、南国であり、しかし、篠突く雨とはこういうものを指すのかも知れず、沛然という形容もこうした情景のためにあるのかも知れず、氣候が変われば言葉の方も変わる道理で、時間によって隔てられている古来の日本の風景なるものが果たして、地理的な距離より近くにあるかどうかは大変怪しいと英多などと思うのだ。

英多が空模様を気にしているのは、この七月十二日に京都へ行かねばならない用事があるからで、平成26年台風第8号、ノグリーの動きが不穏であるからだ。ノグリーとはなんぞやと思つて検索すると、韓国語でいうタヌキらしい。カテゴリー4スーパータイフーンということだから、それが何かは知らないがどうも穏やかではない。長音記号の数からしてちよつと字面も日本語離れて見える。予定では、鞍馬を越えて貴船へ入るつもりでいる。どうしてそういうことになったのかというと、ボストンで会ったあの登場人物ではない人物が、それはつまりこの人物が、作者や命名装置の意のままにされる凡百の量産型登場人物ではなく、ただの現在の人物、表向きは泉鏡花の研究者をしているただの学生さんということとを言いたいわけだが、さすがにいつまでも「登場人物ではない登場人物」であるとか「非登場人物」とかしているわけにもいかないからペトロとでもしておくが、と誰のものが

よくわからない思考を英多は実行し、先日、ボストンで会ったこのペトロがたまたま日本にきているからで、ボストンにいた数日間はなんだかんだと毎日のようにランチをしながらとりとめもない会話ばかりしていたのだが、ペトロの趣味は奇妙な寺社仏閣関連施設を巡ることであるときて、概ね、地域性の強い習俗や、新興宗教がらみの建築物の話などをしていたわけである。こちらが例に出すようなものは大抵「それはもう行ってみました」ということになって手強い。「伏見稲荷大社は」「行きました」「上の方も」「それは勿論」「眼力社とか」「日本に最初に行ったときに」ということだからこれはかなりの相手である。聞けば、めばしい新興宗教の巨大施設なども既に見学してしまっている。さらに、「キリストの墓は」「行きました」「ストーン・サークルは」「行きました」といった具合で埒が明かない。「モーゼの墓は」「それは知りません」とようやく日本人としての面目を保った形だが、そんな面目もないものだと思ふ。「モーゼの墓は石川にあつてさ、公園まで整備したんだけど、手入れが行き届かなくてそこまで行くのも大変になってるんだよ。近所の羽咋はUFOで町おこしをしようとしててさ」とこちらの言うことを熱心にメモにとっている。「それは何のつながりですか」と問うのは、モーゼの墓は何の系譜であるかということらしい。

頭の中で名前を検索する様子のペトロへ向け、「あの、火星の上に存在しない運河を発見したローウェル。#——こ——ボストン——の人でしょ」

「ああ」とペトロは心得顔になり、「ケネディ家とかああいうのと同じ名家ですわね」と言う。

「火星の運河のスケッチでばかり有名だけど、あの人、日本にはまるんだよ。しかもばりばり神霊系に。能登が大好きになつてなんだか妙な日本を創造していく」

「何故能登……」と、ペトロはさすがに泉鏡花の研究者であると同時に放浪者だから、あのあたりのことは情景として浮かぶのである。

「色々読んでみたんだけど、なんかどうも結局のところ、尖ってるから、ということらしい」

「尖っている」

「能登半島は、尖ってるじゃない。だからこう先へ向けて、キューっと」

「ああ、なるほど」と応えるところが只者ではない。「なにこういう、尖ったものの先に超越がある、というか、超越を指しているからこそ尖っている」と続けたあたり呑み込みが早い。「なんかどうもそういうことらしいんだよ。そんなダイレクトに地形が尖ってるから霊地ってこともないだろうと思う

「まあ、竹内文書」言うまでもなく、れっきとした偽書である。そう断言すると気分を悪くする人があるのは知っているが、議論の余地なんてなく偽書である。

「竹内巨磨ですか。ああ、あのあたりの出身でしたわ。あれはなんでしたっけ」

「皇祖皇太神宮天津教のこと」とたずねると、「それです」と言う。

「まだあるよ」

さすがに怪訝な顔になっているので、

「確か茨城にまだあったはず」と言うのと、「今度行ってみます」とまたメモをとっている。

「石川といえはこの間、七尾の和倉温泉まで行ってきたんだけど、加賀屋つてあの有名な、要塞みたいな温泉宿があるじゃない。さすがに泊まりはしなかったんだけど、その前の弁天崎源泉公園に碑があつて『能登国和倉温泉雲湧楼之図』とか書いてあるんだけど、その右袖に、『明治二十二年 米國天文学者 パーシバル・ローエルが来た頃の和倉温泉』とかいう注意書きがあつて、なにそれと思つてよくよく見ると、碑の絵の中で、帽子を被った洋装の人物が左手を上げて海の向こうを指していてその傍らに『ローエル』って書いてあるのよ」

んだけど。能登半島が指してる先は佐渡だし、そもそも言うほど尖っていない。でも、ローウェルが地形にそういう徴を見いだすタイプだったとすると、火星の運河の形とかも気になつてくるよね」と英多が問ひ、

「とんがりが超越の方向を指し示す針だったら、網目状の地形は……そうですね、なんですかね」ペトロは物思いに沈む。

英多はふと、先日鹿児島へ行ってきたという星川のことを思い出し、星川の言うことには九州は軸の方きが違うらしい。東京から下関までは左下がりの軸、東京から北海道までは右上がりの軸が通っているが、九州の軸は南北に通る、そのままだ中韓を貫く形であるという。「なにそれ、龍脈とかレイラインとかアキシス・ムンディとか」と英多が問うと、「空気」みたいなものですかね、と星川は応え「人の流れをそう感じるのだと思います」と割合正気な応えを返した。人の体に付着してくる、それとも人がまとつて歩く、ひどく物質的なものの気配なのじゃあないでしょうか、と星川はつけ加えた。「でもあの感覚には」と星川。「海峡を渡ると方位磁針がいきなり違う方角を指しはじめたくらいの衝撃がありますよ」

「なるほど」とペトロは英多の回想を勝手に受けて、「地形で言えば江戸末期、明治のはじめに、日本の裏表がひっくり返った感じはしますね」

「裏日本、のこと」

「そうです」

「一応、今では侮蔑的な用語だったということになってるらしいから、日本では気をつけた方がいいかも。気にする人はそういうんじゃないと思うけど」

ペトロは頷き、「江戸末期まで、交易の中心は日本海側にあったわけですね。主に中国、韓国が相手だし、南蛮だって南の方からやってくる。自然と、表玄関は日本海側ということになる」

「明治期までは、日本海側が内日本で、太平洋側が外日本だったんだよ。明らかに大陸側を向いてる。それが維新で寝返りを打つようにして向きを変えたわけよ。大型船のための港湾の整備が一つ。重工業用の土地の確保が一つ。江戸を国際政治の中の首府と押し出さなければならなくなったのが一つ」

「でも山陰と言いますね」

「あの『陰』は山の北側、もしくは川の南側を指すらしいよ」
ペトロは左手でメモを続けながら、「だから今年の日本では、石川から山形あたりを回ってみようと思います」と言う。

「あのへん、あんまり鉄道ないよ」

「それが楽しいんじゃないですか」

「金星ということは、ルシファーじゃないですか」

「それか、太古に外宇宙から飛来したラヴクラフト式宇宙的恐怖とかね。鞍馬弘教の元ネタはどうも神智学っぽいから、系譜としてはブラヴァツキー夫人。あるいは英国心霊主義の擡頭。するとルシファーの線が強くなる」

「名のあるお寺だったのでは」

「鑑真の弟子がはじまりだっていうから古いよ。戦後に天台から分かれて鞍馬弘教を興したんだよ」

「ブラヴァツキー夫人ということは、十九世紀ですね」

「そう、だから新興の宗教」

「行きましょう」とペトロは言い、

「行きますか」と英多は応え、

そういうことになった。

そういえばしばらくコードに触っていないのだった。

色んなことが時代さえも無視して同時に併行していくせいで、何の作業を一体どこまでやったのだったか、下手をするとなんな話を伏線として置いたのだから全然覚えていられない。たとえば和歌の扱いなども、あれは一体どうなったのか。いやそういうえば、他人に頼んだのだったと、メモ帳を確認すると、英多とある。右に肩書きが続いて、旅行者、とあり、（下請け）と書いてある。そのあとに／で区切られて、艦長と

そういうものかも知れないと英多も思うが、ちよつと自分でやる気までは起こらない。何月に日本にくるのかと聞くと、七、八月だと言う。

「その頃は大阪にいるはずだから、近くまできたら知らせて。どこかで食事でも」と、ペトロを連れて行って面白いところはどこかと英多は考え、夏の関西ということだから、鮎か鯉といったところか。いつそ川床ということではいいのではないか。そういえば意外にこれは、と英多の顔が勢いよく上がり、ペトロは不思議そうな顔で英多を眺めた。

「鞍馬寺」と英多。

「はい」とペトロ。「義経とか鞍馬天狗とか」

「いや、鞍馬弘教」

ペトロは怪訝そうに首を傾げて、知らないという。

「鞍馬寺は魔王を祀ってるんだよ」と英多。

「仏教的な魔王はいわゆる、ロールプレイングゲームの魔王とは違うもので、それほど珍しくないのでは」

「それはそうなんだけど、鞍馬寺の魔王はほんとに魔王なんだよ。六百萬五十年前に金星から飛来して鞍馬山に座を占めたサナート・クマラを祀ってる。それが何かはわかんないけど」

ペトロは身を乗り出して、

書いてある。これは個体としての英多の設定であるのか、脈々と続く英多の家系についてのものなのかもわたしはまだ決めていない。もつとも、今検索をかけてみたところ、「これは学者の家柄であり」と第四回にあった。もしも小説がどんな長大化していったなら、とわたしは思う。検索を駆使しなければ作者も読者も一歩も進めなくなる日がくるはずで、むしろそういうものを書く工夫をするべきではないかと思う。書く速度の方が、読む速度よりも遅い以上、書き切れない小説は、読み切れない小説よりも難しい。ただ大量で読み切れないというよりも面白いのは、本当は齟齬が存在しているのに、誰もその齟齬に気づけないような大量さ加減だろう。もし現実なるものが確固とどこかにあるとして、それは絶えず食い違い、修正されつつ忘れられつつ、糊塗されながら進行していく現象なのではないかと思う。コードに触るに巻き込まれていったからであり、これはもう単純に時間がなかったからなのだが、これだってやはり、大量の情報を処理しきれていないせいだろう。このお話の進行を複室や星川、英多に丸投げしてしまうのは心苦しかったが、どうにもしようがなかったのであり、わたしは羽束や惊人の動きを抑えることさえできずにいる。わたしの仕事はこのお話を進行する

ことで、お話を、登場人物たちの未来を過去をしかるべきところへ導くことであり、それによって生活している。給金をもらっているということではなく、それゆえに存在している。語り手の存在は語ることで保証される。登場人物、あるいは語られ手がお話の中で命を持つというような形とはまた違った形態の命を持っている。何かが存在するのだから、それを作った何かはあったのだと考えるのが妥当だ、といった形で存在している。語りやめているときのわたしは存在せず、語っている間だけ存在する。わたしが自律するコードの集まりにすぎず、それを自分で書くしかないという事情などは些細な問題だ。過去を書くことができるなら、自分の誕生する過程だって書いて当然なはずだ。あなたは「わたしは自分でわたしの過去を書いた」という過去形の文章を、未来の存在が書いている文章として読むことだってできるのだから。

この数ヶ月はそれはもう、怒濤の日々で、痛みの日々で、眠られぬ夜が重なる日々で、買い出しの日々で、新調の日々で、いつ終わるとも知れぬ引き延ばされた時間の中に無時間的に存在していた時間の中に断片的に散らばっていて、今こうして過ごしているのは、ある期間が終了した向こう側の時間というよりは、ビッグバンがビッグクランチに終わり、全くの別方向へビッグバンとして新たに吹き出した時間のよう

で、用途に合わせて便利な言葉を作っているわけだから。チューリング・マシンに可能なことをそれぞれ別のやり方で実現しているにすぎないと言うならそうだ」

「だから別にどんな言葉を使ったって構わんだろう」

「別にCOBOLでもAdaでもPascalでも好きに使えば構わないさ」

「でも、モダンなプログラミング・パラダイムというものはあるわけだ。浪漫派とか白樺派とかみたいなものとして」

「なんでそんなものに追隨しなけりやならない」

「業務上の要請、コストとパフォーマンス。維持のしやすさ。更新のしやすさ、移植のしやすさ。大規模的な開発のしやすさ」

「わたしの業務はお話を進行させることにすぎない。大規模での開発は夢のまた夢だし、そもそも必要なのかもわからない」

「そのわりには手が止まっているように見えるけどな。いずれ大規模な開発が必要になる日はくるさ。俺はもう来ていると考えている。今までは小説と呼ばれることがなかったものが、小説と呼ばれるようになり、今小説と呼ばれるものもが別の呼び方をされるようになる日がだ。たとえばブラウザゲームあたりは怪しい」

なものに似ている。わたしは急速に様々な文脈を失っており、失い続けており、自身のストーリー構築者としての能力のなさにうんざりしており、言葉の足りなさを痛感しており、それは語彙の少なさではなく構文の不足で、わたしはこの時空的なトネルを抜けたあとにぼっかりと開いた紙片の中で、また別の言語に手を出そうかなと考えはじめ、そうしなければいけないと感じはじめ、でもそれはどこか、時代に残されていく感覚を引き起こすのだ。なんといってもわたしが今ここで興味を持っているプログラミング言語はLISPで、プログラミング言語としてはFORTRANに並んで太古の存在であると言える。酔狂で資源を投資するのなら、せめてHaskellかErlangにするべきだとわたしの本能は告げ、理性もそれを是認するのだが、衝動は何故か追従しない。純粋関数型言語や、遅延評価、アクターモデルを手に入れないまま、わかったようなことだけを書き続けるのにはもううんざりしているのに。

「そうは言うが」とわたしは言う。「別にそういうものはLISPでだって書けるわけだよ」

「どんな言語を使っても、任意の小説を書けるという意味ではそうだろうさ」とわたしは応える。別にプログラミング言語は計算という概念をいちいち新しくしているわけじゃなくて

「まあ、こう思ったわけだよ。ある瞬間に。この自分は自分を書き換えるコードの集合だ。プログラムの構造とデータ構造が一致したものだ。その自分が何で、LISPを知らないんだ。そんなことがあってもいいのか」

「俺は分子でできているけれど、物理学も化学も知らないがね」

「わたしは自分は意識だと考えているが、意識とは何かを知らないよ」

「LISPを使うことで意識に到るなんてことが起こりうるなら、世界中の人工知能が意識を持って、数で人類を圧倒してるだろうさ」

「LISPが、今の気分が一番合っているんだ」

「最初からそう言えばいい。好みと気分の問題なら誰もうるさく言ったりしない」

わたしは笑って、わたしはこのわたしにどう名前をつけたものかと悩む。このわたしは一体どうやって実現されているのか。スレッドか。アクターモデルか。並列計算であることは間違いないだろうと思う。一時代前のマルチタスクとは、一つのCPUを複数のタスクが列をつくって順番に少しずつ利用していくことにすぎなかった。CPUの数が増えた現在では事情が異なり、そこで交わされている言語も異なり会話

も異なる。デュアルコア、クアッドコアは珍しくもなくなった。16コア、32コア、64コアなんてものだって当たり前に存在する。64なんていう数字は大抵の小説の登場人物数を超えているだろう。そのための言語をわたしは獲得するべきだ。その間の事情を理解し、指令し、考えるための。しかしわたしの気持ちは何故かそうした社交性に背を向けてひたすらに内奥を向いており、こつこつと多重の括弧を書こうとしている。わたしはとりあえずCLISPをインストールし、対話型のインタフェースを通じてちまちまと言葉に触りはじめるが、釈然としない感じは否めない。やはりエディタが必要であり、LISPに触るにはまあ異論はあると思うけれども、Emacsを使うことになっており、Emacsはエディタ、つまりはワードプロセッサの友達だが、これはEmacsLispというLISPの方言の一つで書かれている。LISPに慣れるためのエディタを調整するのにLISPが必要となるわけで循環している。このEmacsに統合開発環境SLIMEを導入するのが定石らしいが、このあたりまでもう、LISPに興味を持ったかも知れない人の九割九分を振り落とすだろう壁の高さだ。さてなんとかSLIMEを導入したところで、そういえばとSchemeが気になりはじめ、これはまた別のLISP

用しているせいでその間の設定の共有をどうするかという問題が出てきて、これはまあクラウドでどうか、定石通りにDropboxを利用して設定ファイルを共有することにする。するのだが、Dropboxが一体どういう基準でなにをどう同期してバージョンを管理しているのが咄嗟にはわからないので不安になり、でも何らかのバージョン管理システムを採用しているはずであり、Dropboxにリポジトリを切ってSubversionとかGitとかを運用している人は、バージョン管理システムを使ってバージョン管理システムを管理していることになっていないのかとわけがわからなくなっていく、とりあえずGaucheに触り続けるのだが、その間にもキーバインドを入れ替えようとしてハマリ、目的をどんどん見失っていく。ところでこのEmacsというエディタはほとんどの操作をキーボードから行うことになっており、例えば保存はコントロールキーを押すばなしでxを押す、sを押す、というように使う。終了したいときはコントロールキーを押すばなしでxを押す、cを押す。といった操作をいちいち、せめて二十くらいは覚えなければやっていられないエディタであり、でもこれどうんざりした人はviとか使えないと思う。そんなこんなでばつばつとGaucheに触れるようになるまでにはす

方言であり、現在のLISPは大きくCommonLISPとSchemeの系統に分かれている。SchemeはMITで開発され、計算機科学の授業で使われたことで有名になり、その教科書であった『計算機プログラムの構造と解釈』は『SICP』という略称で広く知られている。とりあえずMIT-Schemeを入れてみたりもし、ついだからとHaskellとErlangもインストールしてみてもさらに混乱したりもし、色々面倒くさくなってきたので結局、Scheme処理系のGaucheを導入することにする。GaucheはEmacsと一緒に利用することで力を発揮するものだから、やっぱりEmacsに触ることになり、これに触るのはもう何年ぶりか、五、六年ぶりなのは間違いなく、仕方がないので腰を据えて設定し直すかとなるとこれはもう、いつ終わるかわからない作業になるのだが、それでもなんだかいつのまにか、今までは呪文のようにしか見えていなかった、LISPで書かれたEmacsの設定ファイルの中身の読み方がようやく少しかかるようにはなっている。草書の勉強をはじめた人みたいでもある。その設定ファイルの置き場をemacsにするか、emacs.d/init.elにするかでまた迷い、決定までの時間がかかる。二台のPCを併行して利

でに一週間近くが経過しており、実際Emacsの設定なんかは東京と大阪を往復する間に新幹線の中でやったりしたのだが、一向にどうもこのSchemeがよくわからないというか見えてこず、これはやっぱりLISPのそもそもの仕組みをわかっていないからではないのか、という気がしてきて、その一本でLISPを生み出し定義したと言われる論文、“Recursive functions of their computation by machine, Part I”をネットで探してダウンロードして眺めてみる。evalを実装するところに至り思わず笑い出したりするが、これ自体はあんまり自分が知りたいことではないようだ。もつとこう、括弧で書かれたツリー自体がダイナミックにツリーの形を変えるところが見たいわけだ。仕方がないので『SICP』に戻ってこつこつと読み進めるが、これは分厚い本であり、まあそう軽々と終わる本ではなく、LISPの入門書というよりはその名の通り、計算機の仕組みについての本であり、他の入門書を読んだ方がよいことはわかっているが、でも何故か続けて読み進めている。読みながら、このお話の行き着く先を考えている。とにかく何かもう少し実のあるコードを書かなければ、連載の体裁が整わず、話の終

わらせようがない。一番良いのは、わたし自身を書き出すわたしをわたしがここで、まさにこの場で実装してしまうことだが、そんなのは無理だと、これは連載がはじまる前に担当さんにも言っている。小説を書きはじめるプログラムなんてものを、こんなにいい加減なやり方で作ることができるはずはないのだ。私見を言えば、既存の小説を大量に取り込んで解析することにより、自発的に小説を書くようになるプログラムを作ることは無理だと思う。馬に水を吞ませるためにできるのは川へ連れていくところまでであり、人間だって読書家というだけで物を書きはじめたりはしないし、書評家や評論家がうまい小説を書くというわけでもない。二十一代集を取り込んで、似たような和歌を詠ませることだって実際のところ難しいのではないか。スパムフィルタで使われている技術を用いて、金葉和歌集を判じることくらいはできそうだけれど。金葉和歌集の三つのバージョンを判定させるわけだ。一つ目は古すぎるとして捨てられ、二つ目は新しすぎるとして捨てられ、三つ目が塩梅良しと採用された。それ以前とそれ以降の勅撰和歌集が知られているのだから、「古すぎる」金葉和歌集と、「新しすぎる」金葉和歌集を、それらのデータを利用して判定することくらいはできても罰はあたるまい。白河院を機械化するわけだ。小説を書くにはやはり、

実際のところ、原稿を書く場合には、どこに何を書くかで漢字のヒラキ方が違ったりする。新聞のように、使える漢字があらかじめ決まっているケースもある。これをいちいち確認し直さなければいけないのは馬鹿馬鹿しい。書き終えた文章を入力すると、表記揺れの一覧を出力するようなコードが欲しい。いや多分もう少しモダンなやり方があるはずであり、極々素朴なテスト・ファーストの考え方を導入することができはす。依頼の時点で、これこれの文字は使って良いです、というファイルが与えられるべきなのだ。文章を書く前にその要件を規定しておき、機械でも判定できる要素は機械にやらせてしまうわけだ。具体的にはまず、書く文章の種類によって、ユーザー辞書を切り替えられるようにしておく。どの仮名・漢字変換テーブルを利用するかを作業のたびに定めるわけだ。そうして予想される表記揺れの、どちらを採用するかを予め指定しておく。「行く」のか「いく」のか、「来る」のか「くる」のか、「良い」のか「よい」のか。「行く」とした場合「来る」とするのが適当なのかどうか。行くと来る、漢字同士で対応させるのが美しいような気もするが、わたしは何故か、「行く」と「くる」を対にするのが好きで、理由はよくわからない。ある程度かつちりとした文章のときは、「行く」と「来る」で対応させる。そういうワーク

小説を読むという作業が必要で、これは他人の小説を読めということでもあるが、それよりもまず自分の書いている文章を読めということである。まずは読むことができれば、書くことはできないだろうとわたしは思う。小説家がいち読書家であるとは無制限らず、むしろ偏りがあつた方が良くも思える。まあそれはともかくとして、このお話を終わりへと導くためにも、そろそろ手頃な目標を定めておくにしくはない。まずできそうなのは、第一回の最後の部分でやったように、出現文字の頻度の統計をとることだ。これは環境さえ整えば一瞬ででき、あまり面白そうではないが、ともかくも、日本語の文章、あるいは自分の文章における文字の出現頻度は本当に Zipf 則に従うのかを確認しておくことは悪くないだろう。そこから進んで、特に調整をしていない MeCab でとにかく文章を分解してみ、品詞ごとの統計をとるのも良いだろう。時間が許せば自分用の品詞辞書を作っていくのが正気の道だ。あまり私小説の題材向きではない気もするし、わたしは未だにこの小説は私小説だとは思えない。そうしたまっすぐすぎる方向ではなく、できれば、原稿の表記揺らぎを指摘してくれるコードあたりを書きたいところであつて、そのくらいが実現できれば、何かの意味でこの連載の意味もあると思う。なによりもわたしが嬉しい。

フローがわたしは欲しい。仮名・漢字変換テーブルだつて使い分けたい。今時、この程度のことは高望みではないだろう。テスト・ファーストの名前は、本文よりも先にテストを書くところからきている。ここでの「テスト」は漢字のヒラキ方とかそういうった、割とおとなし目のものであるけれど、あとはせいぜい、総文字数を監視できるくらいだろうか。これがソフトウェアであつたとしたなら、コードに実装されるべき機能についてのテストを書くところだが、小説の機能というのはよくわからない。「泣けるように」とか「笑えるように」とかいう機能はありえるが、それを機械に判定させるのは酷だ。依頼がきたら #1 グラフィカル・ユーザ・インタフェース——GUI——を立ち上げ、典型的な表記揺れの横に並ぶチェックボックスに印を入れて、どちらの表記を採用するかを決めていく仕組みぐらいがあつて良いだろう。ちなみにこの連載は一年程度という口約束ではじまつており、今回でおおよそ半分ということになる。どこまでいけるかは心許ない。ところでこの表記揺れ検出プログラムというのはまあ、あまりにもそのままであり実用一辺倒という気もするのであり、もう少し楽しいことをやりたい気がしないでもない。ここはやっぱり、小説の実作者でなければ知らないことを扱うべきであるかも知れない。たとえば、段落や会話用の鍵括

弧のリズムなどを監視するのはどうだろう。小説を書かない人は知らないと思うが、「鍵括弧で囲まれた会話文が、全体のどの程度の割合を占めることができるか」というのは、文体に含まれる個性である。#ー文体ースタイルーは一文だけに適用されるものではなく、地の文の調子と鍵括弧の数にはある程度の照応がある。たとえば、鍵括弧の連続だけで書かれた小説は、地の文がない、という現実ときちんと折り合いをつける必要がある、地の文だけの小説も同じだ。やわらかい文体ならば会話は長く続けられるし、漢文めいた文章の中に軽妙な会話文が大量に埋め込まれるのも妙だろう。面白い会話があったので、その会話を目の前の小説に入れてみる、というのはあまり良くない。全体の長さが決まっているなら、そこから許容される会話の長さが定まり、鍵括弧の数は決まり、そこに収まる会話を探してくるということになる。段落が全体で一つしかない小説の文章と、大体同じ長さで区切られていく小説、下半分が白くなるほど改行を連打する小説、リズムを持って伸縮する小説でそれぞれ書き方は異なるわけで、改行や鍵括弧の配分を監視するというインスペクト駆動小説というのはありうると思う。思ったのでやってみて、「①」というタイトルの短編になったのだが、他に売れていてしまったのでここに登場することはない。わたしが今最も

かれており、読者はそれを順番に読み出していくことができるが、証言の生成には時間が関係してくる。つまり、証言を聴く順番により、忘却の効果によってその内容は変化していく。中間言語の段階では、相互に矛盾することのない整合的な事件が書かれているのに、過去形がそれを崩していくのだ。これを、読者が事件の真相に到ることの可能な証言の順序をみつけるゲームとみなすことが第一段階。書き手の意地の悪さによって、このゲームは急激に悪質なものとなりうる。というのは、N人の登場人物から証言を順に聴くだけでも、N！の可能性がありうるからだ。十人いれば3628800通りということになる。三百六十二万通りだ。書き方によってはうち一通りでしか真相に至ることのできない小説というものも可能だろう。そうして第二段階としては、証言のとりかたにより、二つ以上の整合的な「真相」が登場するようなゲームも考えうる。その「真相」は中間言語で書かれた事件の真相ではないかも知れず、過去形が新たに生み出した真相でありうる。ただしこの段階ではまだ、中間言語に直接アクセスできる者は、そこに書かれた真相に触れることが可能だ。第三段階として考えるのは、その中間言語にしながらが、既に矛盾した真実を告げるというものだろう。その中間言語もまた、その前段階の中間言語から生成されたものであり、そ

有望なのではないかと思っているのは、時制を書き換えるコードと、そのためのデータ、文章の書き方、中間言語の設定だ。「たとえば（接続詞）」（わたし（名詞 代名詞））（は（助詞 係助詞））（この（連体詞））（文章（名詞 一般））（を（助詞 格助詞））（書く（動詞（自立 五段活用）））」のような中間言語を用意しておいて、「たとえばわたしはこの文章を書いた」「たとえばわたしはこの文章を書く」「たとえばわたしはこの文章を書いている」「たとえばわたしはこの文章を書くだろう」を機械的に生成することを考える。通常の文章をこの種の中間言語に機械的に変換するのは面倒くさそうだから、最初から中間言語を書くとしておく。現在形を操る技術は、今の自分を支えるもので、過去形を操る技術は回想を、回顧を、思い出を、歴史を司る技術であり、未来形はそのまま希望をほしきままにする。ここから想像を一步進めて、この中間言語を過去形に変換する際には、内容が失われるようにすることだってできるだろう。同じ中間言語に対して、一年前過去形や、十年前過去形とでも呼ぶべき物を設定できるかも知れない。過去形の中にあらかじめ、忘却が仕込まれているシステムだ。過去形に変換することで内容がこぼれ落ちていくわけだ。そこではたとえば、こんなミステリーが可能になるだろう。何人かの証言が中間言語で書

こへも過去形の浸食が及んでいたりするわけだ。あるいは単に、石板に硬く記されていた文章が最初から嘘っぱちであった、ということもありうる。こうした形式システムを小説の形に仕上げるなら、たとえば、その種のシステムが存在することを察しながらも、中間言語へのアクセス権は持たない登場人物などが出てくることになるだろう。真理がどこかに記されていると信じているが、自分がそこへアクセスすることはできないと理解している人物だ。その人物の心に疑念が兆し、自分たちにとつての真理は、呼び出し方によって変動するのではないかと疑いはじめ、そうして第三段階の問いへ達するということになるだろう。わたしはむしろそういう小説を、短編として書くべきだったような気がする。そのうちきつと書くだろう。実際にシステムを書くよりも小説を書く方が簡単だというのはどこか欺瞞の気配がある。

わたしは日々の作業の合間合間で、榎室がリポトリに上げてきた系譜のシステムに目を通していく。概ね良い線ではないかと思う。名前の生成と系譜の生成。細部を詰めようとするばかりがないが、勝手に生成されていく一本の歴史ではある。何かの意味で。しかし榎室はまだ気がついていないようなのだが、わたしたちの持つ記録装置はせいぜい、テラバイト級のものであるにすぎない。UTF-8では、一文字を

記すのに数バイトを必要とする。テラバイトとはほんの、
10⁶12 バイトにすぎない。一人の登場人物の名前を記す
のに二、三十文字、1000 バイト程度を見ておいた方が安全
だろう。更に、MD5 で作られた16 バイトの真の名前がある。
個人を特徴づける諸元があり、これに1000 バイトほど振
るとしておこう。一人の登場人物の記述に許される設定は、
原稿用紙半枚くらいということだ。歴史上、それだけの記録
を残した者はほんの一握りなわけだから、大盤振る舞いだと
言える。さてこれだけで、1 テラバイトの記憶容量を持つ宇
宙に収容可能な人数は、百万人を割り込んでしまう。最近
はハードディスクも安くなってきたから、10 テラくらいま
での投資は構わないとしても一千万人。宇宙と呼ぶには歴史
と呼ぶには随分こぢんまりとした集団だ。地球人口はそのう
ち百億人に達しようとしているわけで、まだ千倍の開きがあ
る。単に容量の問題として、われわれの設計しつつある生態
系は、存在の数に上限を持つ。無限に名前を生成していく
ことは可能だが、無限に記憶しておくことは叶わない。しか
しそうしてみても、榎室がこうして書きつつある系譜シ
ステムはそれなりに良くできていて、過去を暗号の中に畳ん
でいるのだ。時間の流れにその細部が失われてしまっても、
ふと浮き上がった名前と名前を照らし合わせて、系譜だけは

復元できる可能性が残されている。そこには暗号に秘された
歴史があるわけだ。榎室はこのプロジェクトにイザナミの名
をつけていた。

爾千引石引塞其黄泉比良坂其石置中各對立而度事戸之時伊
邪那美命言愛我那勢命爲如此者汝國之人草一日絞殺千頭爾邪
那岐命詔愛我那邇妹命汝爲然者吾一日立千五百產屋是以一日
必千人死一日必千五百人生也。

残念ながら、現状のわたしたちには、一日必千人死一日必
千人生といったところがやっつとだ。イザナギが増産に取り
組むためには、記録容量の増大が不可欠だからだ。わたした
ちが書いているのは登場人物たちの誕生だが、それと同時に
死も書いていかざるをえない。書かなくとも死んでいくこと
は間違いない。物理的な拘束により。

そうしてわたしは、予定したよりも随分と多くのリソース
を消費してしまっていることに気がつく。今回は英多とペト
ロが鞍馬寺の魔王殿に辿りつき、そこから貴船へ抜けるまで
を記すはずだったが、その分のスペースはこうして消費され
てしまった。まあ、仕方のないことだ。

わたしは急速にこのお話のコントロールを失いつつあり、
今こうして記すコンピュータとわたしの間では、一つの命が
寝息を立てている。ここ数ヶ月のわたしの混乱の源である時

間喰らいがそこで小休止をとっている。これはわたしが産み
出した存在ではない。わたしが産み出した存在に間違いない
が、登場人物としてプロジェクト・イザナミを通じて産み出
した存在ではなく、ペトロと同じく、登場人物としてではな
く産まれてきた存在であり、三時間おきにミルクをねだって
泣く。わたしの時間は分断され、これ以上この宇宙を維持で
きそうになく、一貫した思考を継続できそうもなく、この宇
宙の命運は当面数ヶ月の間、登場人物たちに一任するしか
ないだろう。まとまった時間をとれなくなったわたしは今、も
う少し小さな宇宙のことを考えている。外に出ることもまま
ならない状態ではんの数十分ずつの合間を縫って、何か新し
いことをできるだろうかと考えて、LISP でも触ることに
しようかと思ったわけだ。わたしは今、小さな生き物を育て
つつ、新たに小さな言語を学びつつあり、このお話とは全く
別の小さな本を、小さな宇宙を構想している。タイトルは
「赤ちゃんとLISP」とでもしようかと考えている。

〈つづく〉